鴻臚館跡 6

— 平成6年度発掘調査概要報告 —

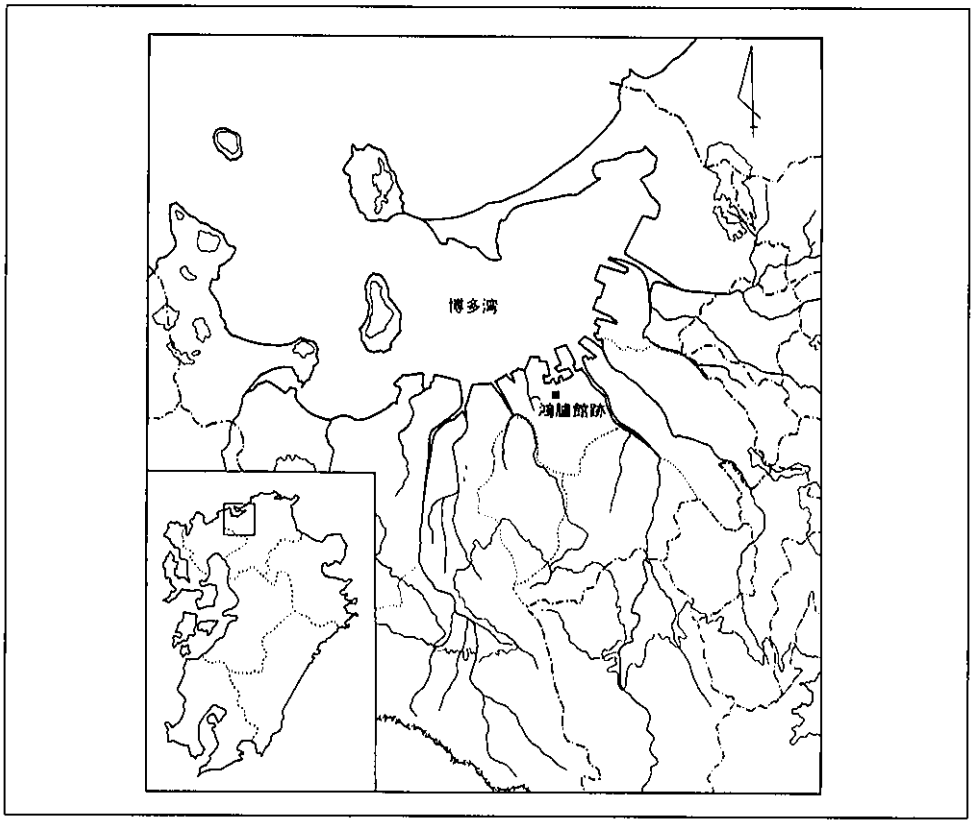
福岡市埋蔵文化財調査報告書第486集

1996

福岡市教育委員会

鴻臚館跡 6

— 平成6年度発掘調査概要報告 —



平成8年

福岡市教育委員会



(1) 鴻臚館跡周辺景観（南から）



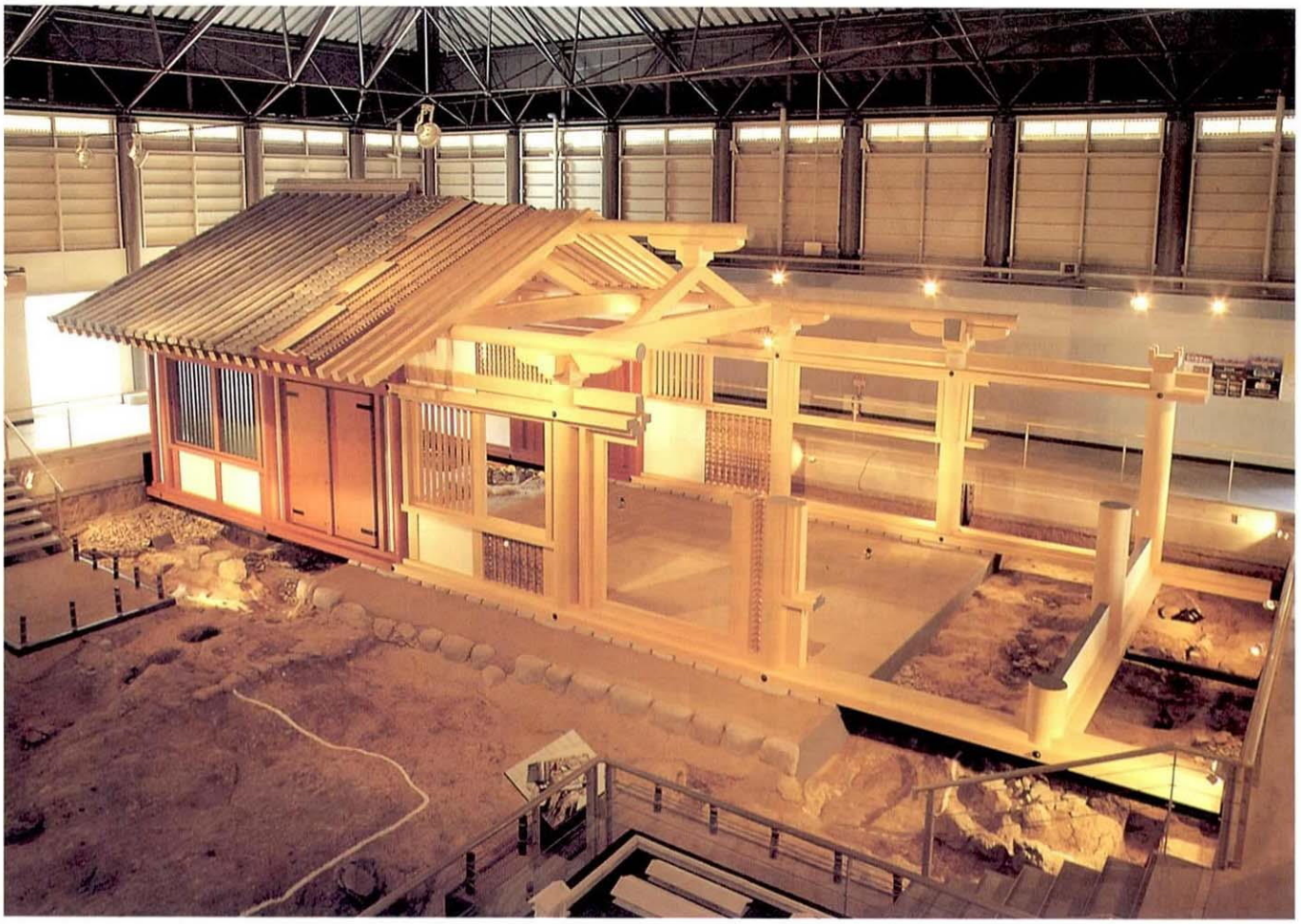
(2) 鴻臚館跡第Ⅰ期整備地全景（北東から）



(1) 第28次調査区全景（南から）



(2) 第27次調査区整地層下部柱穴検出状況（西から）



(1) 展示館内建物模型（北東から）



(2) 奈良時代東門・塀・掘立柱建物遺構表示の状況（北東から）



(3) 平安時代礎石建物遺構表示の状況（南東から）

序

わが国の古代における外交施設である鴻臚館跡は、昭和62年末に、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンドの改修工事の際に発見されました。昭和初期に故中山平次郎博士が当該地に推定されて以来、実に60年を経て、私たちの目の前にその姿の一端を現した鴻臚館跡からは、多量の中国産陶磁器をはじめとする国際色豊かな遺物が出土し、往時のアジア外交を髣髴とさせました。さらに華麗な軒先瓦や瓦磚は迎賓館としての「鴻臚館」の姿を浮かび上がらせました。

この鴻臚館跡発見のニュースは、マスコミに大きく取り上げられ、市民の関心を高めることとなり、いわゆる「鴻臚館ブーム」を呼び起しました。本市はその当時、市制百周年を迎えアジア太平洋博覧会の準備中でありましたが、鴻臚館跡の発見はまさに「海に開かれた活力あるアジアの拠点都市」づくりをめざす本市の歴史的原点の再認識につながるものでした。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を図るために、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を現在推進しております。

本書は、平成６年度に実施した発掘調査の概要報告書です。本報告書が文化財に対する御理解と御認識の一助となれば幸いであります。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の完成にいたるまで、深いご理解とご協力を頂いた大蔵省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁、福岡県教育委員会の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成８年３月15日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　　言

1．本書は、平成６年度に実施した鴻臚館跡調査（FUE28・30）と第Ⅰ期整備事業に伴って実施した発掘調査（FUE27）の概要報告書である。
2．本書で用いた地図は、Fig,2に国土地理院発行五万分の１地形図（NI-52-10-11/福岡11号）福岡を、Fig,３に福岡市都市計画図NO 60・61・71・72を使用した。
3．本書で用いた方位は、平面直角座標系第Ⅱ座標系であり、磁北方位は西偏６° 20′である。
4．遺構は通し番号をつけた後、遺構の性格を表記したアルファベットを番号の前に付した。遺構番号等については平成４年度までの調査時のままである。

棚列・塀；ＳＡ○○、　井戸　；ＳＥ○○、
池・堀　；ＳＧ○○、　柱穴　；ＳＰ○○、
建物跡　；ＳＢ○○、　道路または馬道；ＳＦ○○、
溝状遺構；ＳＤ○○、　性格不明の土壙・竪穴；ＳＫ○○
またはＳＸ○○

5．本書の執筆分担は、第２章１と第３章２を瀧本正志・田中壽夫が、その他を田中が担当した。編集は田中が担当した。
6．編集に際しては、整理調査員　宮園登美枝、整理作業員　寺村チカ子、山口玲子、堀一恵、金石邦子、真鍋晶子、藤戸紀子、早川晃代の補助を受けた。
7．鴻臚館跡の調査に係わる出土遺物・記録は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

本文目次

第1章　序　説…… 1
1．調査計画…… 1
2．調査体制…… 2
(1) 発掘調査および整備指導…… 2
(2) 発掘調査・整備事業主体…… 2
3．既往の調査…… 4
4．平成6年度の発掘調査と整備事業の概要…… 6
(1) 発掘調査…… 6
(2) 第Ⅰ期整備事業…… 6
第2章　調査の記録 …… 7
1．第27次調査（調査番号9420）…… 7
(1) 調査の概要…… 7
(2) 展示館東側の調査…… 8
(3) 野球場周回道路部分の調査……12
(4) 展示館北側の調査……12
(5) 展示館内の調査……12
(6) 小結……13
2．第28次調査（調査番号9432）……14
(1) 調査の概要……14
(2) 遺構遺物各説……16
(3) 小結……28
3．第30次調査（調査番号9463）……30
(1) 調査の目的……30
(2) 調査の概要……30
(3) 土層断面および盛土造成の土層堆積状況……31
(4) 小結……31
第3章　結　語……32
1．旧地形復元からみた範囲推定……32
(1) 旧地形の復元……32
(2) 鴻臚館跡の範囲推定……33
2．建物施設変遷の再検討……34
(1) 問題の所在……34
(2) 遺構群の構成……34
(3) 遺構群の先後関係について……34

挿図目次

Fig, 1　鴻臚館跡と周辺遺跡(1/50000) …… 3
Fig, 2　鴻臚館跡発掘調査位置図…… 5
Fig, 3　第27次調査風景…… 6
Fig, 4　第28次調査風景…… 6
Fig, 5　展示館および遺構整備全景(北東から)…… 6
Fig, 6　第27次・30次調査地点位置図…… 7
Fig, 7　昭和63年～平成6年度調査遺構分布図(1/300) …折り込み
Fig, 8　展示館東側遺構分布図(1/80)…… 9
Fig, 9　展示館東側土層断面図(1/80)……10
Fig,10　表採・柱穴・整地層出土遺物(1/3・1/4)…11
Fig,11　SX139平面および断面図(1/40) ……13
Fig,12　第28次調査区位置図(1/2000)……14
Fig,13　第Ⅰ・2検出面遺構分布図(1/200) ……15
Fig,14　第28次調査区土層模式図……16
Fig,15　SX147・第2検出面出土遺物(1/3・1/4)…17
Fig,16　SD132・137・151・177、SE148
　出土遺物(1/3・1/4)……18
Fig,17　第3・4検出面遺構分布図 ……折り込み
Fig,18　第28次調査区土層断面図(1/80)……19
Fig,19　SA166・178・179、SD165平面および
　断面図(1/50・1/60)……20
Fig,20　SA180・SD187平面および
　断面図(1/60)……21
Fig,21　SB164平面および断面図(1/80) ……21
Fig,22　SX167・183出土遺物(1/3・1/4)……22
Fig,23　SX168平面および断面図(1/50) ……23
Fig,24　SX168出土遺物(1/3・1/4) ……23
Fig,25　SK169平面および断面図(1/50) ……24
Fig,26　SK169出土遺物(1/3・1/4) ……24
Fig,27　SK170平面および断面図(1/50) ……24
Fig,28　SK170出土遺物(1/2・1/4) ……25
Fig,29　SX174平面および断面図(1/50) ……25
Fig,30　SX174出土遺物(1/3・1/4) ……25
Fig,31　SX182・184出土遺物(1/3) ……26
Fig,32　Ⅱ砂層・第1トレンチ・撹乱土壙
　出土遺物(1/3・1/4)……27
Fig,33　第3・4検出面出土遺物(1/3・1/4)……27
Fig,34　第28次調査出土文字瓦拓影(1/5) ……28
Fig,35　第30次調査区平面図(1/250) ……30
Fig,36　福岡城跡土塁土層断面図(1/80)……31
Fig,37　ボーリング調査地点位置および
　地山等深線図(1/5000)……33
Fig,38　平成4年度までの第Ⅰ期・第Ⅱ期
　遺構推定配置図……35
Fig,39　平成6年度段階の第Ⅰ期～第Ⅲ期
　遺構推定配置概念図……36

図版目次

巻頭図版1　(1) 鴻臚館跡周辺景観（南から）
　(2) 鴻臚館跡第Ⅰ期整備地全景（北東から）
巻頭図版2　(1) 第28次調査区全景（南から）
　(2) 第27次調査区整地層下部柱穴検出状況
　（西から）
巻頭図版3　(1) 展示館内建物模型（北東から）
　(2) 奈良時代東門・塀・掘立柱建物遺構表
　示の状況（北東から）
　(3) 平安時代礎石建物遺構表示の状況
　（南東から）
PL, 1　(1) 第27次調査区遺構分布状況（東から）
　(2) 第27次調査区北西隅遺構検出状況(東から)
PL, 2　(1) 掘立柱建物SB324検出状況（南から）
　(2) 掘立柱建物SB324検出状況（西から）
PL, 3　(1) 展示館内炉跡SX139 完掘状況（西から）
　(2) 炉跡SX139側面状況（南から）
　(3) 第27次調査出土遺物
　(4) 野球場周回道路部分布掘り遺構検出状況
　(5) 布掘り遺構（西から）
PL, 4　(1) 第28次調査区調査前現況（北から）
　(2) 平成5年度第22次調査状況（北東から）

PL, 5 (1) 第28次調査区全景（南から）
(2) 第28次調査区完掘状況（南から）
PL, 6 (1) 第１面西半部遺構検出状況（西から）
(2) 第１面西半部遺構検出状況（北から）
(3) 第１面東半部遺構検出状況（南西から）
PL, 7 (1) 第２面遺構分布状況（南から）
(2) 第２面遺構分布状況（東から）
PL, 8 (1) 第２面西半部遺構分布状況（東から）
(2) 第２面遺構分布状況（西から）
PL, 9 (1) 西側部分土層断面（南から）
(2) 石列ＳＡ178検出状況（北から）
PL,10 (1) 第４面西半部遺構分布状況（北から）
(2) 第３面真砂土整地面検出状況（東から）
PL,11 (1) 土壙ＳＸ168掘り下げ状況（北から）
(2) 土壙ＳＸ169掘り下げ状況（南から）
(3) 石列ＳＡ178完掘状況（北から）
PL,12 (1) 石列ＳＡ166・178、溝ＳＤ165配置状況（西から）
(2) 溝ＳＤ165、瓦礫群ＳＸ167部分拡大（西から）
(3) 石列ＳＡ178北端基底部遺存状況（東から）
PL,13 (1) 土壙ＳＫ170遺物出土状況（東から）
(2) 石列ＳＡ179遺存状況（東から）
(3) 溝ＳＤ173南壁石組み遺存状況（北から）
(4) 土壙ＳＸ174完掘状況（南から）
(5) 石列ＳＡ180、溝ＳＤ187検出状況（北から）
(6) 石列ＳＡ180、溝ＳＤ187検出状況（東から）
(7) 瓦組桝ＳＸ186出土状況（東から）
(8) 丸瓦組排水用暗渠ＳＤ181（北から）
PL,14 第28次調査出土遺物(1)
PL,15 第28次調査出土遺物(2)
PL,16 第28次調査出土遺物(3)
PL,17 (1) 福岡城三ノ丸東郭南面土塁現状（西から）
(2) 断面観察用トレンチ掘り下げ状況（北から）
PL,18 (1) 展示館および館外の遺構整備完成状況
（北東から）
(2) 遺構整備状況（第Ⅰ期東門跡と塀布掘り
地業跡の表示）（北東から）
(3) 展示館および遺構整備状況
（第Ⅲ期礎石礎石建物跡の表示）（南東から）

表目次

Tab, 1 鴻臚館跡調査中期計画表…… 1
Tab, 2 福岡城跡調査一覧…… 4
Tab, 3 第28次調査遺構別出土遺物一覧……29
Tab, 4 各遺構群の概要と先後関係……36

第1章　序　説

1．調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は昭和62年末の平和台野球場外野席スタンドにおける発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、その全容解明のための本格的な発掘調査が開始され、現在に至っている。

鴻臚館跡の調査計画は、平成５年度第２回指導委員会で了承を受けた中期計画に従い実施している。

中期計画は、鴻臚館跡推定地は国史跡福岡城跡に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議のうえ調査可能な地点を選び、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定したものである（Tab, 1）。

第Ⅰ期調査は平和台野球場南側部分を対象に、昭和63年度～平成４年度にかけて調査を行った。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。またこの地区は、平成５年度から７年度にかけて、平和台野球場撤去後の本格的整備までの当面の仮整備という位置づけで第Ⅰ期整備を実施している。

第Ⅱ期調査は、平成５年度から福岡城三ノ丸西北郭（通称「舞鶴公園西広場」）を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館跡関連の遺構と遺物の有無確認と旧地形復元を目的として実施している。平成６年度はその第２年次にあたり、福岡城跡域内における調査次数では第28・30次調査にあたる。また第Ⅰ期整備工事に伴う第27次調査も行った。

Tab, 1 鴻臚館跡調査事業中期計画表

		対象地区	昭62～平4	5年	6年	7年	8年	→15年	→20年	→25年	備　考
発掘調査	緊急調査	平和台球場	━								鴻臚館跡の発見
	第Ⅰ期調査	旧テニスコート	━								指導委員会の設置 本格的調査の開始 第Ⅰ期整備対象地
	第Ⅱ期調査	西広場		━	━						範囲確認調査 旧地形の復元
	第Ⅲ期調査	球技場周辺				┅	┅	┅			範囲確認調査 平成７年度から野球場の調査が可能となる時期迄
	第Ⅳ期調査	野球場南区						┅	┅		野球場撤去後に調査着手 （５ヶ年計画）
	第Ⅴ期調査	野球場北区							┅	┅	野球場撤去後に調査着手 （５ヶ年計画）
整備	第Ⅰ期整備	旧テニスコート		━	━	━					平成７年度完成
	第Ⅱ期整備	野球場跡地						┅	┅	┅	平成23年度頃に完成予定 （10ヶ年計画）

2．調査体制

平成6年度の発掘調査と整備事業を行うにあたっては、下記の調査組織で実施した。

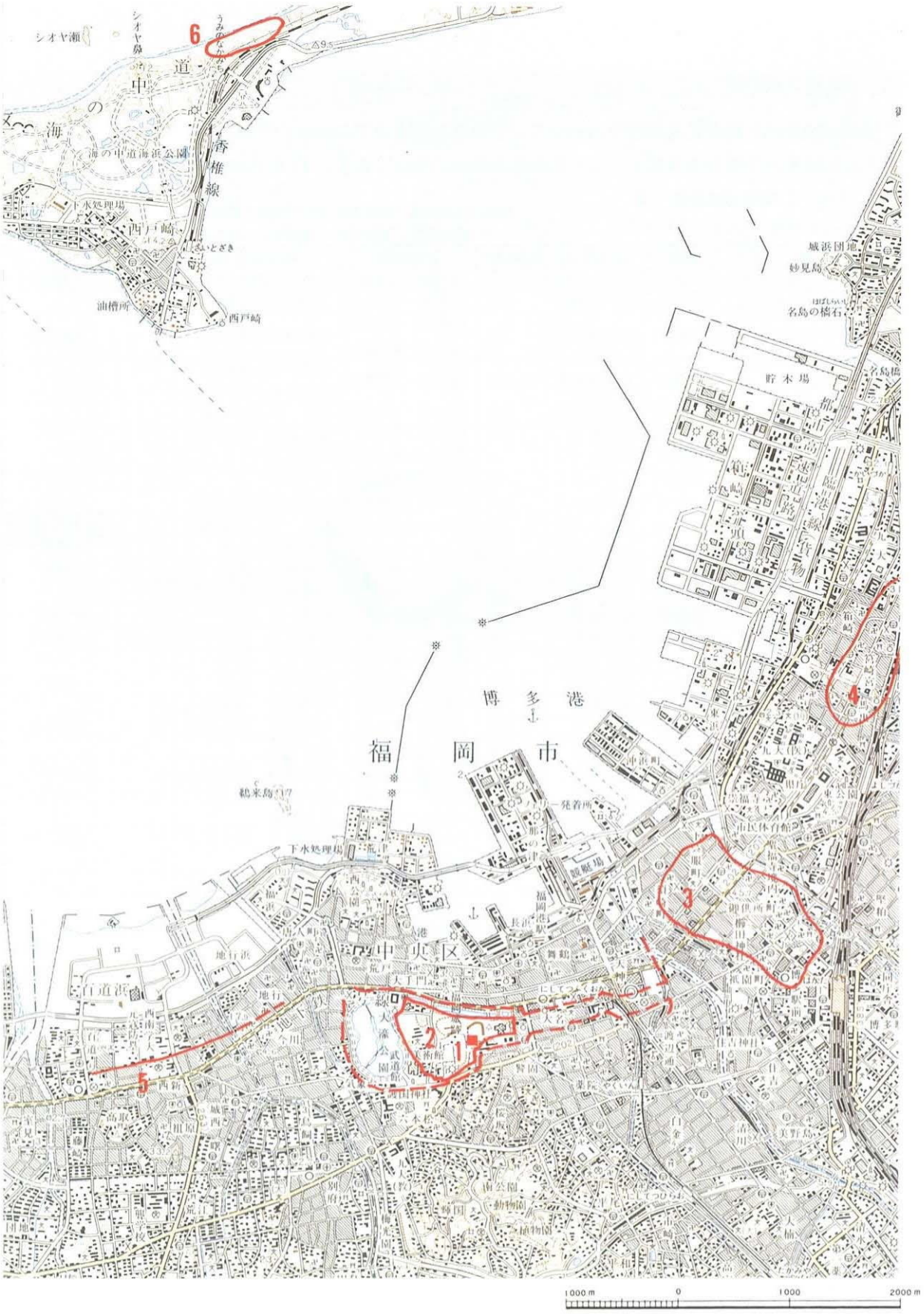
(1) 発掘調査および整備指導

鴻臚館跡調査研究指導委員会

委員長	東京女子大学名誉教授	平野邦雄	国史学			
副委員長	九州大学名誉教授	横山浩一	考古学			
委員	大阪府文化財調査研究センター理事長	坪井清足	考古学			
	前奈良国立文化財研究所長	鈴木嘉吉	建築史学	福岡大学教授	小田富士雄	考古学
	奈良国立文化財研究所長	田中　琢	考古学	九州大学教授	西谷　正	考古学
	福岡県文化財審議会委員	渡辺正気	考古学	岡山大学教授	狩野　久	国史学
	九州歴史資料館副館長	石松好雄	考古学	福岡大学教授	川添昭二	国史学
	九州芸術工科大学教授	杉本正美	造園学	学習院大学教授	笹山晴生	国史学
	瑞穂短期大学教授	澤村　仁	建築史学	山口大学名誉教授	八木　充	国史学
	京都造形芸術大学教授	中村　一	造園学	東京大学助教授	佐藤　信	国史学
	工学院大学教授	渡辺定夫	都市工学			

(2) 発掘調査・整備事業主体

調査・整備主体	福岡市教育委員会教育長	尾花　剛
	文化財部長	後藤　直
調査総括	文化財整備課長	古西憲輔
庶務担当	管理係長	後藤晴一
	管理係	林 国広
調査・整備担当	文化財整備課主査	田中壽夫
	文化財主事	瀧本正志
	整理調査員	宮園登美枝
調査作業員	家村冨基郎、儀村博男、梅崎　元、大橋善平、大村芳雄、嘉藤栄志、斎藤善弘、島津明男、高田甚一郎、堤　篤史、中尾　亨、仲野正徳、ピータ・フェルナンドプル、佐藤圭介、大庭貞子、岡　毅、井上晶子、西山めぐみ、藤林昭博、	
整理作業員	寺村チカ子、堀　一恵、金石邦子、真鍋晶子、大石江里子、広澤亜衣、山口玲子、藤戸紀子	



Fig, 1 鴻臚館跡と周辺の遺跡（1/50000）

1．鴻臚館跡
2．福岡城跡（国指定史跡）
3．博多遺跡群
4．箱崎遺跡跡
5．元寇防塁跡（国指定史跡）
6．海の中道遺跡

3．既往の調査

福岡城跡地内史跡指定範囲内外あわせて、平成６年度末までに32地点の調査が実施されている。そのうち鴻臚館跡発掘調査事業として実施されたのは13地点である。Tab, 2 にその内訳を示した。

Tab, 2 福岡城跡調査一覧

（平成６〈1994〉年度まで）

凡例　史跡整備；教育委員会所管事業、公園整備；都市整備局所管事業
確認調査；福岡城跡・鴻臚館跡の調査。工事名のある調査は緊急調査

調査番号	次数	地　区	史跡内外区分	調査原因	調査面積㎡	調査期間	調査担当者	文　献	備　考
——	A	三ノ丸中央部	史跡内	テニスコート建設	——	510800～3日間	九州文化総合研究所	1・7・11	鴻臚館跡Ⅰ次
——	B	三ノ丸西北部	史跡内	国病院建設	——	590626～590702	文部省文化財保護委員会	1	
6301	1	三ノ丸東郭	史跡内	裁判所建設	596	631007～631105 640327～640331	福岡県教育委員会	2	鴻臚館跡２次
7605	2	内堀外壁	史跡外	地下鉄建設	14,900	761201～771008	折尾　学、池崎譲二 浜石哲也、山崎龍雄	4	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301～780630	折尾　学、池崎譲二	4	
7948	4	御鷹屋敷跡	史跡内	史跡整備	2,200	790719～790811	飛高憲雄、力武卓治	3・8	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317～820326	田中壽夫	4	
8343	6	祈念櫓跡	史跡内	史跡整備	36	840201～840612	井沢洋一		櫓復原整備
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601～840612	福岡県教育委員会		肥前堀１次
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700～850800	折尾　学、山崎純男	9	肥前堀２次
8747	9	三ノ丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225～880120	山崎純男・吉武　学	11・14	鴻臚館跡３次
8829	10	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727～881210	山崎純男、吉武　学	11・21	鴻臚館跡４次
8865	11	西～南縁土塁	史跡内	公園整備	500	880727～881210	山崎純男、吉武　学	10	
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107～881126	柳沢一男	12	肥前堀３次
8910	13	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,200	890420～891207	山崎純男、吉武学	11・21	鴻臚館跡５次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011～891021	菅波正人	13	肥前堀４次
9005	15	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,300	900409～910131	山崎純男、吉武　学	11・21	鴻臚館跡６次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301～910331	山崎純男、吉武学	15	
9130	17	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,000	910501～920331	山崎純男、瀧本正志	16・21	鴻臚館跡７次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301～920331	瀧本正志		
9218	19	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,670	920615～921030	山崎純男、瀧本正志	17	鴻臚館跡８次
9236	20	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910～930331	山崎純男、瀧本正志	17・21	鴻臚館跡９次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301～930331	瀧本正志		
9326	22	三ノ丸西部郭	史跡内	確認調査	450	930816～940228	田中壽夫、瀧本正志	19	鴻臚館跡10次
9345	23	追廻門南側堀	史跡外	公園整備	220.3	931213～940228	井沢洋一	18	
9353	24	本丸西縁部	史跡内	公園整備	80	931211～931221	田中壽夫、瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡	史跡内	史跡整備	65	940301～940328	田中壽夫、瀧本正志		
9412	26	赤坂門石垣	史跡外	変電所建設	430	940525～940806	吉武　学		
9420	**27**	**三ノ丸中央部**	**史跡内**	**史跡整備**	**50**	**940606～940731**	**田中壽夫、瀧本正志**	**20(本報告)**	**鴻臚館跡11次**
9432	**28**	**三ノ丸西部郭**	**史跡内**	**確認調査**	**850**	**940801～950320**	**田中壽夫、瀧本正志**	**20(　〃　)**	**鴻臚館跡11次**
9451	29	三ノ丸東部郭	史跡内	施設建替	1024	941101～950130	力武卓治		
9463	**30**	**三ノ丸南側土塁**	**史跡内**	**確認調査**	**60**	**950201～950217**	**田中壽夫、瀧本正志**	**20(　〃　)**	**鴻臚館跡11次**

調査報告書・文献一覧

1	高野孤鹿	『平和台の考古史料』		1972
2	福岡県教育委員会	「史跡福岡城発掘調査概報」		1964
3	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 59集	1980
4	福岡市教育委員会	「福岡城址－内堀外壁石積の調査－」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集	1983
5	池崎譲二・森本朝子	『福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集所収	1983
6	弓場知紀	『出光美術館の高野コレクション』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集所収	1983
7	九州大学考古学研究室	『九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集所収	1983
8	福岡市教育委員会	「筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷図録編」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 59集	1990
9	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集	1986
10	福岡市教育委員会	「福岡城跡・Ⅳ－内堀外壁石積の調査－」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集	1991
11	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡１　発掘調査概報」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集	1991
12	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第３次調査報告」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集	1992
13	福岡市教育委員会	「福岡城肥前堀第４次調査報告」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集	1992
14	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡２　発掘調査概報」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集	1992
15	福岡市教育委員会	「福岡城　月見櫓」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集	1992
16	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡３　発掘調査概報」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集	1993
17	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡４　平成４年度発掘調査概報」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第372集	1994
18	福岡市教育委員会	「福岡城跡第23次調査報告」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集	1995
19	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡５　平成５年度発掘調査概報」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第416集	1995
20	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡６　平成６年度発掘調査概報」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第486集	1996
21	福岡市教育委員会	「鴻臚館跡７　鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第487集	1996

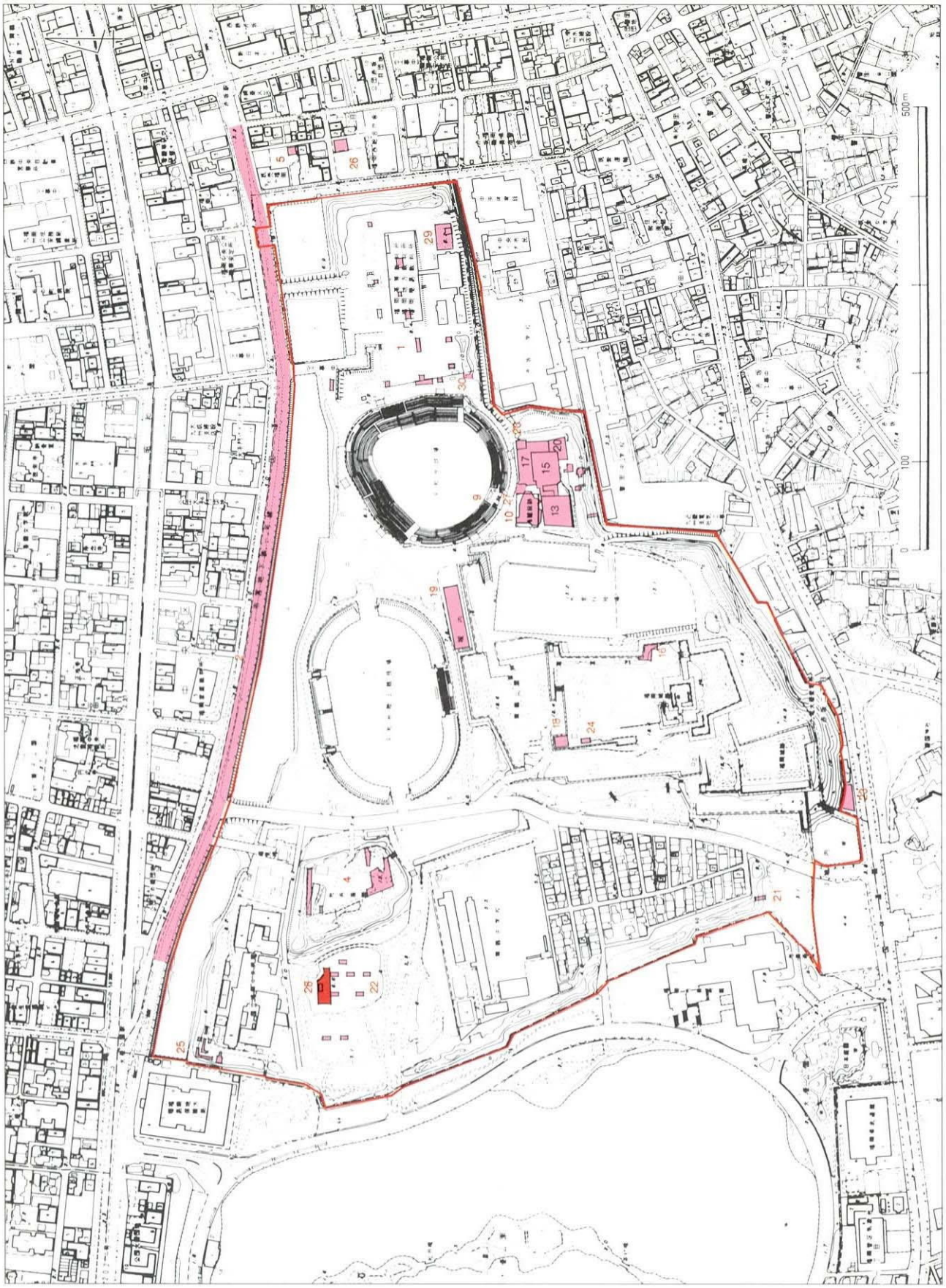


Fig. 2 鴻臚館跡発掘調査位置図

4．平成6年度の発掘調査と整備事業の概要

(1) 発掘調査

平成6年度の鴻臚館跡関連の発掘調査は、3地点について実施した。福岡城跡関係調査では第27次、第28次、第30次調査にあたり、鴻臚館跡発掘調査事業としては第11次調査にあたる（Tab, 1・2）。

調査次数については、福岡城跡関係調査の通し次数を付して表記する。

第27次調査地点は、鴻臚館跡第Ⅰ期整備事業の展示館建築工事に先行して実施したもので、これまで未調査だった展示館東側部分と正面道路部分について遺構の有無確認を目的に行った。また、展示館内については、復元建物模型を製作設置する部分SB31に重複している中世の炉跡SX139と、第Ⅰ期遺構である掘込み地業跡SK140の断面観察、第Ⅲ期遺構である礎石建物SB32の礎石据付け掘方の確認調査を行った（12頁）。



Fig, 3 第27次調査風景

調査期間は6月6日～7月31日で、調査延面積は50㎡である。

第28次調査は昨年度に引き続いて、第Ⅱ期調査対象地である福岡城跡三ノ丸西郭部分の調査を行った。この地点では、福岡城築城前の旧地形の復元とともに、鴻臚館関連遺構の有無の確認と西限域の範囲推定を主な目的として実施した（14頁）。



Fig, 4 第28次調査風景

調査期間は平成6年8月1日～7年3月20日で、調査面積は約850㎡である。

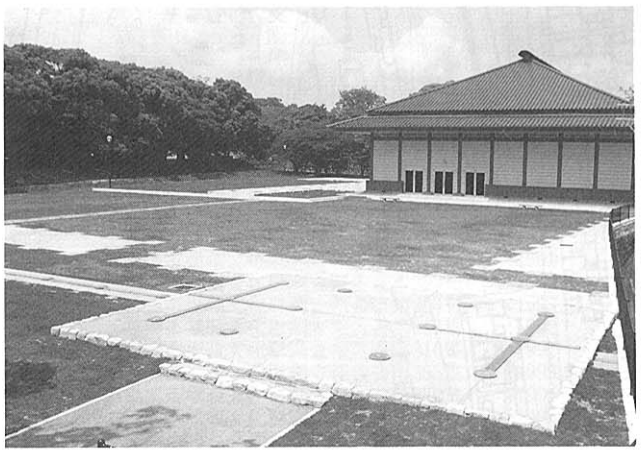
第30次調査は、福岡城三の丸東郭南面土塁の一部を対象にして、土塁の土層堆積状況とその下部の整地状況を観察した。

調査期間は平成7年2月1日～2月17日で、調査面積は60㎡である。

これらの発掘調査に並行して、地質調査を目的としてボーリング調査を実施した。平成元年度から実施しているボーリング調査地点数は53地点で、今年度も含めると63地点になる。今年度の調査は第28次調査地点周辺を重点的に選び実施した。

(2) 第Ⅰ期整備事業

平成5年度から行っている整備事業は、6年度が2年次である。平成5年度は、新展示館建築設計と、館外の遺構整備工事実施設計を行った。6年度はこれを受けて、新展示館建設工事と展示製作、館外の遺構整備工事を行った。また平安時代の復元建物模型の基本および実施設計を進めた。建物模型は、平成7年7月下旬に完成し、同年8月上旬に整備事業が完了した。



Fig, 5 新展示館・遺構整備全景（北東から）

第２章　調査の記録

１．第27次調査（調査番号9420）

(1) 調査の概要（Fig, 6～8、PL, 1～3）

第27次調査は、鴻臚館跡第Ⅰ期整備工事に先立ち、構造物を設置する範囲や、既存建物によって未調査となっていた地域を対象として、遺構の確認調査を実施した。調査地は展示館内と館外4ケ所の5地点で行った。調査では、鴻臚館に関連する遺構が数多く検出された。

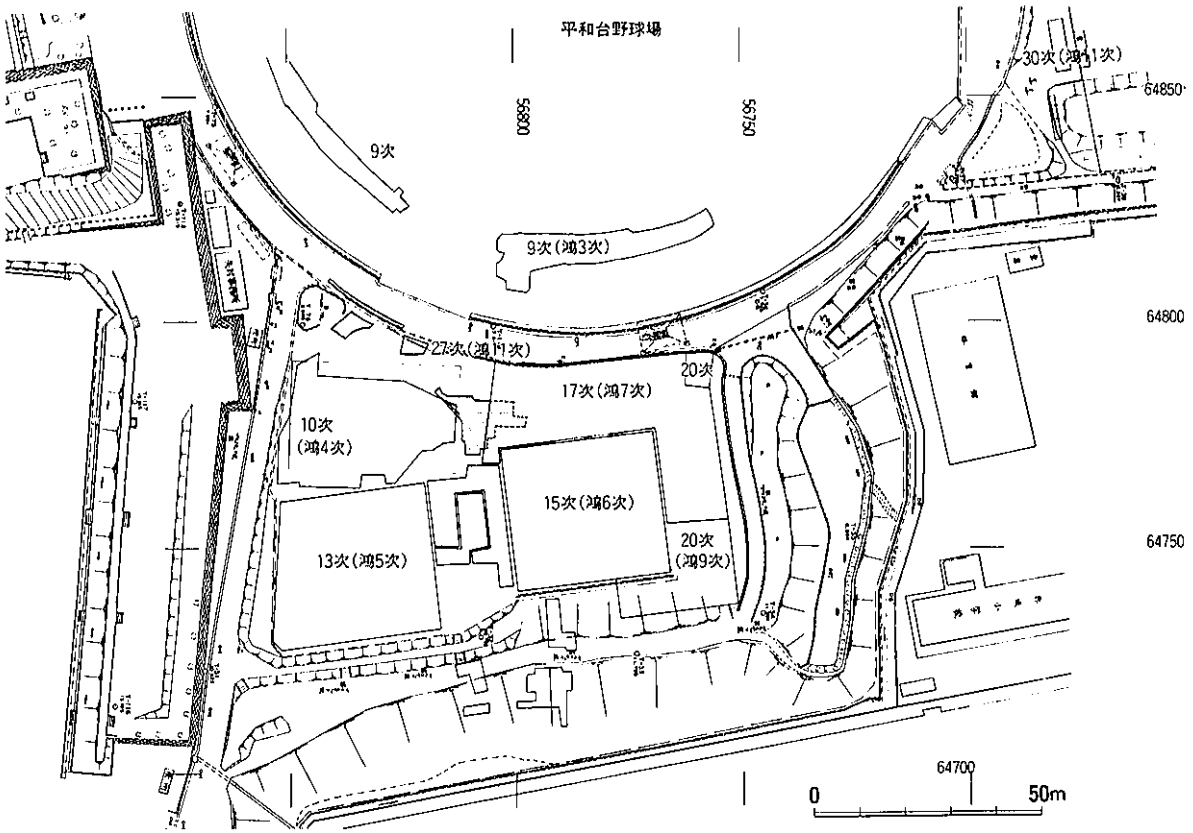
展示館内の調査では、建物模型を設置し、基壇部を復元する範囲の遺物取上げや遺構確認を行った。その結果、塀の柱掘方や柱抜取り穴、礎石据付け掘方、柱穴、鋳造関係遺構等を検出した。

野球場周回道路部分においては、SA302の北延長部分の布掘り遺構とSA303の北延長部分の布掘り遺構と柱抜取り穴を確認した。さらに、東門を南北の中心線とした場合に、掘込み地業SK140と対称となる位置において、類似する掘込み地業の有無の確認調査も行った。

展示館東側の調査地は、第10次調査地と第17次調査地の間に位置し、SB32の東側柱および基壇縁が想定される地点である。明確な遺構は検出されなかったが、新たな建物などを検出した。

上記の調査の他に遺跡整備を行う必要から、東西棟建物SB50についてSB31から12間目の礎石据付け穴とその周辺の再調査を行った。

※１：礎石建物SB32は、馬道より北の建物をSB32、南の建物をSB330と表記する。



Fig, 6 第27次・30次調査地点位置図

(2) 展示館東側の調査

1) 遺　構

第17次調査では調査区西半部で、掘立柱建物SB320・321や両側縁に平瓦を立てて土留めとした道路状遺構SF272のほかに基壇状の高まりを検出している。第27次調査地点はこの基壇状の高まりの西側に重複するとともに、第10次調査で検出した礎石建物SB32の東側柱および基壇縁が想定される位置にあたっている。したがって、当該地点では礎石もしくは礎石据付け掘方と基壇縁の確認、基壇状の高まりの解明を目的として調査を行った。

調査地の土層は、上面から表土、頁岩風化土、赤褐色粘質土、地山である風化頁岩となっている。地山面は、標高8.90～8.95mの平坦面をなし、人工的に開削が行われていたこと示している。赤褐色粘質土層は地山直上に約5cmの層厚で広がる。頁岩風化土層は、厚さ35cmほどを測り、よく締まった整地土層で、色調や混入土により微妙に土質が異なっているが、基本的には黄褐色～黄白色の頁岩風化土が５～10cmほどの層厚で３～４層にわたり水平に重なっている。第17次調査で検出した基壇状の高まりは、この整地土層の一部である。整地土層上面の最高標高は9.31mを測る。

検出された遺構は、柱穴、礎石据付穴、柵列、土壙、溝などがあり、鴻臚館と福岡城に関連するものである。これまでの調査では、奈良～平安期の建物は座標北に対して東に偏する傾向を示すが、江戸期以降の建物や塀は西に大きく偏することがわかっている。ここでは鴻臚館跡関係の遺構についてのみ説明する。

鴻臚館期の遺構には柱穴、礎石据付け掘方がある。各遺構は土層との関係から、

１．整地土層上面から切り込むもの

２．地山直上の赤褐色粘質土層を切り込むものの整地土が上を覆うもの

３．地山を切り込むが、赤褐色粘質土・整地土が上を覆うもの

に分かれる。

１にはSP822がある。１m×1.3mの掘方にA4サイズほどの三角形の板石を根石とする。根石は円形状に配置され、礎石据付け掘方であると理解される。掘方の深さは15cm以上残る。礎石は残存しない。掘方の埋土は頁岩風化土である。

２には柱掘方SP830・864がある。隅丸方形を呈し、掘方の深さは５～10cmほど残る。規模は不明である。

３には柱掘方SP824・825～829・831がある。掘方は方１～1.3mを測り、15cm程の深さが残る。SP824の底面にはB５サイズほどの三角形の板石が円形状に配置されて残り、礎石据付け掘方と考えられる。SP825～829・831には根石と思われるものはなく、頁岩風化土を埋土とする。SP825～827・831は南北棟建物SB324を構成すると考えられる。SB324は、東西２間、南北１間以上の建物で、柱痕跡が検出されていないが掘方の間隔からみて柱間寸法は2.3～2.5mが推定される。建物の北辺柱筋は、SB320・321と平行する。SB324は、各掘方において明瞭な柱痕跡が確認できないことや掘方底部の土の状況が他の礎石据付け掘方と類似することから、礎石建物の可能性もある。

整地層および下層から遺物はほとんど出土していないが、赤褐色粘質土層と整地土との間で慰斗瓦が出土している。

なお、SB32の東側柱および基壇縁が想定される調査区北西側では、近世以降の遺構の重複が顕著であり、また整地土に覆われているため、存在を確認することはできなかった。

X : 64, 800

Y : −56, 850

X : 64, 750

SA15
SB320
SA302
SK255
SB300
SA303
SB31
SB32
SB322
SA273
SA301
SK208
SB330
SB324
SK211
SB323
SK29
SK23
SK38
SK210
SK209
SK213
SK75
SK61
SK80
SD312
SA150
SB50
SA311
SK56
SK82
SK35
SK353
SK532
SK354
SA316
SK244
SK69
SK70
SK59
SK60
SK355
SD357
SK358
SK57

0 10 20m

Fig, 7 昭和63年度～平成6年度調査遺構分布図(1/300)

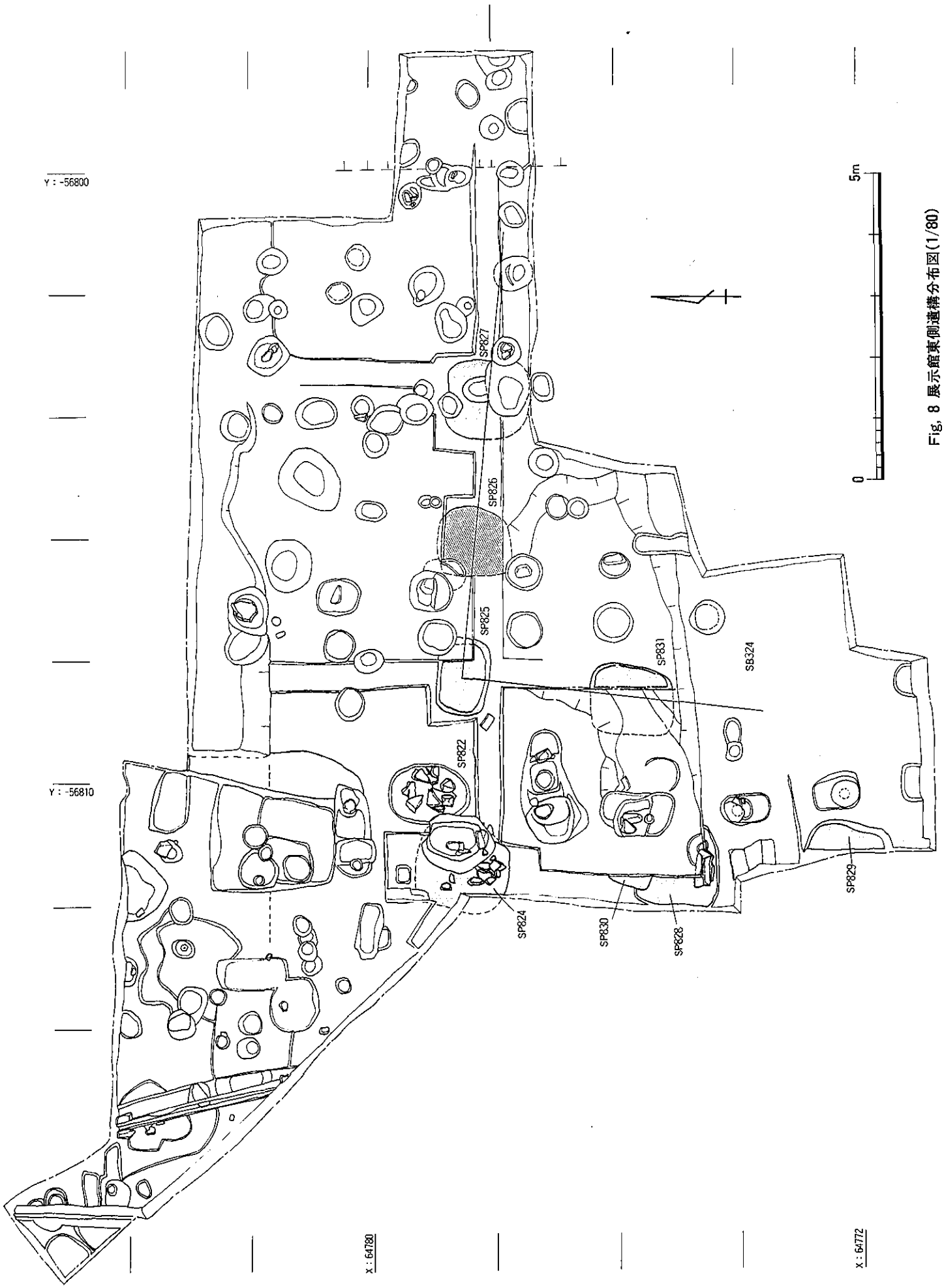
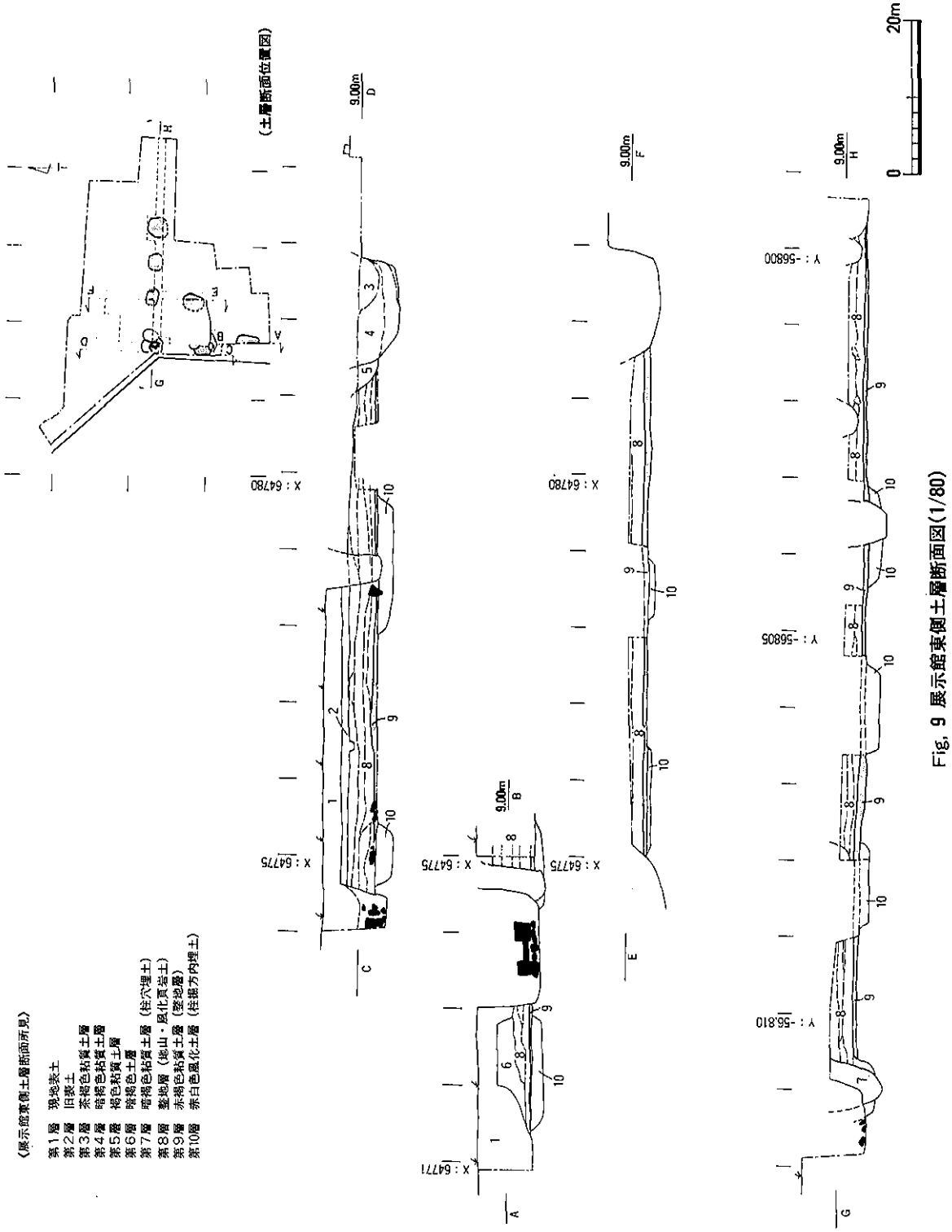
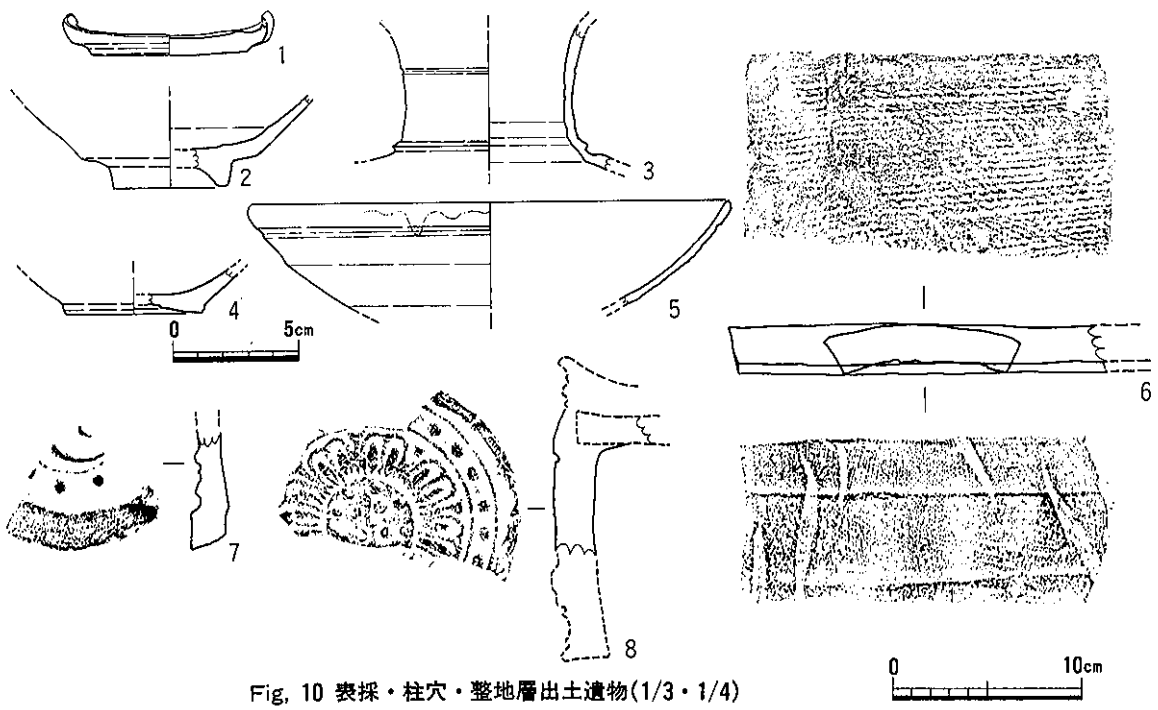


Fig. 8 展示館東側遺構分布図(1/80)



Fig, 9 展示館東側土層断面図(1/80)



Fig, 10 表採・柱穴・整地層出土遺物(1/3・1/4)

2) 出土遺物

遺物は、鴻臚館造営期と福岡城造営期に比定されるものがほとんどであるが、14～15世紀に比定される遺物もわずかに出土している。整地土層からの出土遺物は慰斗瓦だけである。鴻臚館造営期の遺物には中国産陶器（鉢）、越州窯系青磁器（椀・水注）、白磁器（椀）、新羅陶器（壺）、イスラム陶器（壺）、土師器（皿）、軒丸瓦、慰斗瓦等がある。14～15世紀の遺物には龍泉窯系青磁器（椀）が福岡城造営期の遺物には軒丸瓦、伊万里焼系染付（椀）、備前焼（擂鉢）、土師器が出土している。

1は土師器の耳皿で、表採資料である。灰褐色を呈し、口径9.6cm、器高1.7cm、高台径6.2cmを測る。体部はほぼ水平方向に伸び、耳は内側に折り曲げられる。2は陶器の椀で、柱穴SP812から出土。体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。畳付や、見込には砂目跡が残る。器面全面に灰色の釉が施されている。3は新羅焼の壺で、柱穴SP816から出土。頸部は直立し、体部との境には断面三角形の突帯を巡らす。胎土はあずき色を呈し、硬く焼締まっている。4は越州窯系青磁器の椀で、柱穴SP812から出土。底部は蛇目高台。体部は外傾しながら直線的に立ち上がる。畳付きや、見込には砂目が残る。底径は5.6cm、高台幅は1.6cm。暗緑灰色の釉を内外全面に施す。5は白磁椀で、柱穴SP362から出土。体部は丸味を持たせて立上る。口径19cm。口縁部外面には沈線が廻り、玉縁を意識している。口縁端部は丸くおさめている。6は整地土層最下面で出土した粘土板桶巻き作りによる平瓦を分割した慰斗瓦である。幅11cm、残存長20cm、厚さ2cmを測る。凸面には糸切り、縄叩き目、凹面には布目や幅4.2cmの模骨痕跡が残る。側面は分割後にヘラ削り調整を施す。7は三巴文と珠文からなる軒丸瓦で、柱穴SP812から出土した。復元径は14cm、厚さ1.8cm。瓦当面には笵型に撒いた0.5mm程の砂粒が多く付着している。8は撹乱層から出土した鴻臚館Ⅰ式（Aa）軒丸瓦で、瓦当は半分ほど残存する。笵抜きが悪く中房、連子の形が整っていない。丸瓦部は凸面に縄叩き目痕跡が残る。外面はヘラ削り調整を施している。図示していないがこの他に、イスラム陶器壺の底部片が遺構検出面で出土した。胎土は白色の軟質土で不純物は含まれていない。施釉は内外面に濃い青緑色の釉が施されている。なお、鴻臚館跡ではこれまでの調査で破片数で42点のイスラム陶器片が出土している。

(3) 野球場周回道路部分の調査

調査地点は、塀SA303の北延長線上のＡ地点と東門SB300に連接する塀SA302の北延長線上のＢ地点である。いずれの地点も昭和23～25年頃の平和台野球場建設に伴う周回道路建設の際の工事で大きく削平されており、両地点の遺構面と第10次調査の遺構面との比高差は約1.5ｍを測る。

Ａ地点では、道路地表面から－0.35m（標高：7.65m）で布掘り遺構と柱抜取り穴を検出した。布掘りは幅１ｍを測り、調査区外の南と北の両方向へ延びる。柱抜取り穴の平面形は、長軸0.8m、短軸0.6mを測る楕円形である。形状からみて、塀の内側（東側）に柱を倒して抜き取ったことがうかがわれる。今回検出した布掘りは、第10・13次調査で検出した塀SA303の延長線と合致することや、地山の頁岩風化土を埋土とする状況等から、塀SA303の延長部と考えられる。

Ｂ地点では、道路地表面下－0.5m（標高：7.50m）において布掘り遺構を検出した。調査区外の南と北の両方向へ延びる。東辺部は攪乱を受けており現存の幅は60cmである。塀SA302の延長部と考えられる。

(4) 展示館北側の調査

調査地は、東門SB300の東西中軸線を基準に南北に折り返した場合に、掘込み地業SK140と対称となる位置にあたる。調査の結果、類似する掘込み地業は検出されなかった。調査地点の標高は８ｍを測るのに対し、SK140の掘込み地業底面の標高が6.4mであることから、削平によって消滅した可能性は低く、本来なかったとも考えられるが、第Ｉ期遺構である塀SA302等で区画された内部の建物構成については野球場外野席スタンド部分の将来の調査に委ねたい。

(5) 展示館内の調査

調査では、鴻臚館造営期では塀SA303の布掘り遺構と柱抜取り穴、掘込み地業SK140、柱穴、中世では鋳造関係遺構、江戸時代の柱穴等を検出した。

SA303の柱抜取り穴は、SA303の布掘遺構と礎石建物SB31の東側柱筋が重なり、第IV期以降の土壙群が重複しているために、予想位置のすべてについては確認できなかったが、２間分の柱抜取り穴を検出した。柱抜取り穴は、楕円形の平面形を呈し、長軸1.1～1.6m、短軸0.6m、深さ1.6mを測る。いずれも塀の内側（東側）に柱を倒して抜き取っている。柱抜取り穴の西側は半円形をなしており、柱最下部の痕跡であることから、柱の径は約0.3～0.4m、柱間は約2.4mであることがわかった。

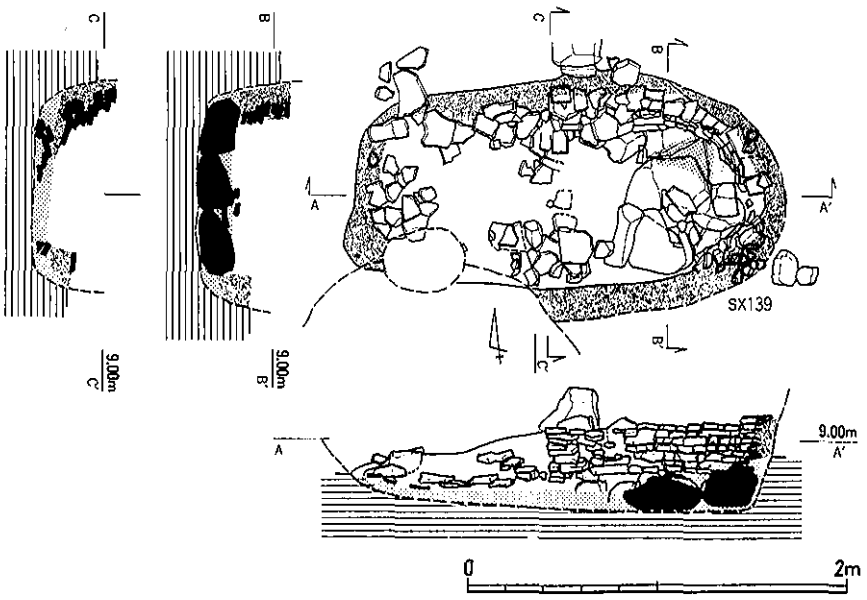
掘込み地業SK140は、これまでの調査で平面形が東西約６ｍ、南北12m前後の隅丸長方形であると推定していた。今回の調査では南東隅の一部を掘り下げて、底の確認と土層観察を行った。東側の壁は直線的に外側に傾斜しているのに対し、南側は途中にテラス状の平坦面が認められ、二段掘りを行ったことが考えられる。現状の深さは2.6m（標高:6.4m）を測る。土層は版築により厚さ５cm前後の互層となっている。底面から1.7m上の版築土中から鴻臚館式軒丸瓦が出土した。

柱穴は、礎石建物SB330において３基検出した。２基は東庇側柱の北端に位置する地点で、方1.2mの掘方が切り合っている。覆土は頁岩風化土である。１基はSB330の柱推定位置に合致するものの、他の１基は整合しない。また、棟筋において礎石据付け穴が検出された。礎石は欠失するものの、板状の根石がSB32・330の根石と同じ状況で残存している。SB330は総柱の建物であった可能性もある。

溶解炉の炉床部分SX139を検出した。炉床は、平面形が長径2.3m、短径1.3mを測る楕円形で、舟底状土壙の東半部に人頭大の岩塊を敷き並べ、その上に瓦と粘土とを相互に馬蹄形状に積み重ねて炉壁としている。炉壁は、幅10cm程に割った平瓦を使用し、約30cmの高さが残存する。岩塊は赤褐色を呈し、上には木炭、焼土が堆積していた。近くの土壙からは、羽口が出土している。また、第10次調査で検出した鋳造遺構SK29は約８ｍ西側に位置しており、この周辺が中世後期においては梵鐘鋳造関係の工房があったことが想定される。

(6) 小　結

塀（北面SA15、南面SA150、西面SA303、東面SA301・302）と東面中央に位置する東門SB300からなる施設は、本調査とこれまでの調査によって、柱芯間の距離が東西74.07m、南北56.26mを測ることが明らかとなった。ちなみに1尺を0.296mとすると、東西250尺、南北190尺の整数値になる。また、検出した塀の柱間寸法は、各面によって異なっている。東西の両面では2.43mであるのに対し、南面は2.36mを測る。ちなみに一尺を0.296mとすると、東西面が8尺2寸（2.43m）、南面が8尺（2.36m）に換算される。ただし、各面の長さをこの間尺で計算すると、西と南の両面では端数が生じることから、柱間が等間隔で配列されていなかったか、または各面に出入口等の何らかの施設が存在していた可能性が指摘できる。



Fig, 11 SX139平面および断面図(1/40)

西面SA303では他の三面と同様に柱抜取り穴が検出され、柱の抜取り方法も塀の内側に倒して抜き取る共通した工法が認められ、第Ⅰ期遺構の廃絶の際には大がかりな解体作業があったと想定することが可能となった。このことから、これまでSA301等に重複する位置にある柱穴状の穴を新たに南へ拡張された第Ⅱ期の柵列の柱列とみなすことができなくなったといえる。

また、展示館内調査で検出した柱穴や礎石据付け穴は、これまでに想定された建物とは別の時期の建物の存在を示唆するもので、SB32・330の基壇土下の調査を行う必要性が生じてきた。また、今回新たに確認されたSB324やこれを覆う基壇状の高まりの時期と他の遺構との構成についても今後の調査上の課題である。

SX139は梵鐘鋳造遺構SK29と一連の遺構である。年代は、14世紀代の口禿の白磁椀や土師器皿が投棄されていたSK133を壊して築造され、江戸期の柵列に壊されている点からみて、室町時代後期～江戸時代初期の時期に比定できる。

以上の調査の他に東西棟建物SB50で確認調査を行った。SB50については単廊説と複廊説とがあり、遺跡整備を行う必要から複廊説の根拠となっているSB31から12間目の礎石据付け穴とその周辺の再調査を行った。その結果、SB50の構造を明らかにするだけの成果を得ることはできなかった。

２．第28次調査（調査番号9432）

(1) 調査の概要

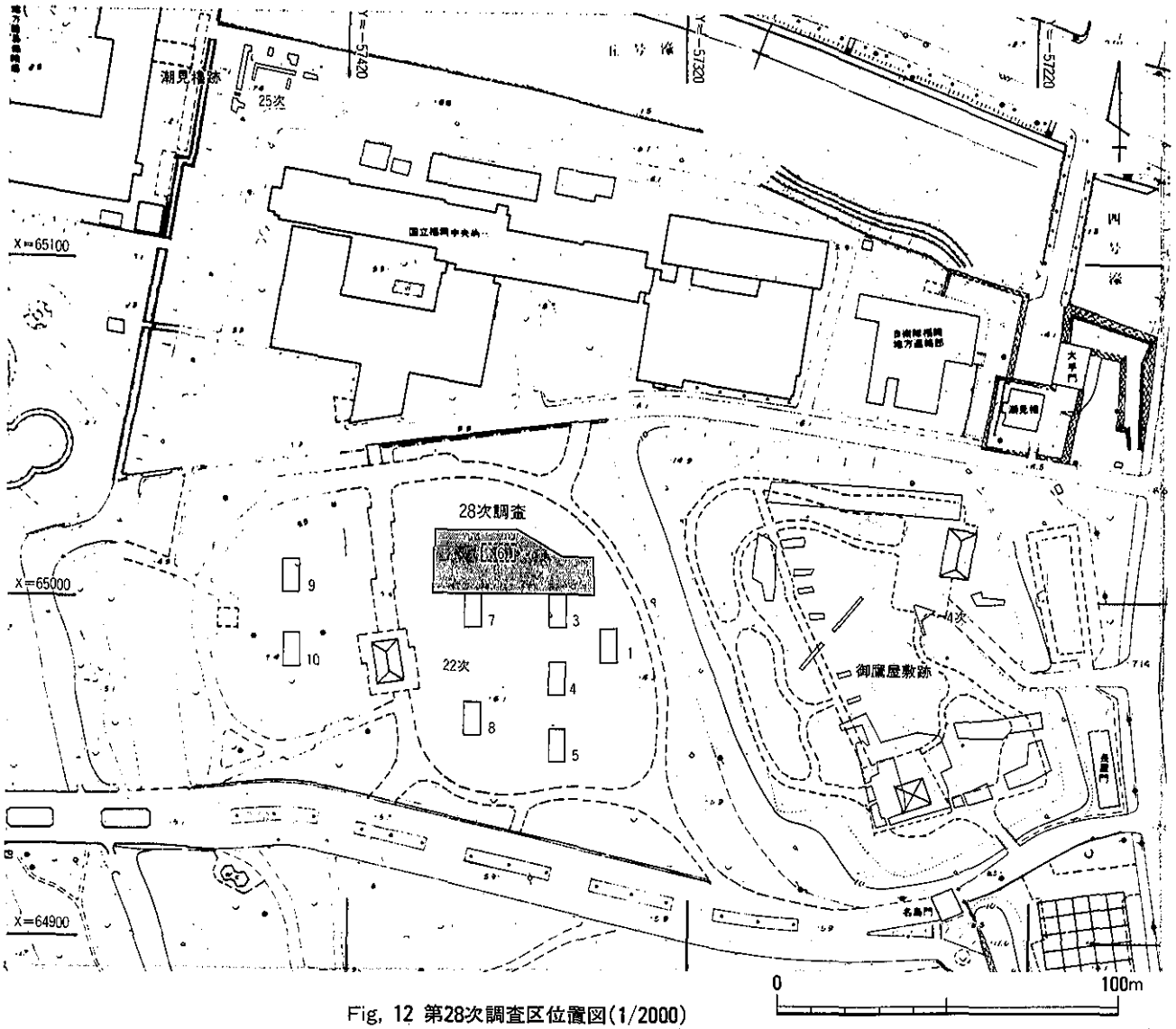
1) 調査区の設定（Fig,12、PL,４・５）

平成５年度に実施した第22次調査では、第II期調査対象地全体の遺構の遺存状況を知るために平面規模が５×10mのトレンチを９地点に設定し調査を行った。その結果、全体的に近・現代の撹乱部分が多い中で、第１・６・７トレンチ周辺部では遺構が比較的良く残っていることがわかった。第28次調査は、この結果を踏まえて、第６トレンチを含む西広場北東部の一画をその対象地として選定し、実施することとした。

調査区は、東側に位置する御鷹屋敷跡が占地する高台下から大濠公園を結ぶ東西線を長軸にとり、東西に42.5m、南北に23.5mの平面規模で設定し、一部敷地の形状等の理由からFig,12に示す平面形で設定した。調査面積は850㎡である。

2) 検出した遺構と遺物の概要

発掘調査は、土層堆積と遺構の出土状況を見ながら検出面を便宜的に４面に分けて掘り下げた。近現代の撹乱土壙が調査区内のいたる所にあり、特に中央部から東側にかけて顕著である。遺構の遺存状況は悪く、溝等は寸断されている。



Fig, 12 第28次調査区位置図(1/2000)

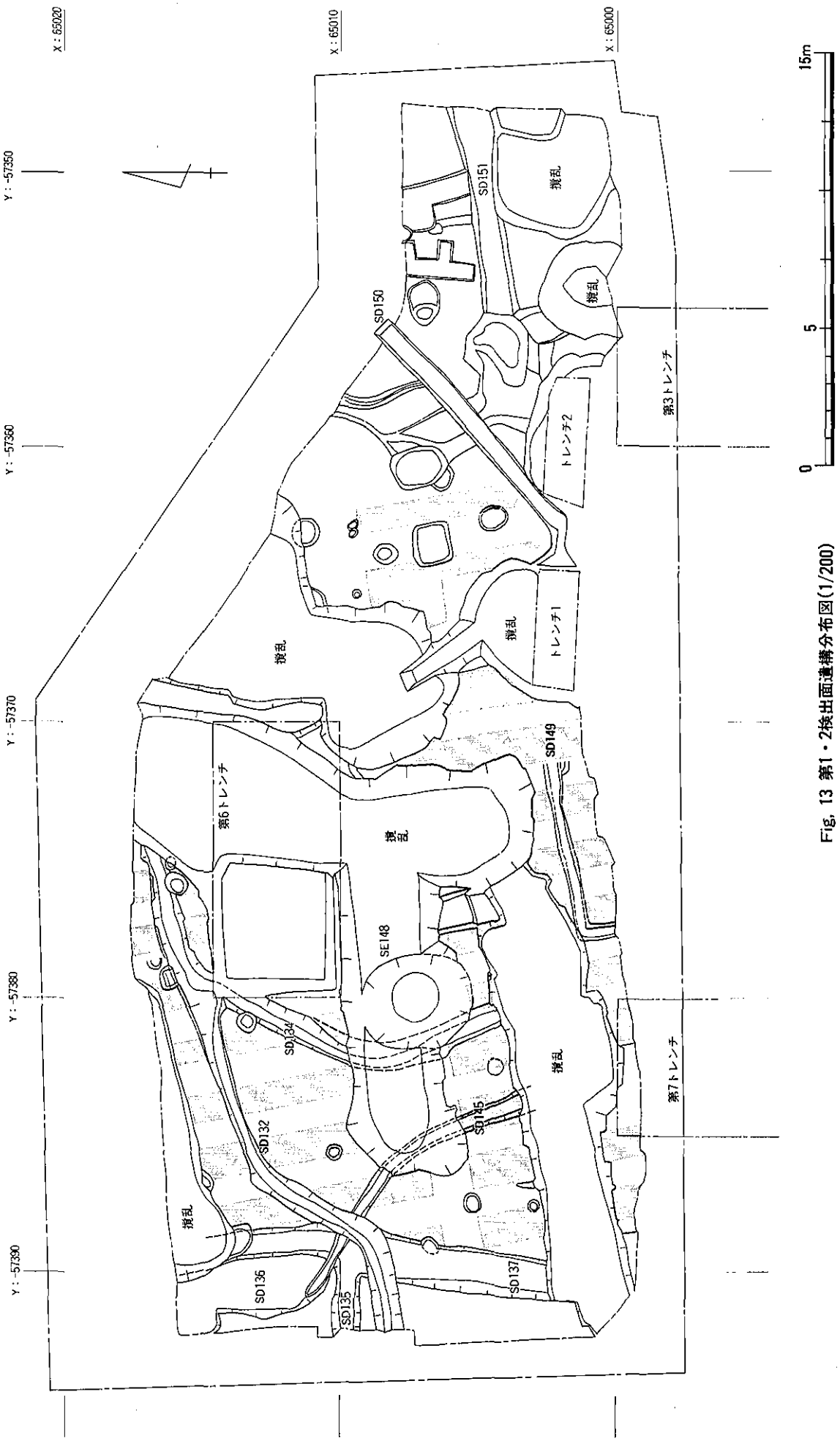
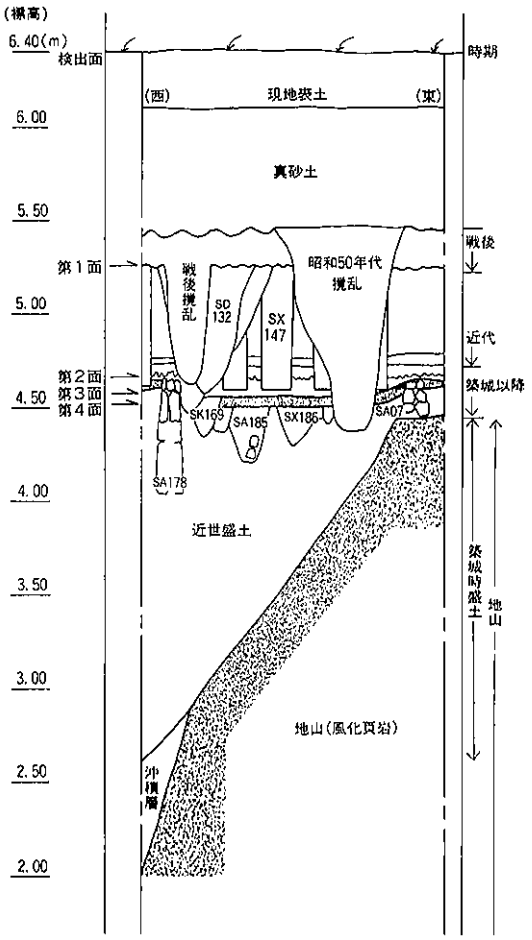


Fig. 13 第1・2検出面遺構分布図(1/200)
(アミカケ部分はSX147)

第１面は標高5.1m前後の高さで調査区全体に分布する白砂層上面を検出面とした。この層を切ってSE148、SD132・133（145）・134（144）・136（137）・150・151、SK138等の近代以降の土壙や溝が分布しており、また性格不明の多数の溝状遺構SX147が調査区全体に並列している。

第２面は調査区西壁側の一部と中央部～東側にかけて標高4.7～4.8mに分布する黄灰白色砂質土層下面である。この砂層は、昨年度の調査でも１～７トレンチの各トレンチで確認された。調査区の西側および中央部ではこの土層下部の標高4.5～4.6mの面でSA178をはじめとする石積遺構基底部や柱穴を確認した。また５年度調査時の第７トレンチにまたがる掘立柱建物SB164を図上復元した。この層の下面で足跡状の凹凸が残る面（黄褐色粘質土上面）を確認した。

第３面は調査区の東西側で検出面の高さが若干異なる。東側部分では標高が4.6m前後に分布する黄灰白色真砂土層上面での遺構確認を行った。西側では真砂土層が残っていなかったために、標高約4.4～4.3m前後の面でSD173・175・177、SX168、SK170などの溝および土壙群を検出した。西側のこれらの遺構群はおそらく真砂土層を切るもので、石積遺構SA166や178等より後出のものと考えられた。なお真砂土は均質な花崗岩風化土であり、平成５年度の調査では第１トレンチの18層、第２トレンチの17層、第６トレンチの11層等に相当するものである。整地面の仕上げ土として三ノ丸北西郭部の広い範囲に盛土されたと考えられる。



Fig, 14 第28次調査区土層模式図

第４面は、攪乱部分の断面観察により真砂土層下部の遺構群の有無を確認した。SA185、SX184等の石積遺構や土壙、瓦組のSX186等が確認された。

鴻臚館跡に関しては、調査区南東部の攪乱土壙部分についてトレンチ１・２を設定し近世盛土およびその下部の沖積土層の観察を行った。

(2) 遺構遺物各説

遺構説明は、近代から現代のものは省略し近世に関わるもののみとし、遺物については各検出面および近世の遺構から出土したもののうちから必要と思われるものを選択して記述する。

1) 第１・２検出面の遺構と遺物（Fig,15、PL, 6～8・14～16、Tab, 3）

この検出面では、戦後以降の家屋解体の際の多数の廃棄物投棄土壙の他に、井戸SE148、溝状遺構SD132・133（145）・134（144）・136（137）・149・150・151、土壙SK138、木組み桝SX152、溝状遺構SX147を検出した。いずれも近代以降の所産である。（近世のものはSB164がある。）

これらの遺構からは古墳時代から近代の遺物が出土した。出土量が最も多いのは近世の遺物であるが、出土量は比較的少ない。9は、橘三葉を中央に、右回転の藤三巴文を配した軒丸瓦である。瓦当面径15.1cm、周縁幅は2.5～2.7cmである。焼成良好で、黒色を呈す。SX147出土。10は白磁製の人形で頭部が欠損している。顔面顎部分にはわずかに着色した痕跡が残る。高さ4.3cm、幅3.2cm、厚さ2.3cm。釉薬は薄く青みがかった白色である。11は型作りの白磁紅皿である。内面から口唇部には薄く青みがかった透明釉薬がかかる。外面は露胎。口径5.2cm、器高1.5cm。12は白磁盃である。釉薬は透明でうすく緑がかっている。口径4.9cm。器高3.0cm。13は青磁小椀である。釉薬は透明で薄く青緑がかっている。口径約7cm、器高4.2cmほどか。14は鉄釉茶入胴部破片である。胴部下半部は露胎である。胎土は精良な泥質土を用いている。底部は右回転の糸切り痕を残す。釉薬はやや厚く、艶のある暗褐色。15は染付椀である。草花文を施文。復元口径は約10.5cm。16は染付壺である。わずかに外反した短い頸部がつく。口径は約8cm。釉薬の発色は良好である。17は褐釉陶器壺底部片である。体部下部および内面は露胎で、底部は上げ底気味の平底である。底部径は約9cm。18は染付瓶の底部片である。高台畳付には砂目跡が付く。19は口縁部内外面に鉄釉をかけた陶器擂鉢である。20～22は三巴文を配した軒丸瓦である。焼成はいずれも軟質で脆い。内区と外区には界線ない。22は巴文の尾が接している。以上は遺構検出の際に出土した。

23～29はSD132出土である。SD132からはこのほか、小玉縁

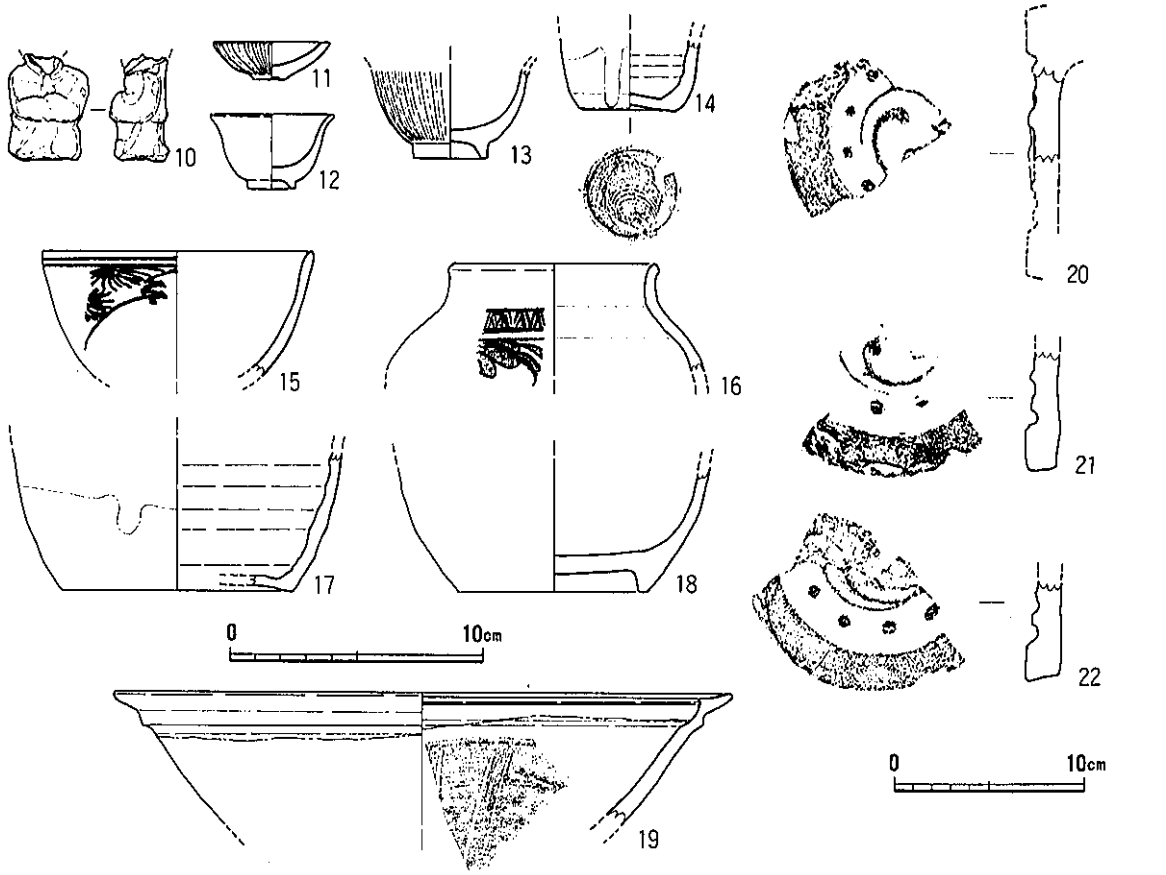


Fig. 15 SX147・第2検出面出土遺物(1/3・1/4)

口縁の白磁Ⅰ類椀等も出土している。23は唐津系陶器皿口縁部破片である。口径13.5cm。釉薬は淡い半透明の乳白色で、胎土はややきめが粗く暗褐色を呈する。24は肥前系白釉椀で、口径11cm、器高6.8cm、高台径4.8cm。内外面とも不透明な薄く青みがかった白色である。25は唐津系緑釉椀口径12.4cm。外面は透明な緑褐色である。釉薬の発色は良好。胎土は明灰白色でやや粗い。26は中国宋代の白磁椀口縁部片である。復元口径は16cm。胎土は純白で黒色の細砂を含む。27～29は陶器製擂鉢である。いずれも口縁部内外面に鉄釉を施釉している。27の降ろし目は7条を1単位とする。口縁部下は粘土紐貼付。28・29は口縁部内唇を引き出している。30～34はSD137から出土。性格不明の土製品である。型押しで作った半球状の粘土塊を貼り合わせ、扁平に仕上げている。焼成は悪く非常に軽い。玩具の一種か。37・38は近代の井戸SE148から出土。37は梅花文と唐草文を施した軒平瓦である。脇区には「博多□・・」の刻印がある。丁寧な作りで文様は肉太で明瞭な輪郭を有す。焼成・燃とも良好である。38は餅文を中心飾とし、その周囲に珠文を配した軒丸瓦である。焼成はやや軟質であまり焼きしまっていない。復元径は14.8cm。36はSD151から出土。備前焼擂鉢である。胎土は良く焼き締まり赤褐色を呈す。口縁部には自然釉がかかる。内面には弱い段がつく。復元口径は約30cm。

SB164　調査区南西隅部と5年度調査時の第7トレンチで検出した柱穴群を図面上で推定復元した掘立柱建物である。検出した面はいずれも黄灰白色砂質土層下面である。規模は梁行2間、桁行3間の南北棟である。桁行がもう1間北へのびる可能性がある。妻側の中柱は西側にわずかに寄っている。

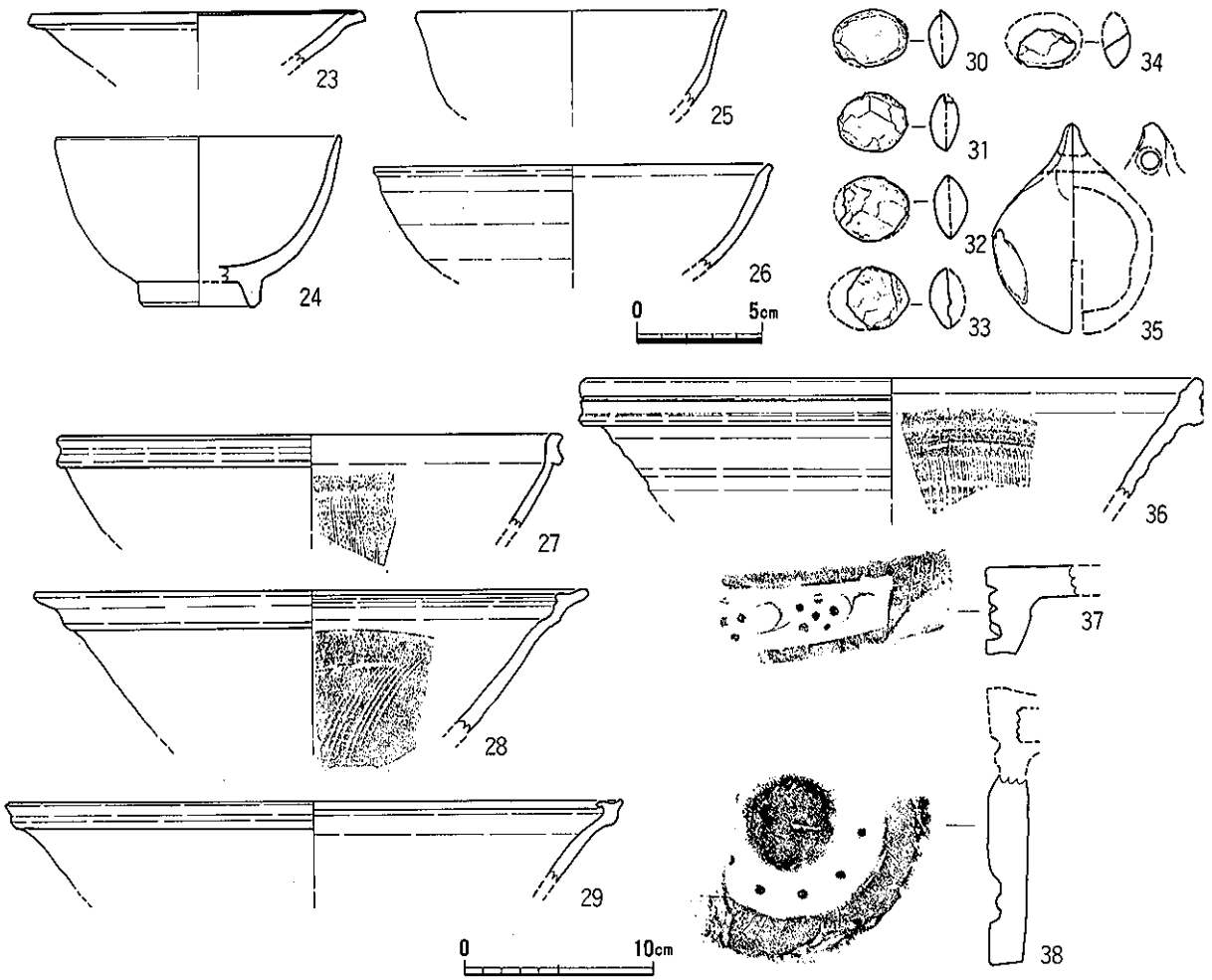
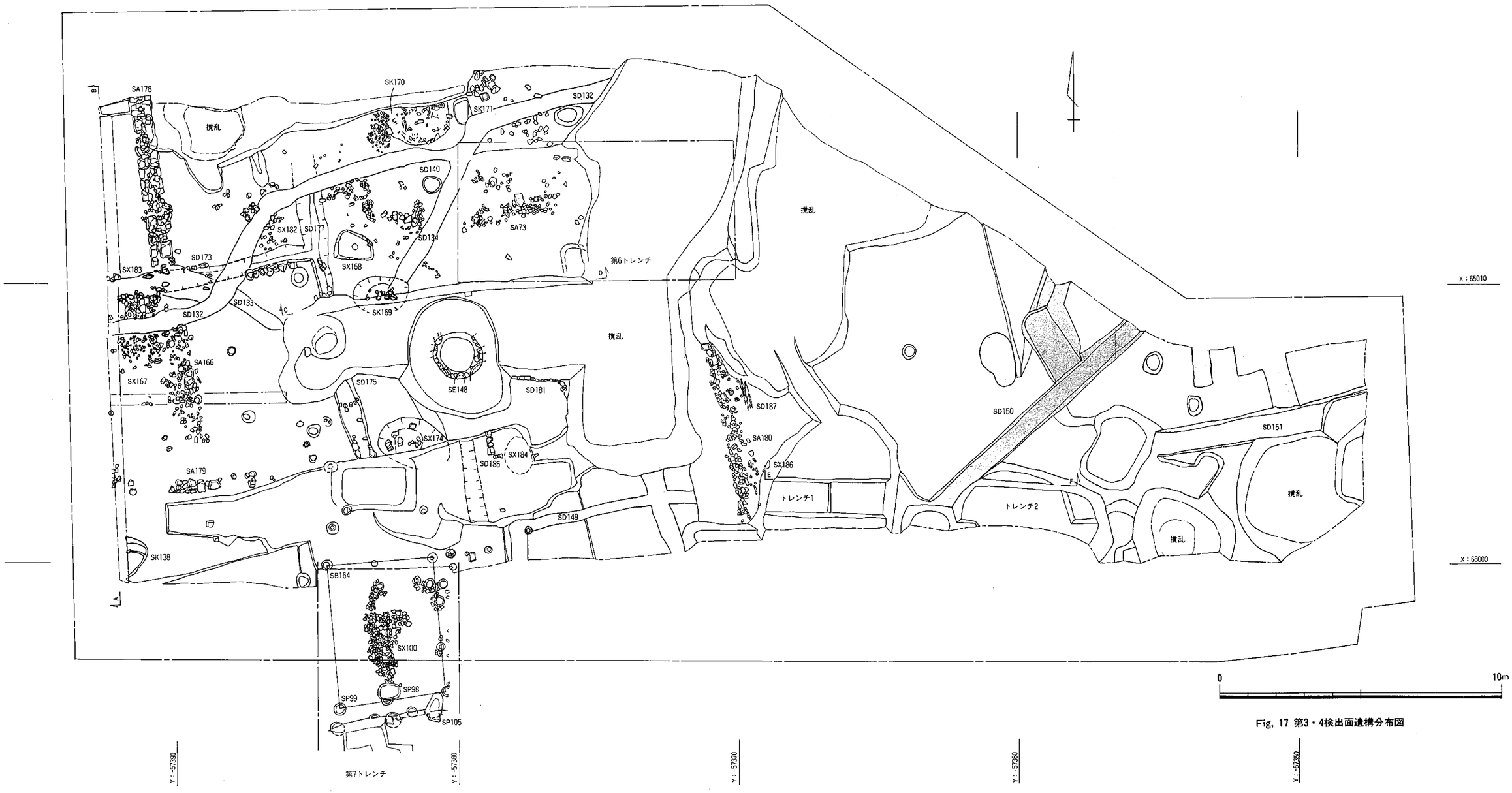
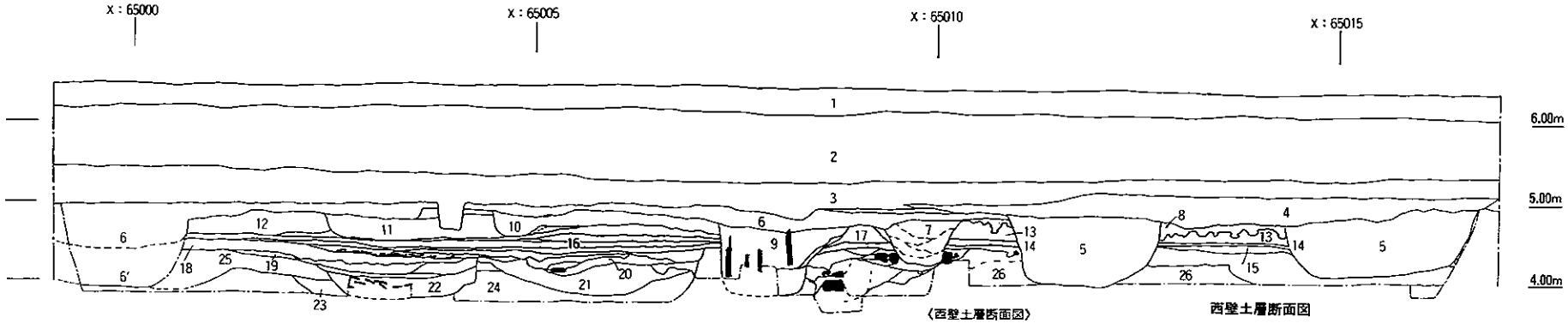


Fig. 16 SD132・137・151・177、SE148出土遺物(1/3・1/4)



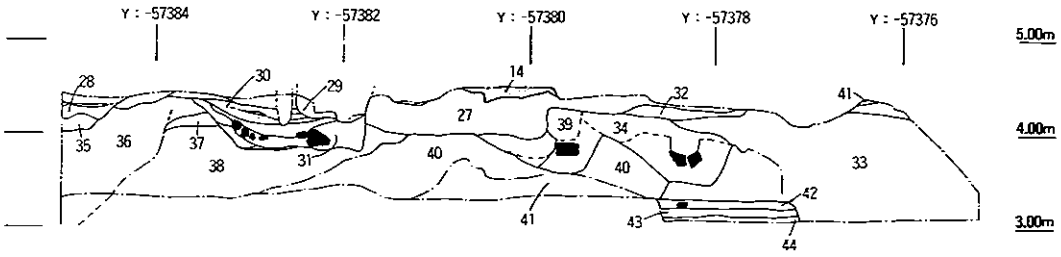
Fig, 17 第3・4検出面遺構分布図



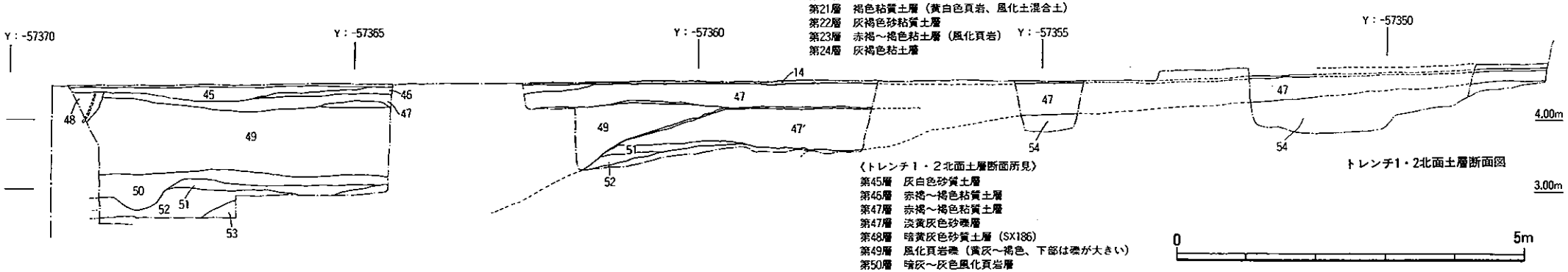
西壁土層断面図

〈西壁土層断面図〉
第１層　現地表土
第２層　真砂土
第３層　整地層
第４層　整地層
第５層　接薬土壌内埋土（現代撹乱）
第６層　黒褐～黒灰色砂質土層 } （現代撹乱、SK138内埋土）
第６層　接薬土壌内埋土
第７層　暗褐色混砂粘質土層（SD135内埋土）
第８層　黄灰白色砂質土層（風化頁岩含む
第９層　暗灰色砂質粘土層（SX152内埋土）
第10層　暗灰色砂質粘土層（SX152内埋土）
第11層　黄灰白色砂質土層
第12層　暗灰色砂質粘土層
第13層　暗灰色砂質粘土層
第14層　黄灰白色砂質土層（真砂土が薄く縞状に堆積）
第15層　灰色質粘土層
第16層　灰色砂質～質粘土層（上層は鉄分沈層）
第17層　褐色砂層
第18層　黄灰色粘質土層
第19層　赤褐色粘土層
第20層　暗褐色粘質土層（黒灰色土、頁岩小塊、木炭等混入）
第21層　褐色粘質土層（黄白色頁岩、風化土混合土）
第22層　灰褐色砂粘質土層
第23層　赤褐～褐色粘土層（風化頁岩）
第24層　灰褐色粘土層

〈中央部西面土層断面所見〉
第27層　明褐色砂質土層
第28層　灰～暗灰色砂質土層（SD175内土）
第29層　黒褐色砂質土層（SD134内埋土）
第30層　灰褐色混砂粘質土層 } （SK169内埋土）
第31層　砂層
第32層　黄灰色砂層（砂礫を含む）
第33層　風化頁岩片堆積土層
第34層　風化頁岩片堆積土層
第35層　灰褐色粘質土層（風化頁岩混入、SD175内埋土）
第36層　暗褐～褐色粘質土層（風化頁岩を多く含む）
第37層　灰～黄灰色風化頁岩層
第38層　灰～黄灰色風化頁岩層
第39層　灰褐色粘質土層（SD185）
第40層　赤褐色粘質土層（黄白色頁岩を含む）
第41層　風化岩層
第42層　暗灰色砂層
第43層　灰色砂層
第44層　暗灰色砂層



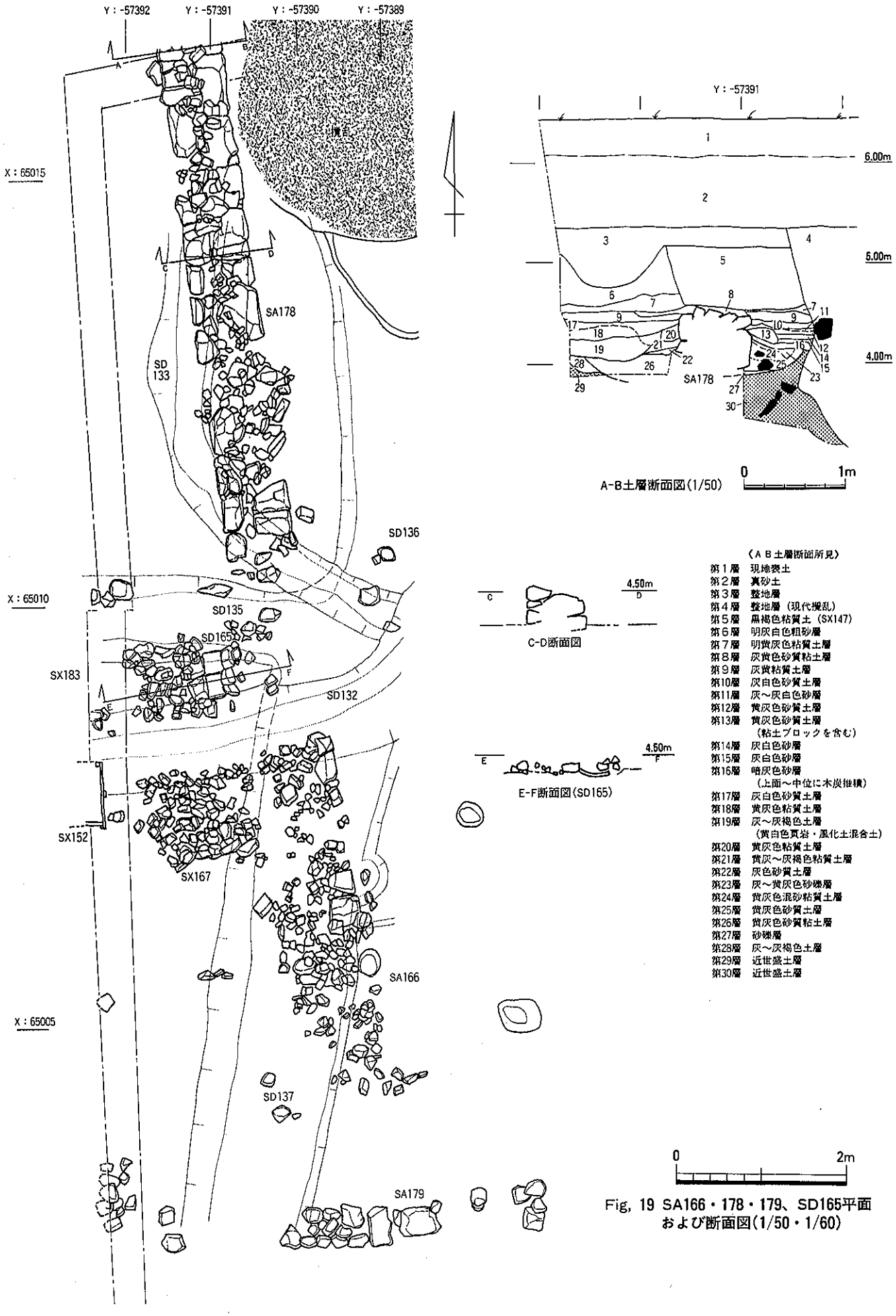
中央部西面土層断面図



〈トレンチ１・２北面土層断面所見〉
第45層　灰白色砂質土層
第46層　赤褐～褐色粘質土層
第47層　赤褐～褐色粘質土層
第47層　淡黄灰色砂礫層
第48層　暗黄灰色砂質土層（SX186）
第49層　風化頁岩礫（黄灰～褐色、下部は礫が大きい）
第50層　暗灰～灰色風化頁岩層
第51層　暗褐～褐色シルト層
第52層　暗灰色砂質土層
第53層　暗灰色シルト層（粗砂を含む） } 沖積層
第54層　頁岩地山層

トレンチ1・2北面土層断面図

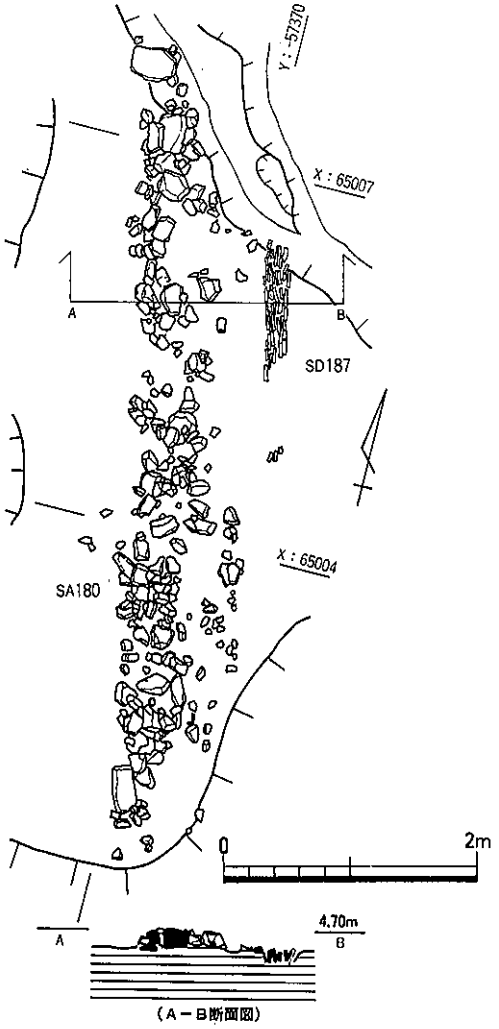
Fig, 18 第28次調査区土層断面図(1/80)



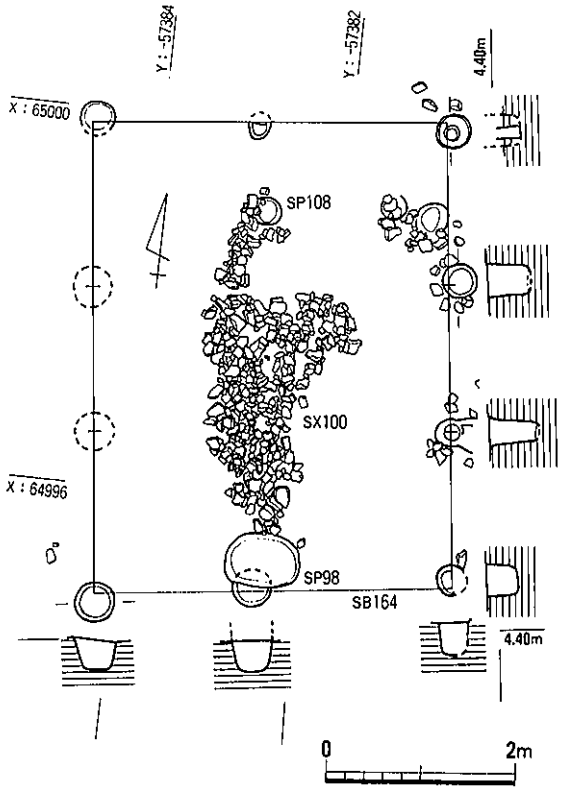
（ＡＢ土層断面所見）

第１層　現地表土
第２層　真砂土
第３層　整地層
第４層　整地層（現代撹乱）
第５層　黒褐色粘質土（SX147）
第６層　明灰白色粗砂層
第７層　明黄灰色粘質土層
第８層　灰黄色砂質粘土層
第９層　灰黄粘質土層
第10層　灰白色砂質土層
第11層　灰～灰白色砂層
第12層　黄灰色砂質土層
第13層　黄灰色砂質土層
（粘土ブロックを含む）
第14層　灰白色砂層
第15層　灰白色砂層
第16層　暗灰色砂層
（上面～中位に木炭堆積）
第17層　灰白色砂質土層
第18層　黄灰色粘質土層
第19層　灰～灰褐色土層
（黄白色真岩・風化土混合土）
第20層　黄灰色粘質土層
第21層　黄灰～灰褐色粘質土層
第22層　灰色砂質土層
第23層　灰～黄灰色砂礫層
第24層　黄灰色混砂粘質土層
第25層　黄灰色砂質土層
第26層　黄灰色砂質粘土層
第27層　砂礫層
第28層　灰～灰褐色土層
第29層　近世盛土層
第30層　近世盛土層

Fig, 19 SA166・178・179、SD165平面および断面図(1/50・1/60)



Fig, 20 SA180・SD187平面および断面図(1/60)



Fig, 21 SB164平面および断面図(1/80)

柱間は梁行が2.13mと1.64mで、桁行は平均して1.61m。棟筋の方位は座標北から西偏）7°である。

2）第3・4検出面出土の遺構と遺物（Fig,19～33、PL, 9～16、Tab, 3）

この検出面では、塀の基礎部分と考えられる石積遺構SA178・166・179・180、溝状遺構SD177・173・175・185、排水用瓦組暗渠SD181、石積み遺構に併設された側溝と考えられるSD165・187、残滓投棄用土壙SX168・169・170・171・174・184、瓦礫が集中的に分布するSX183・167・182がある。これらはいずれも江戸期の所産であり、福岡城築城後の17世紀から19世紀代におさまるものである。

SA166・178　調査区西側に位置する。南北方向に直列して並ぶ石積みである。いずれも石積みの基底部である。SD135と173によって一部が壊され分断されているが一連のものと思われる。北側のSA178は比較的良く残っている。幅は80cmで、長さ6.1mについて確認した。方位は座標北から西へ8°30′振れている。溝状に掘削した標高4mの基底面に、まず握拳大の礫石を敷き詰め、幅が30～50cmほどの風化頁岩や玄武岩等の自然礫石を据え、二段目からはやや小振りの礫石の小口面を揃えて野面積みとしている。石積み両面間には灰白色粘質土を充填している。SA166は基底面のみ残り、この部分の規模等は不明である。主軸の方位がSA178と比べ西にわずかに偏っている。

出土遺物　石積みの間から土師器、須恵器、寛永通宝等破片が出土している。図示できるものはない。

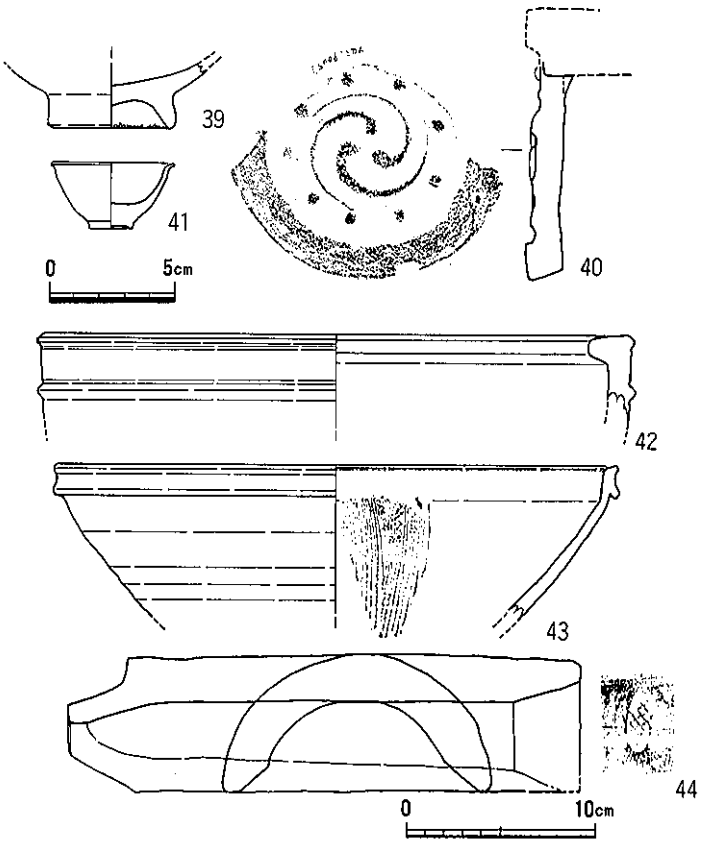
SD165　SA166に並行して付設された平瓦敷きの側溝である。左右両側縁には20cm前後の角礫石を据え側石としている。遺存状況は悪く、平瓦2枚分の長さしか残っていない。

SA179　調査区南西部で検出した。東西方向にのびる石積みの一部である。長さ4.6m、幅45cm以上あったものと思われる。構造はSA178と同じであるが、基底部分に用いている石がやや小さい。方位は座標北から東偏86°である。検出状況からみて、SA178よりも古い。

出土遺物　染付片、陶器片、須恵器片、須恵器（杯）、土師器（皿）、唐津緑釉（壺）が出土している。

SA180　調査区中央部に位置する。南北方向にのびる石積み遺構の基底部である。攪乱土壙によって寸断されている。遺存している礫石は握り拳大から人頭大までの大きさがある。長さ6.4m、幅約70cmの規模で残っている。方位は座標北から西偏13°である。

SD187　SA180の東側に約30cm離れ並行して付設された溝の床面である。平瓦の小口面を上にして10枚ほどを並列させて埋め込んでいる。左右壁には縁石を配していたと思われるが残っていない。



Fig, 22 SX167・183出土遺物(1/3・1/4)

SD173・175・177　調査区北西部で確認された一連の溝状遺構である。SD177は南北にのびる溝で、現存長2m、幅が85cm、深さは20cmを測る。断面形は浅皿状である。東側壁には土留め用礫石があった可能性がある。SD173はSD177の南端から東へのびる溝である。南側壁には20cm前後の礫石を据えて側壁としている。幅約60cm、深さ25cm前後で底面は西に向かって低くなっている。断面はU字形。埋土からは木炭片が比較的多く出土した。西側のSA178より新しい時期のものである。SD175はSD177南端からさらに南へわずかに蛇行しながら直線的にのびる溝である。幅約60cm、深さ20～30cmを測る。SD175・177を結んだ主軸の方位は座標北から西偏12°で、SD173とはほぼ直交している。

出土遺物　SD173からは陶器片、軒丸瓦、SD175からは須恵器片、擂鉢片、伊万里系染付片、SD177からは土鈴（35）が出土している。

35は体部最大径は6.4cmで、やや大型の土鈴である。素焼きで焼成はあまり良くない。

SD185　第4面で検出された。断面観察のみで掘り下げていない。調査区中央部からやや西寄りにかけて確認できた。攪乱土壙により寸断されているが、SE148北側壁面とSD149の下部で認められる。幅が約50～60cmの溝で、断面形は「U」字形である。東側壁に人頭大の角礫石を2段以上積み上げている。主軸方位は座標北から8°西へ偏っている。後出のSA178はこのSD185とは並行しており、10.04m西側に位置している。

SD181　調査区のほぼ中央部に位置している。丸瓦を組み合わせて東西方向に設けられた排水用暗渠である。現存長2.1mを測る。東端部でわずかに南東へ向きを変えている。

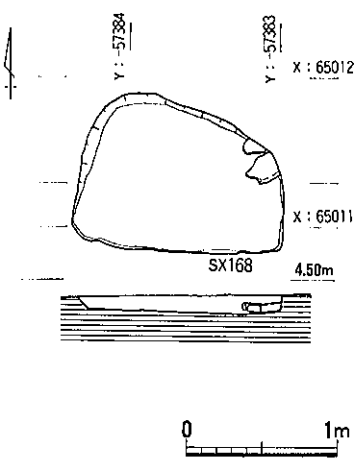
SX168　調査区西側に位置する。不定形の残滓投棄土壙である。長軸が1.43m、短軸が1.06m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で木炭片を多く含む。

出土遺物　SX168からは、瓦質土器片、須恵器甕、伊万里系染付片、鉄釉瓶片、擂鉢、唐津系・高取系陶器片、中国北宋代の白磁、鉄釉椀、土師器(皿・杯)、軒丸瓦、軒平瓦、不明石製品が二次的な混入の状態で出土している。45は白磁椀である。高台径は4.7cm。釉薬は高台畳付部を除き全面に施釉されている。釉薬は透明で、細かな貫入が器面全体にみられる。胎土は白色でややきめ粗く軟質である。46・47は土師器皿である。口径・器高・底径は46が12.3・1.9・8.0cm、47が12.5・1.9・8.8cmである。いずれも焼成はあまく軟質である。底部は静止糸切り。口縁部から体部外面には黒色の有機物が付着している。48は陶器製擂鉢である。口縁部内外面には鉄釉が薄くかかる。口縁下部に段を有している。口径29.6cm、器高11.4cm、底径10.6cm。降ろし目は9条を1単位とする。胎土は赤褐色で良く焼きしまっている。底部は回転糸切りによる。49は尾の長い三巴文の軒丸瓦である。瓦当面直径は14.9cm。焼成はややあまく、軟質である。

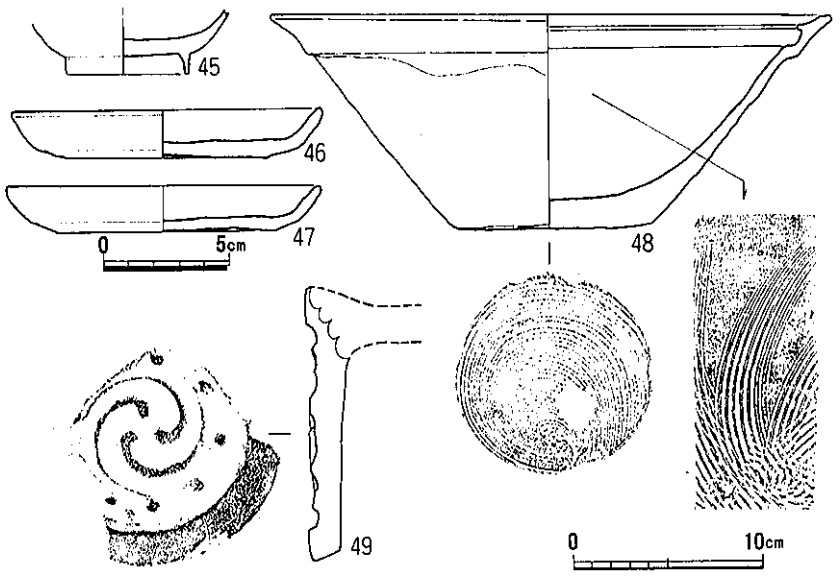
SK169　調査区西南部に位置する。残滓投棄用の土壙である。上部はSX147・SD134から切られている。平面形は隅丸の長方形である。長軸の長さは推定で1.54m、短軸は1.1m、深さは44cm以上である。埋土中位には木炭層が4cmほどの厚さで残っていた。

出土遺物　埋土からは土師器片、須恵器片、軒丸瓦、近世染付片等が出土している。50・51は土師器小皿である。口径・器高・底径は50が7.8・1.9・6.5cm、51が8.6・1.2・6.9cmである。50は肉厚で、内外面ともナデ仕上げ。51は薄手で、内外面とも回転ナデ仕上げ。52は唐津系陶器高台付皿で、内底には鉄釉による草花文を施文している。ハマの三足痕がみられる。釉調は透明の薄い褐色で発色は悪い。高台径4cm。53は青磁小椀である。口径11.2cm。内外面とも薄い青釉薬がかかる。体部の外面下半には鉄釉を施している。胎土は暗灰色。54は白磁小杯である。口径8.2cm、器高5.0cm、高台径2.9cmである。55は染付皿である。口径14.4cm、器高3.1cm、高台径6.0cm。内底見込み、口縁部内外面に界線を巡らし、内面には草花文を配する。胎土は灰白色で、下地は薄く青みがかった不透明な白色である。56は須恵質の擂鉢で片口がつく。口縁部は玉縁状をなし、口縁端部がわずかに上へ引き出されている。体部下半には指圧痕が残る。底部近くで外反し大きく開き口縁部へと続く。内面は回転ナデ仕上げの後、降ろし目を底部から口縁に向かって付けている。色調はやや赤みがある褐色。口径37.1cm、器高14.6cm、底径14.8cm。

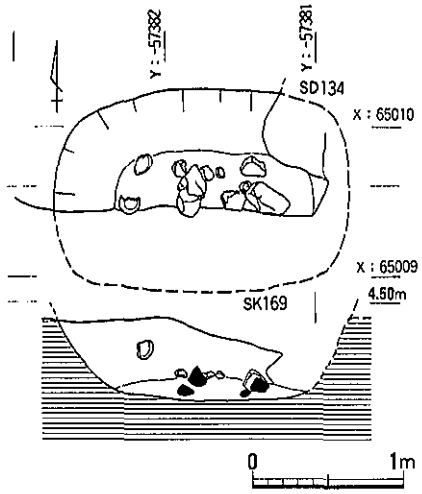
SK170　調査区中央部の北側に位置する。残滓投棄用土壙である。北半分を現代撹乱によって、東側をSX147によって削平されている。平面形は不整な楕円形である。長軸が2m、短軸が1.2mほどで、深さは20cm以上あったものと思われる。埋土は砂礫を多く含んだ黒灰色粘質土で、木炭片を多く含む。



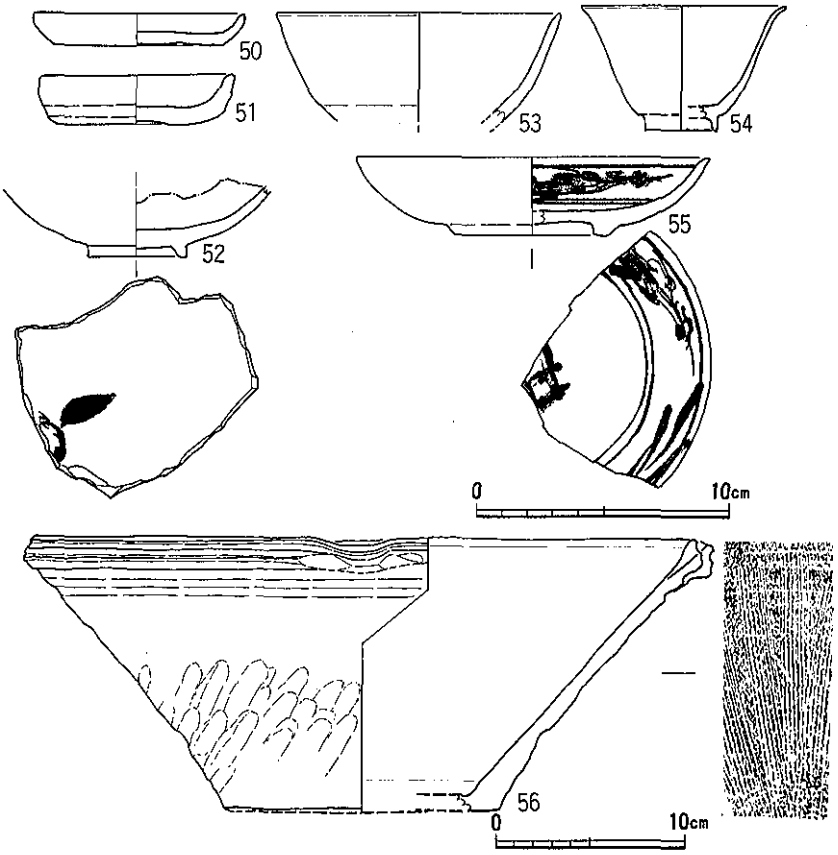
Fig, 23 SX168平面および断面図(1/50)



Fig, 24 SX168出土遺物(1/3・1/4)



Fig, 25 SK169平面および断面図(1/50)

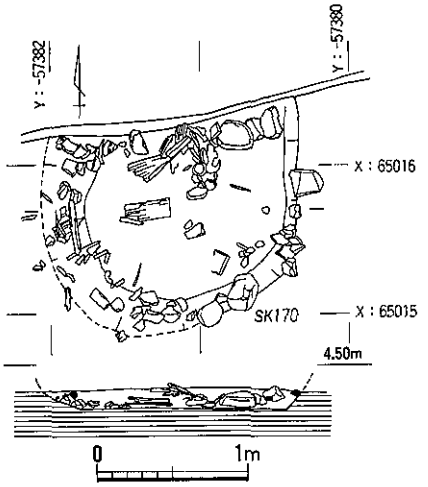


Fig, 26 SK169出土遺物(1/3・1/4)

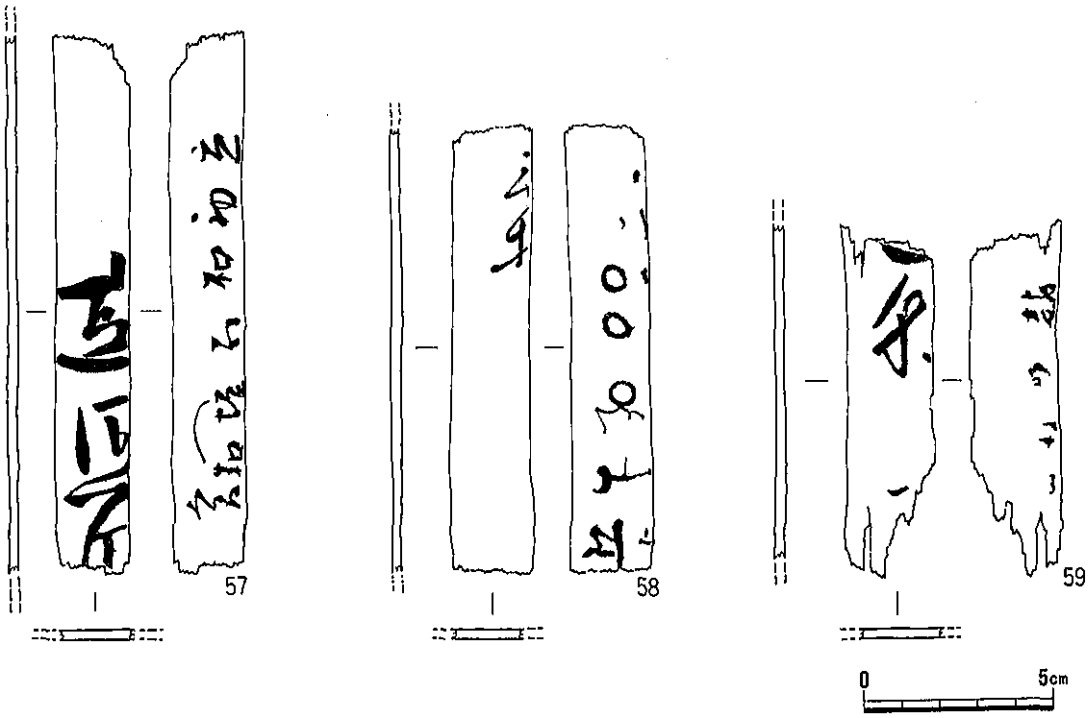
出土遺物　擂鉢、土師器片、伊万里系磁器片、墨書板片、漆器皿、不明木器片、軒丸瓦等が出土している。いずれも二次的に混入もしくは一括投棄されたものである。57～60は表裏に墨書が残る柾目材である。墨書そのものの残りは良好であるが、文字が分断されているために解読は難しい状況である。図の右面では、57が右から「立・初・和・而（白または百か）・堀・□・□」、58が「□（、か）・二・○・○・○・十（ヶか）・五か」と読めそうである。59と60については不明である。右面に関しては数字、ヶ、○が散見できることから何らかの備忘録的な内容ではないかという所見も得られているが、明確ではない。61は赤漆を下地として黒漆で松葉文を重ねた漆器皿である。遺存状況は悪く歪んでおり、木地が一部露出している。復元口径は22.3cm、器高2.1cm、底径は15.8cm。

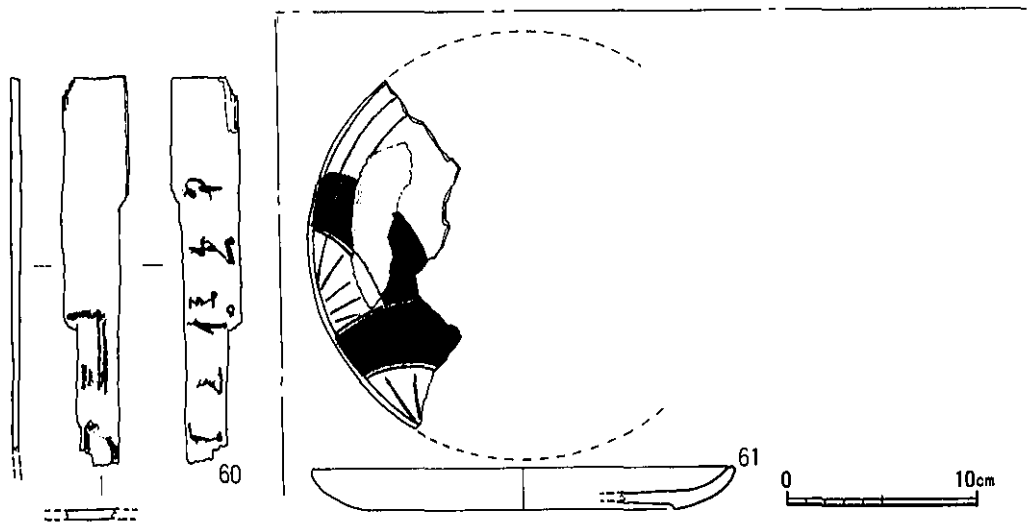
SX174　調査区西南部に位置する。残滓投棄用土壙である。平面形は不整な楕円形である。東側をSD144で、南半分を攪乱土壙で壊されている。長軸が1.97m、短軸が1.5m、深さは57cm以上である。

出土土器　伊万里系染付片、唐津系鉢・壷、緑釉皿、中国製褐釉陶器片、土師器皿、磁器、軒丸瓦（巴文）が出土している。62は唐津系ハケ目手の陶器鉢である。口縁部内面から器壁外面に半透明のアメ色の釉薬をかけている。口径は12.5cm。口縁部は肥厚し、丸く納めている。胎土は暗赤褐色で良く焼きしまっている。63は軒丸瓦である。中央に右回転の三巴文を、その周囲に12個の珠文を配している。焼成はややあまく軟質である。瓦当面径は14.1cm。

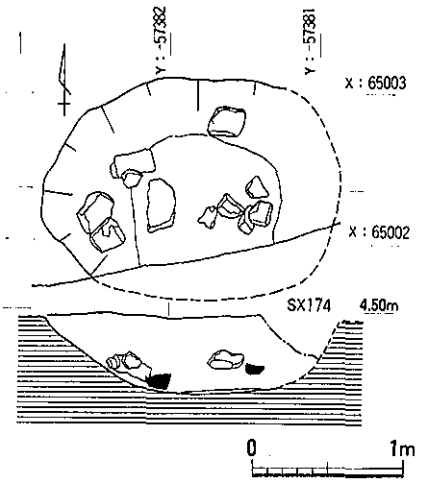


Fig, 27 SK170平面および断面図(1/50)

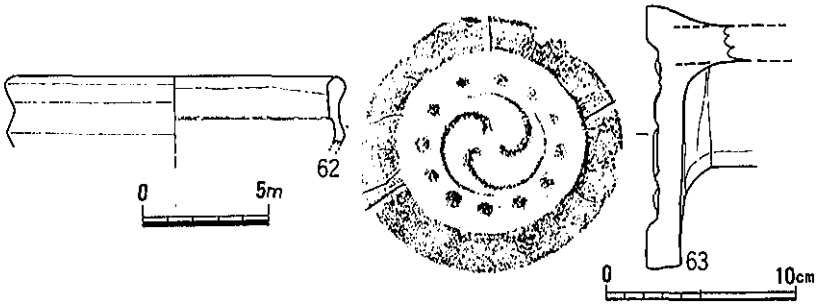




Fig, 28 SK170出土遺物(1/2・1/4)



Fig, 29 SX174平面および断面図(1/50)



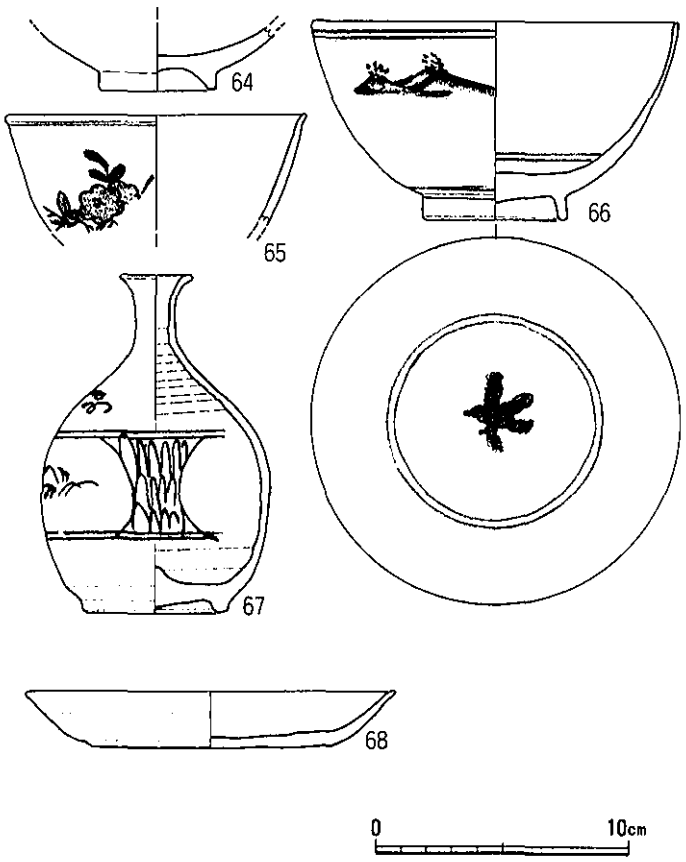
Fig, 30 SX174出土遺物(1/3・1/4)

SX184　調査区中央部からやや西南部に位置する。SD185の東側に接している。攪乱土壙によって削平を受けておりほとんど形状をとどめていない。おそらく径が1.5mほどの円形の土壙であったと思われる。攪乱土壙断面からみて真砂土層の下部からと考えられる。

出土遺物　土師器が数点出土している。68は土師器杯である。口径14.5cm、器高2.3cm、底径9.4cm。薄手の作りで、器面は全面ナデ仕上げである。底面は糸切り後ナデ消している。口縁端部にススが付着している。

SX182　調査区西側に分布している瓦礫を多く含む土層である。分布のあり方からみてSD173とSD177に関連する整地土層と思われ、瓦礫の集積は整地の際の混入遺物と考えられる。木炭片や板材小片も含まれている。

出土遺物　伊万里系の染付、丸・平瓦が出土している。64は唐津系の刷毛目手の小椀である。灰白色の釉薬を左回転でかけている。高台径は4.6cm。65・66は染付椀である。65はやや大ぶりの椀で、口径12cmを測る。呉須はくすんだ青灰色で発色は良くない。外面に草花文を描いている。釉調は良好で全体に青みを帯びている。胎土は灰白色で非常に細かな黒色斑がみられる。66は大ぶりの椀で、素地はかすかに黄ばんだ白色で、細かな貫入がみられる。呉須は黒ずんだ青緑色。内底の見込みにはやや粗いタッチで五弁花文を配し、界線を二重に巡らしている。外面にはデフォメル化した山水文を描いている。口径は14.6cm、器高5.8cm、高台径7.9cm。67は染付瓶で、膨らみのある球形の胴部に網目文と草花文を界線で画して配している。呉須は緑色がかったくすんだ青色で発色は悪い。高台には砂目跡が付着している。口径2.8cm、高台径5.8cm、胴部最大径9.0cm、器高13.5cm。これらは17世紀後半ごろに比定できる。



Fig, 31 SX182・184出土遺物(1/3)

SX183　SA178の西側に位置する瓦礫が面的に集中する部分である。SD165よりも下面から始まり、またそれを覆っている。何度かの整地による所産かと思われる。

出土遺物　備前焼擂鉢、肥前系擂鉢、軒平瓦、丸瓦等が出土している。42は瓦質の火鉢口縁片である。口縁径は31.4cm。やや軟質で焼成はあまい。43は陶器製擂鉢である。口縁部には内外面に鉄釉が薄くかけられている。口径は30cm。44は丸瓦である。現存長27.2cm。焼成はややあまく軟質である。

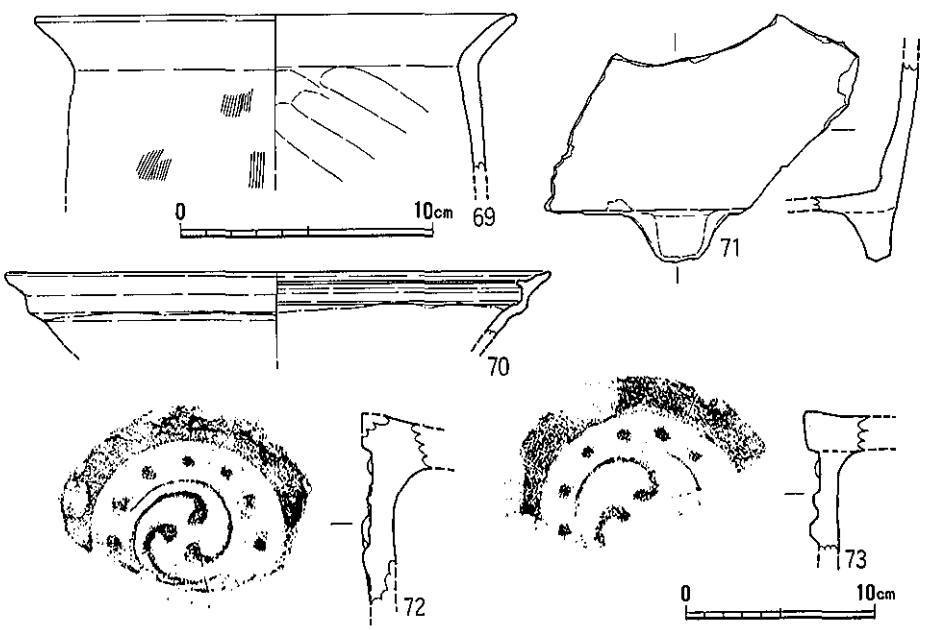
SX167　SA166の西側に位置する。瓦礫の集積する部分であり、先に述べたSX183とは一連の遺構と考えられるが、層位的には若干低いレベルから検出された。

出土遺物　瓦礫の中からは、二次的堆積で弥生中期土器片、古墳時代から中世の土師器片、唐津系と思われる鉄釉瓶片（甕底部）、近世平瓦、軒丸瓦（巴文）、軒平瓦等が出土している。

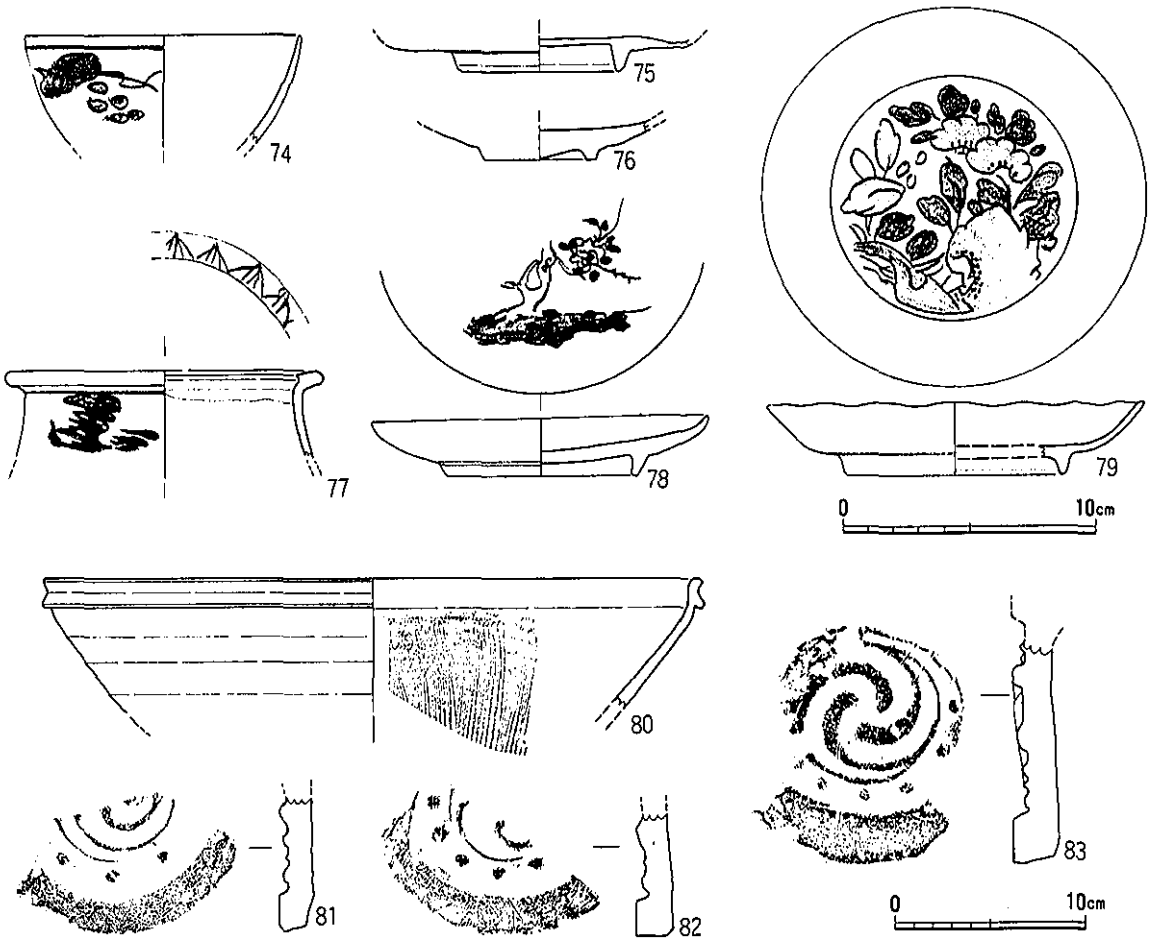
その他の遺物　攪乱土壙、遺構検出の際の出土遺物について次に述べる。

69は土層観察用トレンチ１で出土した奈良時代の土師器甕である。内面はヘラケズリによる整形。復元口径18cm。71～73は第６層の灰白色砂層から出土したものである。70は陶器製擂鉢。焼成良好で

堅く焼きしまっている。口縁部内外面に褐色の鉄釉がかかる。口径29cm。71は瓦質の火舎底部破片である。三足もしくは四足の逆台形の脚が付く。表面はミガキ仕上げである。72・73は軒丸瓦で、尾の長い三巴文を中央に配す。いずれも焼成はあまく軟質である。



Fig, 32 白砂層・第1トレンチ・撹乱土壙出土遺物(1/3・1/4)



Fig, 33 第3・4検出面出土遺物(1/3・1/4)

74～83は第３面で出土。74・77～79は肥前系染付の椀（74）、壺（77）、皿（76～78）である。74は口唇部外面に界線をめぐらし草花文を施している。発色はやや良好。口径11cm。77は口縁部に松葉文を施文。発色は良好。口径12.6cm。78は梅花文を見込みに配している。口径13.2cm、器高2.4cm、高台径7.6cm。79は型打ちによる成形で、見込みいっぱいに草花文を配している。波状口縁端部は鉄錆釉を施している。口径15cm、器高2.9cm、高台径8.6cm。75は鉄釉陶器鉢で、暗褐色の釉薬がかかる。器壁は薄く焼成良好。茶器水差か。高取系の可能性がある。76は唐津系皿高台片である。内底見込みに砂目跡が付く。高台径は4.4cm。80は陶器製擂鉢。６条を１単位とする降ろし目が底部から口縁部に向かって付く。口縁部内外面には鉄釉を施釉。口径35cm。81～83は軒丸瓦である。いずれも右回転の三巴文を配している。83は巴の尾が界線状にそれぞれ接している。84～99は文字瓦の刻印である。瓦師名や屋号名、家紋などがみられる。瓦師名では、市衛門84、九郎左衛門86、今宿三右衛門93、今宿又市95、長左衛門（？）96、彦兵へ（？）97などが読み取れる。

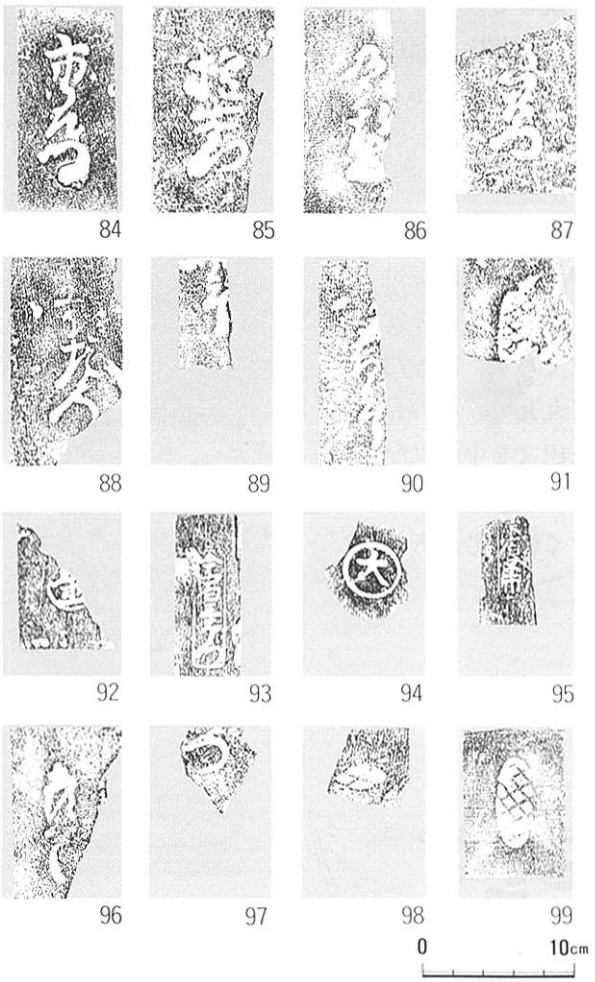


Fig. 34 第28次調査出土文字瓦拓影(1/5)

(3) 小結

本調査区は、福岡城築城後、一時侍屋敷地として利用された後に、３代目光之の代になって藩主私邸が置かれた所にほぼ相当する。光之が本丸から入居したのは寛文11年(1671) 6月19日である。江戸時代を通じて藩主私邸だったこの地は、明治維新後は県庁として一時利用され、その後旧陸軍の演習場として終戦まで使われた。

今回の調査では、福岡城跡に関しては17世紀末から18世紀にいたる溝や石列、掘立柱建物、土壙等の遺構を確認することができたが、戦後の攪乱が顕著なために屋敷地全体の構成を知るにはいたらなかった。しかし各遺構の先後関係と方向性から少なくとも３時期に分かれることが確認できた。すなわち、第Ⅰ期が大規模な造成跡とSA185とSX184・186等の遺構群、第Ⅱ期が真砂土を整地面としてそれを切る古い段階の石列等の遺構群(SA166・178など)、第Ⅲ期はそれらと並行もしくは後出と考えられる石列群(SA180・SD187)、石列群を切る溝等の遺構のうち江戸期に含まれるものである。十分な検討を経ていないために現段階の見通しとして述べると、出土遺物からみて第Ⅰ期が17世紀初頭を上限として17世紀代、第Ⅱ期が17世紀末から18世紀前半代、第Ⅲ期が18世紀後半代以降と考えている。

鴻臚館跡については直接的な所見は得られなかったが、旧地形復元に関する所見がトレンチ調査およびボーリング調査によって得られた。これについては第３章でふれる。

Tab, 3 第28次調査遺構別出土遺物一覧

遺　構	遺　　物
表　採	白磁片（小玉縁Ⅰ類、Ⅴ類・口禿Ⅸ類） 越州窯青磁片、龍泉窯青磁片（13C） 伊万里系染付片（椀・皿・鉢）、擂鉢、 磁器片（有田－近現代）、備前焼擂鉢片、絵唐津片、 鶴首瓶片、唐津（鉢）、高取焼片（茶入・椀） 小石原片（鉢・椀）、土管（近現代） 須恵器片（杯蓋－８Ｃ代）新羅陶器片（甕・瓶） 土師器片、布留式口縁部１点－古墳時代（５世紀） 土師質土器片（－中近世）、その他不明破片 丸瓦、軒丸瓦、釘、土錘 銅銭（元豊通宝・寛永通宝）
攪　乱	近世染付片（皿・鉢・椀・蓋）、白磁片（Ⅳ類口縁） 龍泉窯青磁片（13C代）、越州窯青磁片（水注）、 磁器片（有田系－近現代）、黄釉鉄絵盤片（12C）、 褐釉片（茶入）、絵唐津（皿）、高取系摺鉢口縁部、 小石原片、陶器片（擂鉢－近世）、高取系片、 朝鮮新羅陶器片（甕）、土師器片 軒丸瓦（巴文）、滑石
第１面	緑釉片、越州窯青磁片（椀・小壺）瓦器片、 須恵器片、魚住窯系捏鉢片（13～14C）、高麗青磁片、 褐釉陶器片、伊万里系染付片、 土師器片（古墳時代、中世－皿・杯・甕）
第２面東	須恵器片（奈良時代）、土師器片、陶器片（擂鉢口縁部－近世）
第２面西	龍泉窯青磁片（15C）、白磁片（玉縁口縁） 唐津片、伊万里染付片（18C）、褐釉陶器片 陶器片（擂鉢・瓶）、須恵器片、 高取系陶器片 古墳時代土師器片（二重口縁―４Ｃ代・壺・脚付 碗－５Ｃ・甑取手・甕口縁） 中世土師器片（皿・甕） 軒丸瓦（巴文）、平瓦、下駄、銅銭
第３面	土師器片、伊万里染付片（皿・椀・猪口・鶴首瓶） 陶器片、軒丸瓦（巴文）
第４面	唐津系片（皿・刷毛目手）、龍泉窯系青磁片、 備前・肥前系擂鉢片、高取系陶器片 施釉陶器片（壺・甕・鉢、中国・新羅系） 新羅陶器片（口縁部９Ｃ代か）、須恵器片 土師器片（小皿・火鉢・杯皿）、キセル（雁首） 平瓦、丸瓦、軒丸瓦（巴文）、軒平瓦
第１トレンチ	土師器片（椀・奈良時代甕）、須恵器片（甕）、 新羅陶器片
西半部 白砂層	須恵器片（杯－６Ｃ）、伊万里系、染付片、 龍泉窯系青磁片、瓦質火舎 土師器（皿－近世、甕－奈良期、皿・杯・椀－中世） 軒丸瓦（巴文）
SD132	中国製白磁片 （椀－小玉縁Ⅰ類口縁部・皿－口禿Ⅸ類口縁部） 伊万里系染付片、肥前系染付片（近・現代） 唐津（小椀・椀・皿）、備前擂鉢、高取または肥 前系擂鉢、須恵器片、新羅系陶器片（９Ｃ－10代 か）、土師器片（中～近世）、薬きょう、ガラス、 釘丸瓦（「金」のスタンプ）、軒丸瓦（巴文）
SD134	土師器片、中国製白磁片
SD135	中国製白磁片（玉縁口縁椀・Ⅰ類・Ⅳ類）Ⅸ類

遺　構	遺　　物
SD137	中国製青磁片（龍泉窯－15C） 施釉《褐釉・鉄釉》陶器片（鉢・擂鉢・瓶・鶴首） －日本製18C 伊万里系染付片（皿・鉢・椀）、陶器（蓋） 唐津系陶器（椀・皿－18C）土師器（小壺－近現代）、 土師器片（皿・土鍋・火鉢）－近世、須恵器片－6C代 平瓦（「大」のスタンプ）、軒丸瓦（巴文） 釘、薬莢、不明銅板、不明土製品
SK138	土師器片（皿－近世か）、中国製白磁片
SP141	肥前系染付片－近代、瓦片
SD144	唐津系陶器（皿）、伊万里系染付、ガラス・染付 片－近代、瓦器、土師器片－中近世、
SD145	備前・中国製白磁片－中世、新羅系陶器片、 須恵器片
SD146	土師器片、平瓦
SX147	龍泉窯・同安窯青磁片－13C、 越州窯青磁（椀・四耳壺）、白磁片（Ⅰ類・Ⅳ類 椀・口禿）、中国製陶器片、肥前系染付片（18C） 染付・磁器片（近現代）、日本製陶器片（擂鉢）、 唐津系陶器片（椀・皿）－18C 須恵器片（高台付杯・甕）－７～８Ｃ 新羅系陶器片瓦質火舎片、 土師器片（皿・杯・土鍋－中～近世） 軒丸瓦（巴文）、キセル（雁首、吸口）
SE148	瓦質土器、須恵器片、中国製白磁片（Ⅳ類）、 龍泉窯青磁片（15C）、軒丸瓦（珠文）、軒平瓦
SE148上	越州窯系青磁片、須恵器片、朝鮮陶器片、土師器 片、擂鉢、片伊万里系染付
SD150	中国製白磁片、土師器片（５Ｃ）、須恵器片 唐津系陶器片、磁器（現代）
SD151	土師器片－古墳時代～中・近世、擂鉢 唐津系陶器片（椀）、須恵器－６Ｃ、磁器（近現代） 中国製白磁片、李朝白磁片か
SE152	染付・陶器片（近現代）伊万里染付片（近世）、 擂鉢片、土師器片（皿）、皮ひも
SX167	土師器片（坩・杯・皿－古墳～中世）、鉄釉瓶片 （唐津系か）、弥生中期片（甕底部） 平瓦、軒丸瓦（巴文）、軒平瓦
SX168	瓦質土器片、須恵器片（甕）、伊万里系染付片 鉄釉瓶片、擂鉢、唐津系・高取系陶器片、白磁 伊万里系染付片、鉄釉（椀）、土師器（皿・杯）、 軒丸瓦（巴文）、軒平瓦
SK169	土師器片、須恵器片、軒丸瓦、近世染付片
SK170	擂鉢、土師器片、伊万里系磁器片、黒雲板片、 不明木器、軒丸瓦
SK171	伊万里系染付片（皿）、陶器片
SP172	唐津刷毛目手（椀・直口壺）、染付片（近代）
SD173	陶器片、軒丸瓦
SX174	伊万里系染付片、唐津片（鉢・壺）、緑釉片（皿） 中国製褐釉陶器片、土師器片（皿）、磁器、軒丸瓦
SD175	須恵器片、擂鉢片、伊万里染付片
SD176	土師質土鍋片、土師器片（皿）
SD177	土鈴
SA178	土師器片（皿）、須恵器片、染付片、寛永通宝
SA179	染付片（近世）、陶器片、須恵器片、須恵器（杯） 土師器（皿）、唐津系緑釉（壺）
SX182	伊万里系染付、丸・平瓦
SX183	擂鉢（備前・高取または肥前系）、軒平瓦、丸瓦
SX184	土師器杯

３．第30次調査（調査番号9463）

(1) 調査の目的

福岡城跡三ノ丸東郭を巡る土塁のうち、赤坂に面して東西に延びる土塁は、旧陸軍本部官舎建設によって東南隅から西側延長部分についてはほとんど原状をとどめないほど壊され、推定長約250ｍのうち約50ｍほどが遺存しているのみである。

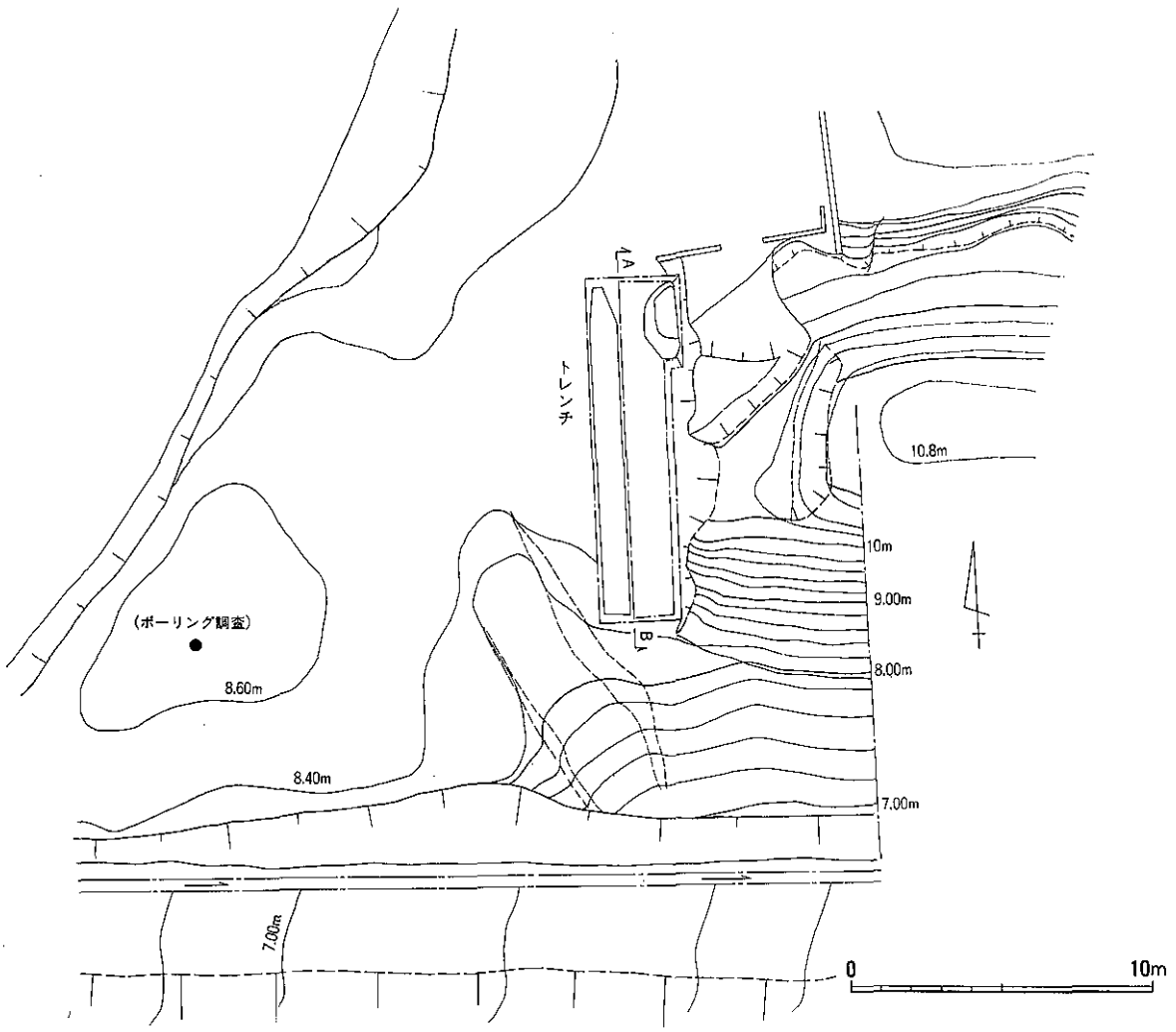
調査の対象とした地点は、昭和24年前後の平和台野球場建設に際して、土塁西側部分が大きく壊された箇所にあたる。その後の周回管理道路の整備に併せて行われた造園工事によっても一部が壊され、最近では、陸上競技場のトラックの維持管理の結果生じた廃土の処理場として使われ、ますます本来の土塁形状が失われてゆく状況であったために、現状の測量調査と土塁基底部の確認調査を目的として実施した。

(2) 調査の概要

調査地点は三ノ丸東郭南縁土塁の東南隅頂部から西へ約200ｍを測る地点であり、宝暦７(1757)年以降に作成された絵図「福岡城絵図」によると、三ノ丸東南郭の立花家(後、大音家)へ続く土塁の入り隅部分近くに位置している。絵図では土塁下に石垣(いわゆる腰巻石垣)が描かれている。

測量調査は狭い範囲であるが、現存土塁の西側部分について法務省と大蔵省九州財務支局所管の敷地境界をまたぐ形で実施した。

発掘調査は土塁西端部に主軸とほぼ直交して幅2.5m、長さ11.5ｍの土層観察用トレンチを設定し掘り下げ、土塁の構築状況と基底面の確認のために土層堆積の状況を観察した。



Fig, 35 第30次調査区平面図(1/250)

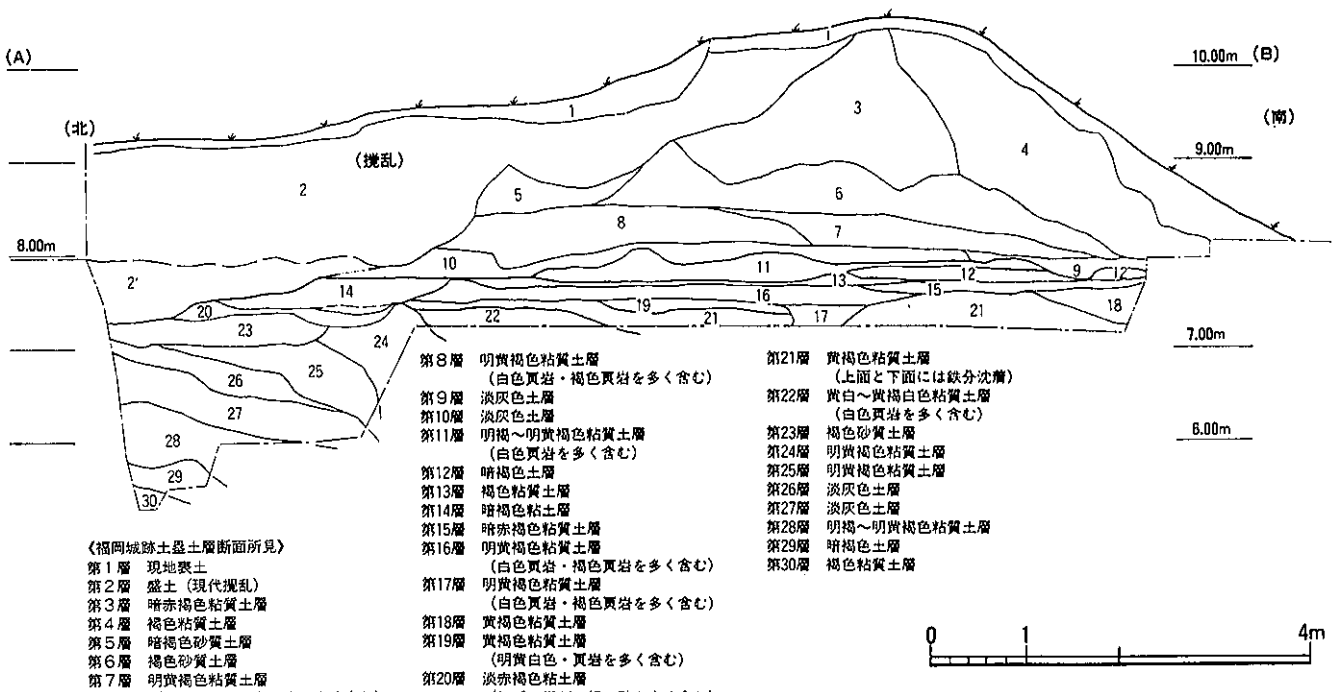
(3) 土塁断面および盛土造成の土層堆積状況

土塁の基底面と考えられる土層は第14～16層である。上面は標高7.5mである。遺物には古代の平瓦片や白磁片等の鴻臚館跡関係のものと考えられる遺物が出土しているが、土塁の構築時期を直接推定できる遺物は出土していない。現存の土塁頂部までの高さは3.1mを測る。土塁の盛土の状況は、16層から１mほどまではほぼ水平の堆積状況であるがそれ以上になるとかなり大まかな盛土を行っている。版築等の工法は認められず、風化頁岩、頁岩風化土を主に用いた盛土は軟質であまりしまっていない状況である。南北外壁とも新しい時期の削平を受け旧形状をとどめていない。

第14～16層の下部については盛土造成の状況が観察できた。最深部は標高5.30mまで掘り下げたが地山まではいたらなかった。平成７年度に実施したボーリング結果（Fig,35の●の地点）では、標高約1.2mの面で風化頁岩岩盤が認められていることから、第16層を基準にすると約６mほどの厚さで盛土造成が行われたことになる。ただしこの盛土造成の時期については筑紫館創建時にも大規模な造成が行われたことが第20次調査で確認されており、盛土造成すべてを福岡城築城時のものと結論づけるまでになっていない。

(4) 小結

福岡城跡内堀内壁を巡る土塁のうち旧形状を最も良くとどめているのは、三ノ丸西郭西縁に構築された一連の土塁と高等裁判所地内の三ノ丸東郭東縁部の土塁である。これらの土塁の現状規模は、土塁内現地表面を基準にすると、高さが2.5～3.6m、土塁上底幅が3.5～５mで、基底部幅（現地表面高と土塁外傾斜面との交点までの長さ）が約12.5～15.0mを測る。調査した土塁規模は、標高7.5mを基準とすると基底部幅が10m以上、高さが3.1m以上で、上底部幅が1.5m以上が想定できる。現存土塁はなだらかな高まりといった方がよい形状であるが、後世の削平等を考慮すると、それぞれの現存値に＋1.5～2.0mほどの値をたした台形状を本来成していたと考えられる。また土塁の東西主軸線は少なくとも３m、最大で５mほど現在位置よりも南へずらした位置にあったのではないかと考えられる。本来の形状を知るためにも土塁下部および腰巻石垣等の今後の確認調査に期待したい。



Fig, 36 福岡城跡土塁土層断面図(1/80)

第3章 結 語

鴻臚館跡の調査は、昭和62年度末から平成6年度までで8年次を迎えた。その間、平安時代の礎石建物、筑紫館の東門と塀、トイレ遺構、推定南門基壇跡の発見などが相次ぎ、唯一残った鴻臚館跡としての重要性をさらに高めたといえる。全容解明に向けての調査は今後も引き続いて実施して行く予定であるが、これまでの調査において未解決となっている問題点や未整理のままとなっている問題点が数多くあることは否めない。ここでは今年度の調査成果を踏まえて、鴻臚館跡の範囲の推定と、建物施設の構成および変遷過程の見直しについて述べ、まとめとしたい。

1．旧地形復元からみた範囲推定

鴻臚館跡第II期調査は鴻臚館跡の範囲推定を行うにあたって、福岡城跡三ノ丸北西部における旧地形復元のための資料を得ることを目的として実施した。

平成5年度は、第6トレンチで撹乱部分を標高2.5mまで掘り下げ、厚さ3.5～4mもある盛土層下部に室町時代後半から末期の遺物を含む沖積層の存在を確認した。また舞鶴中学校敷地内のボーリング調査を行い、標高2～2.5mの面から下部の土層中に鹹水性の貝殻片を含む沖積砂層が存在することがわかった。平成6年度の調査では、調査区の東南部において、岩盤の露頭と沖積砂質の整合面が確認でき、沖積砂層が博多湾岸に分布している住吉層上部層に相当する可能性が高いという所見を得られた。また平成元年度から実施しているボーリング調査の62地点におよぶこれまでの調査データのうち、標高2.5m前後の面で分布している砂質土層分布と築城時およびそれ以前の所産と考えられる土層下部の地山（第3紀頁岩層）等深線図の作成を行った。

(1) 旧地形の復元

これらの所見をもとに、福岡城築城前の三ノ丸西辺から北辺の旧地形は以下のように推定できる。

福岡城本丸と三ノ丸北西隅に立つ潮見櫓の東側約80mあたりを結んだ線上(北西方向)を狭い尾根筋が若干の高低差を持ちながら続き、黒田如水の隠居屋敷とされる御鷹屋敷が小高い岡となっていた。尾根は潮見櫓の北東部まで続き、博多湾に弱く突き出た岬状となっていた。この岬から西側の汀線は大きくいったん南西方向に向きを変えた後、御鷹屋敷が占地する高台下に大きく湾入して、現在の舞鶴中学校敷地の東側から城内住宅の東縁(城内道路)をめぐって南西に延びていた。一方、東側の汀線は、南東方向に延びながら現在の陸上競技場北西部でほぼ東側に向きを変えて平和台野球場の内野周辺に向かって延びていたと思われる。平和台野球場から東側の地形は、斉藤次男氏の復元案およびそれに依拠した亀井明徳氏の復元案がすでにある。それによると、平和台野球場東側と福岡高等裁判所間には、浅い谷が湾入していたとされており、鴻臚館跡の東限域の根拠となっている。

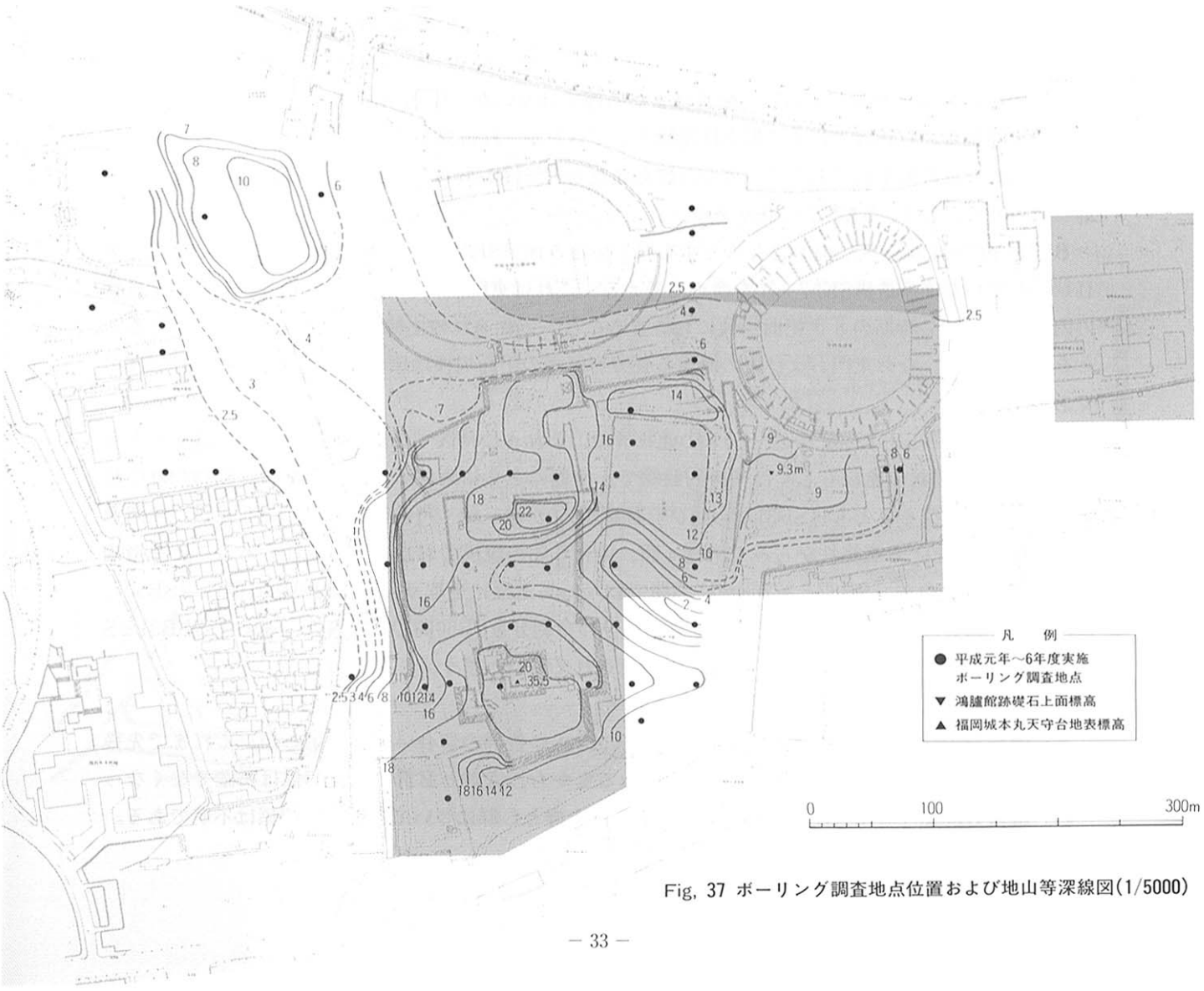
なお汀線としたのは、住吉層上部層と考えられる暗灰色砂質土が標高2.5m前後の面で分布している範囲を指しており、必ずしも波打ち際のラインではない。下山氏によると乾燥の進んだ潟の状態と捉えられるとの所見を頂いている。

福岡城築城前の福崎の地形については、貝原益軒『筑前国続風土記』により、「城の西の方、むかしは福崎の汀まで入海有りて、広き潮入の斥地」で、「城の北の方町ある所、又乾の方荒戸、諸士の屋敷なと、むかしは入海の潟也」と記し、また「城の南方は、赤坂山より本丸の山につつきて、要害のためあしかりしかは、山をほり切りて隍とし、隍の南の山をならして平らにす」と伝えられてきたところであり、今回の調査所見はこれをより具体的に裏付けるものである。

(2) 鴻臚館跡の範囲推定

鴻臚館跡関連遺構の範囲は、第Ⅰ期から第Ⅲ期遺構群が集中的に分布する平和台野球場南側一帯を中心として、その周辺に広がっているが、その範囲については未確定である。第Ⅱ期調査はその範囲の西限域を推定するために計画したものであるが、先述した推定地形の状況、およびこれまでの調査から判断すると、鴻臚館関連遺構の広がりは、西側が御鷹屋敷跡の占地する孤立丘から現在の城内道路辺りまでと考えられ、また北側については陸上競技場の中央部から平和台野球場内野席辺りまでと推定できる。ただし、第20次調査で確認されたように、筑紫館創建時の大規模な盛土造成がどの程度の規模で行われたかが北側については明らかではないことと、地下鉄工事の際に大量の古代の瓦と共に中国産陶磁器が出土していることを考えると、北縁部については現在の福岡城内堀内壁部分までと一応想定しておきたい。

福岡城築城前の地形復元と福岡城内における遺物の分布調査を基にすると、Fig.37のアミカケの範囲が鴻臚館関連施設の存在が予想される範囲となる。東西に約400m、南北に約300m以上の範囲である。今後これらの範囲の重点的な調査が必要と思われる。特に注目されるのは、第Ⅰ期調査が実施された平和台野球場南側一帯の西側に隣接する約100m四方の広がりを持つ球技場部分の平坦地と、ほとんど盛土で構築されたと考えられる二ノ丸から本丸の範囲である。この範囲は第Ⅲ期建物が廃絶された後の施設の特定および文献に現れる警固所の所在等の鴻臚館の施設構成の実態を明らかにする上で重要と思われる。



Fig, 37 ボーリング調査地点位置および地山等深線図(1/5000)

2．建物施設変遷の再検討

(1) 問題の所在

鴻臚館跡の遺構の時期観については、これまで下記のように推定してきた。

第Ⅰ期遺構：塀、東門、掘込地業。

第Ⅱ期遺構：掘立柱建物、柵、便所遺構。

第Ⅲ期遺構：礎石建物、南門推定基壇

特に第Ⅱ期遺構については、第Ⅰ期の矩形に画する塀を廃絶した後に、ほぼ同じ平面区画で南面を南へ9m新たに拡張し（SA16）、柵内にはSB320をはじめとする掘立柱建物を「冂」字形に配置して造営されたと考えていた。また第Ⅱ期の柵の東面中央には柱間の広い箇所があることから出入口の存在を想定してきた。ところが、第20次調査と第27次調査の結果、南・東面のSA150・301、西面のSA303において、それまで柵列と考えていた柱穴が第Ⅰ期塀の柱抜取り穴であることが明らかとなった。また、北面のSA15とSB16の関係においても同様な状況が推定できた。したがって、第Ⅱ期遺構群とした柵列と掘立柱建物、便所遺構という構成については再検討の必要が生じるとともに、第Ⅰ期遺構との先後関係が再び不明確となった。

ここでは建物施設の構成を見直し、各群の先後関係についてこれまでの調査結果を踏まえて再検討し、今後の調査研究の課題としたい。

(2) 遺構群の構成

A群は掘立柱建物SB320をはじめとする建物群で、第27次調査で確認された基壇状高まり下の地山面で確認されたSB324を新たに含めて考える。第2章－1で述べたようにこれらの建物は柱掘方の形状とその主軸方位が共通している。配置はまだ明確ではないが、「冂」もしくは「口」字形の建物配列が想定される。建物はこれまで掘立柱建物としていたが、柱痕跡が認められないこと、柱掘方内の埋土が均質な頁岩風土化であること等から礎石建物の可能性もあることを考えておきたい。なおこの群に入るものとして、SA273・316がある。

B群は東門SB300、SA301をはじめとする塀、掘込み地業SK140等の建物群で、さらにこれまで第Ⅱ期としていた便所遺構SK57～70を含めて考える。これは東門柱抜き穴や、SK70等からの出土遺物の内容がほぼ同じ時期の8世紀前半代におさまること、それぞれの主軸方位が同じN-5°-Eをとることを根拠とする。なお東門および塀の画する長方形区画の平面規模は東西に74.07m、南北に56.26mである。

C群は礎石建物SB31・32・322・50等の建物群で、これらに付設する基壇および雨落ち溝などを含む。SB31は回廊状の建物もしくは子房的建物で、南側にさらに延びる可能性がある。SB322はこれまでは南側に延びるとともにSB31から延びた軒廊SB50が取り付く可能性を指摘してしたが、柱間が10尺（298cm）をとる規格性からみて桁行4間、梁行5間の規模でおさまる可能性もあることを指摘しておきたい。なお、SB32と322間が柱芯間で12尺（馬道幅）を取り、SB322の南妻側柱はSB50とは柱芯間で約8尺（240cm）離れている。馬道部分の余剰分をSB50間で2尺省き、連結するSB31とSB50の柱位置との整合性を図っていることは注意されて良いと思う。

(3) 遺構群の先後関係について

次に遺構群の切合い関係についてみてみる。Tab, 4に各群の切合い関係を示した。これまで先後関係の鍵であった柵列SA16が存在しなくなったことから、A群とB群の先後関係は明確でなくなった。C群はB群よりも明らかに後出のものである。A群とC群についても切合い関係は不明である。

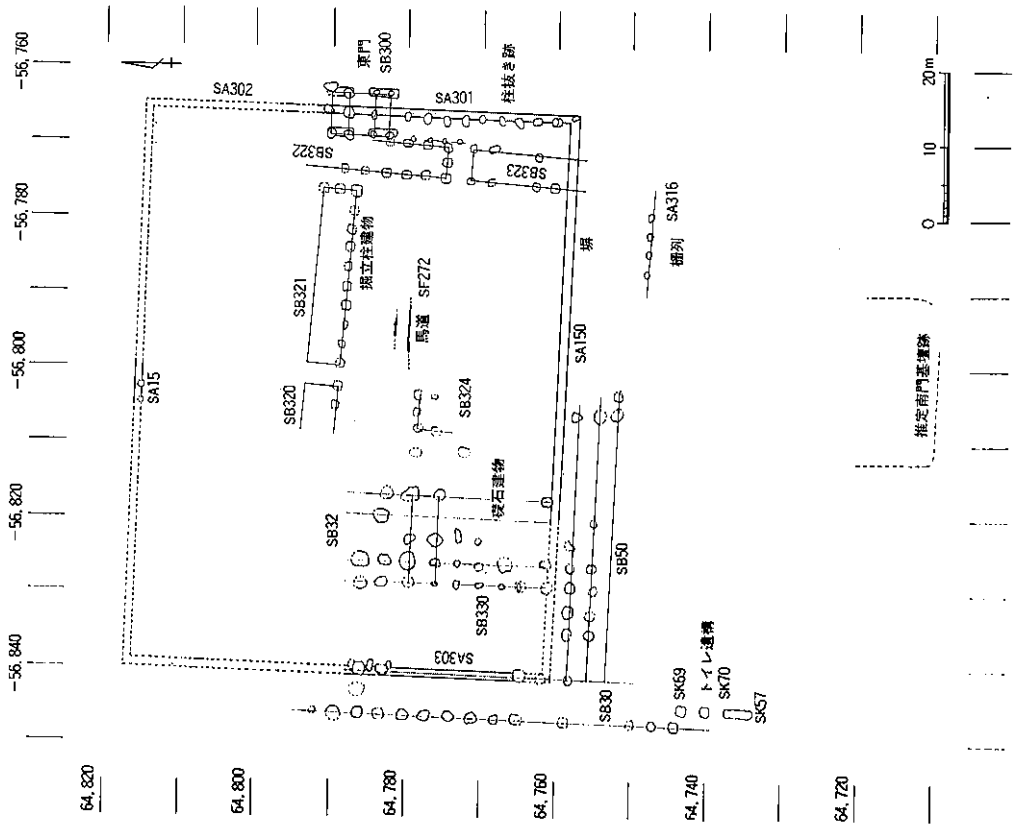


Fig. 39 平成6年度段階の第Ⅰ期～第Ⅳ期遺構推定配置概要図

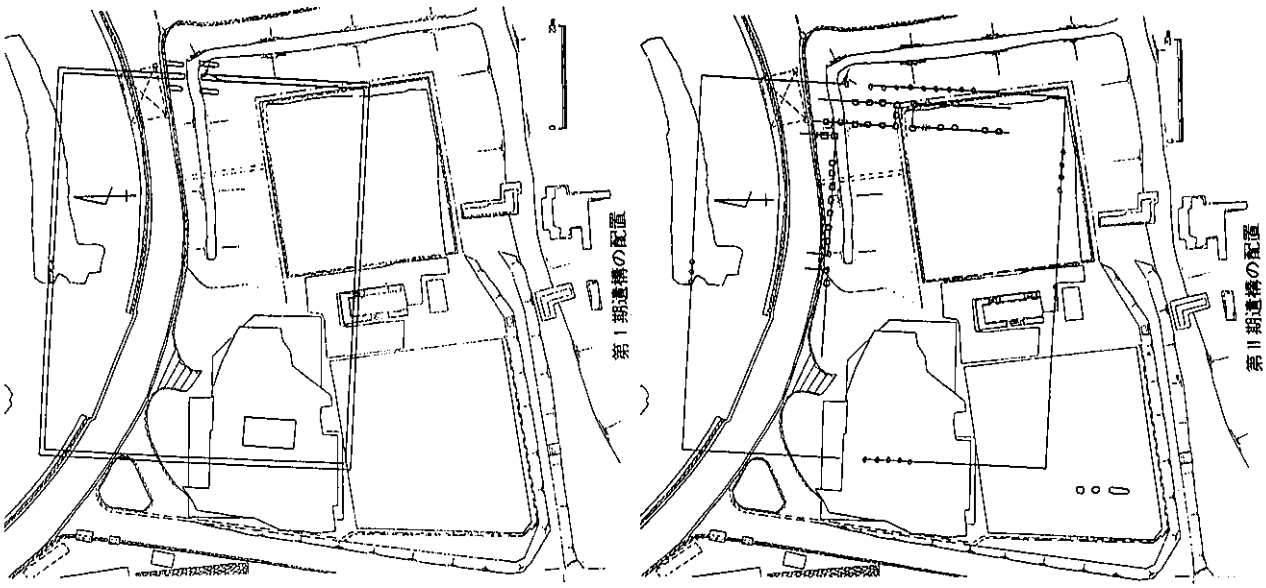


Fig. 38 平成4年度段階の第Ⅰ期・第Ⅱ期遺構推定配置図

したがって、これまでのところではB群→C群という図式を描くことは可能であるが、B群についてはその帰属する時期については不明といわざるを得ない。

ところで、A群はB・C群とその方向性において異なっており、施設建設にあたっての平面的計画がA群とB・C群とで断絶していることがわかる。B群とC群は、方向性、使用尺、建物配置のあり方から共通する要素が多いことから、C群はB群の廃絶後その平面的計画性を踏襲して建築が行われたと考えられる。

第27次調査で確認されたSB324は基壇状高まりの下部地山面から検出された遺物である。他の遺構群との直接的な切合い関係はないものの、層位的には最も古い時期の遺構の可能性が高いものである。これを根拠として、A群は第27次調査で検出されたSB324を初現とするより早い時期の創建に関わる遺構と仮定すると、A群（旧第II期）→B群（旧第Ⅰ期）→C群（旧第III期）といった遺構群の変遷過程が推定できる。

なお、SA273・316やSF272、SD357などのように、時期的な位置づけおよびその他の遺構との関連づけが十分できない遺構も多分にあり、今回推定した遺構の変遷がさらに細分できる可能性があることを示唆している。今後の調査において十分検討すべき課題である。

Tab, 4 各遺構群の概要と先後関係（切合い関係は各群間のみに限った）

遺構群	遺　構	切合い関係	方　位	出土遺物概要
A群 旧第II期	掘立柱建物SB320～323 SB324	切合い関係なし 基壇状高まり地山面検出	N-5°-E	出土遺物なし 縄目叩き平瓦
B群 旧第Ⅰ期	塀SA15（旧SB15） SA150 301 302 303 東門SB300 掘込み地業SK140 便所遺構SK57・69・70	切合い関係なし SB31に切られる。 切合い関係なし 切合い関係なし SB31に切られる。 切合い関係なし SB330に切られる。 切合い関係なし	N-2°-E	柱抜取りから鴻臚館式瓦。 版築内から鴻臚館式軒丸瓦。 木簡・須恵器・漆器・籌木
C群 旧第III期	礎石建物SB31・330・32 SB50 推定南門基壇	SB31がSA303を切る SK38等の土壙に切られる 切合い関係なし	N-2°-E	土師器・越州窯系青磁など 9世紀後半10世紀代

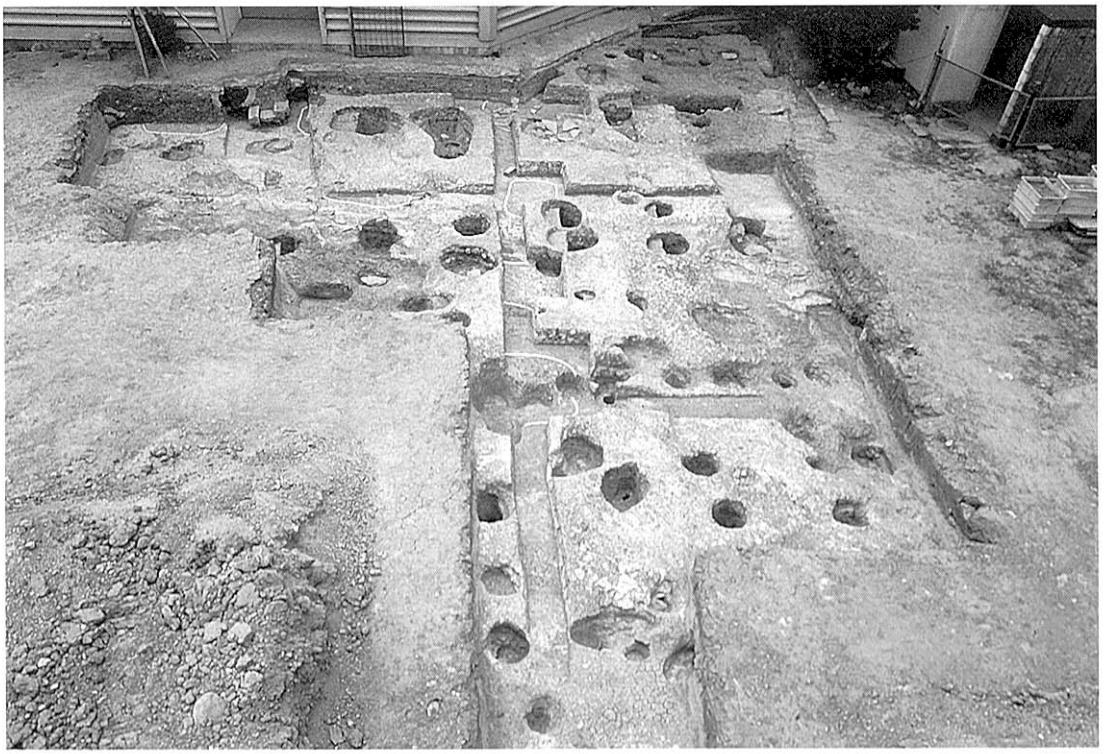
図　　版

(PLATES)



第28次調査作業風景（南東から）

PL. 1 ～PL. 3	第27次調査
PL. 4 ～PL.16	第28次調査
PL.17	第30次調査
PL.18	第Ⅰ期整備



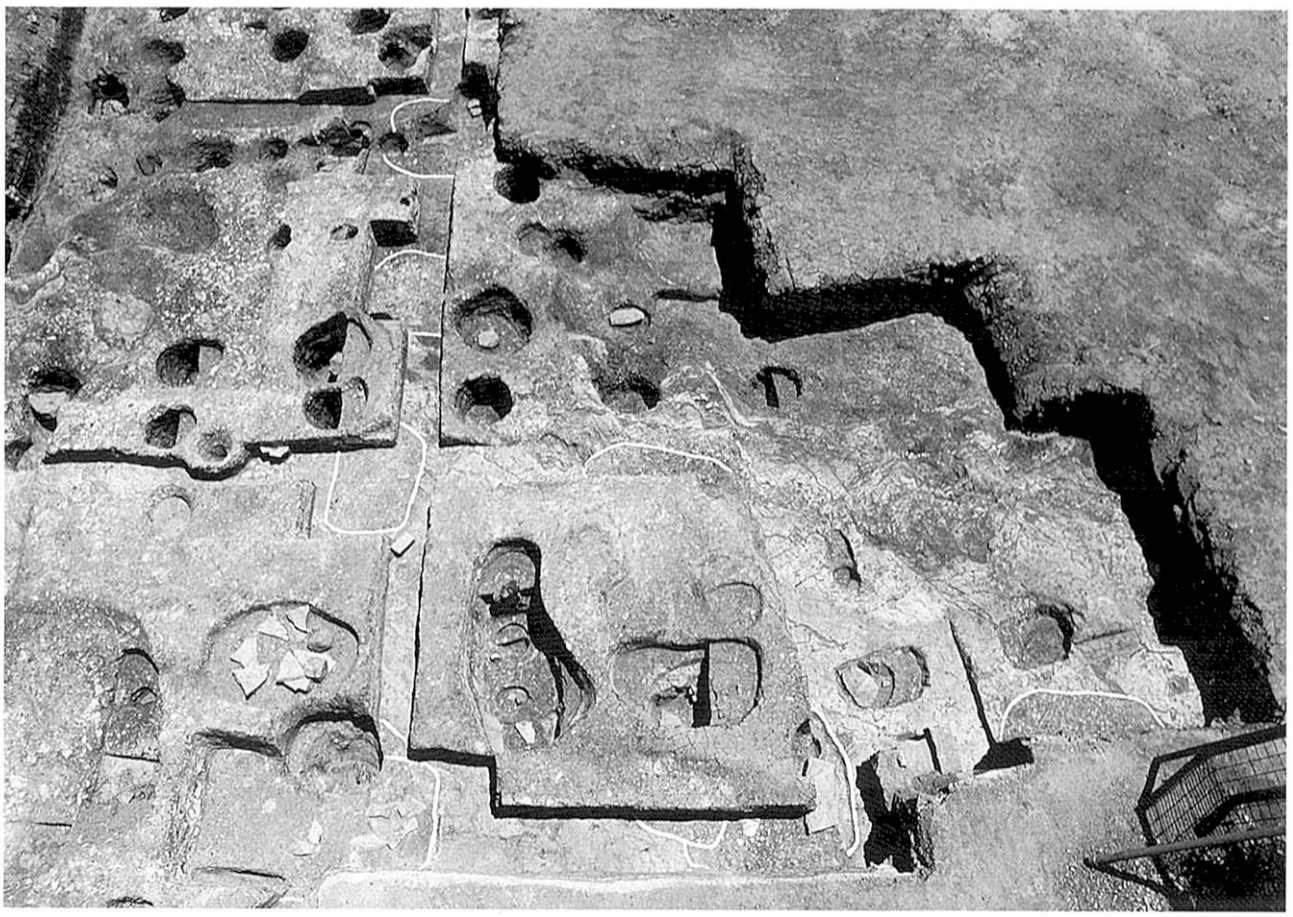
(1) 第27次調査区遺構分布状況(東から)



(2) 第27次調査区北西隅遺構検出状況(東から)



(1) 掘立柱建物SB324検出状況(南から)



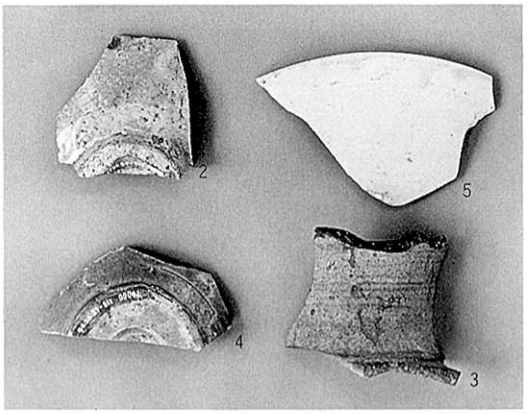
(2) 掘立柱建物SB324検出状況(西から)

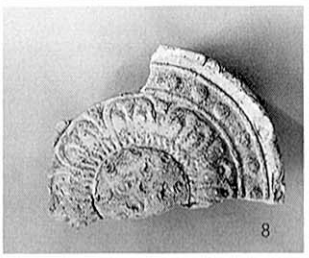


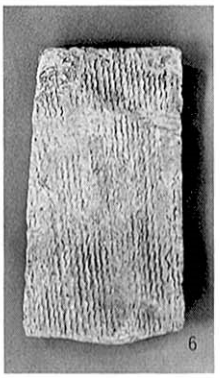
(1) 展示館内
炉跡SX1
39完掘状
況
(西から)



(2) 炉跡SX139側面状況(南から)







(3) 第27次調査出土遺物



(4) 野球場周回道路分布掘り遺構検出状況(西から)



(5) 布掘り遺構(西から)



(1) 第28次調査区調査前現況(北から)



(2) 平成５年度第22次調査状況(北東から)



(1) 第28次調査区全景(南から)



(2) 第28次調査区完掘状況(南から)



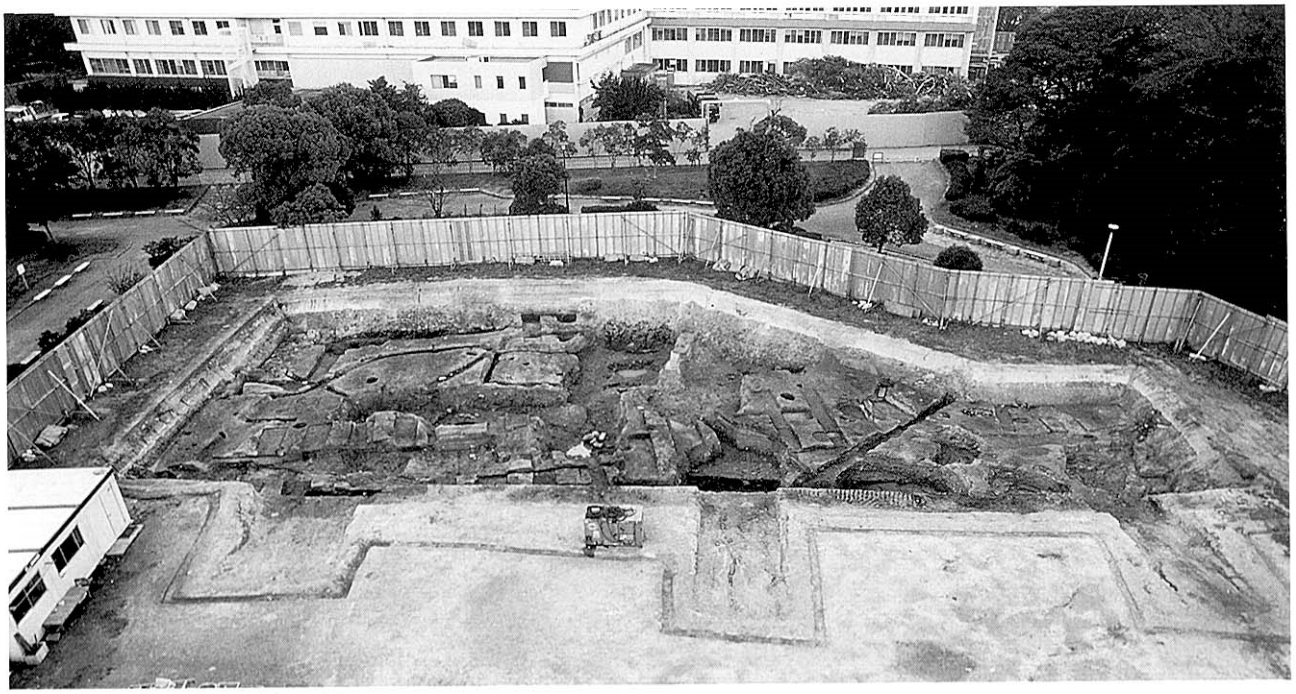
(1) 第１面西半部遺構検出状況(西から)



(2) 第１面西半部遺構検出状況(北から)



(3) 第１面東半部遺構検出状況(南西から)



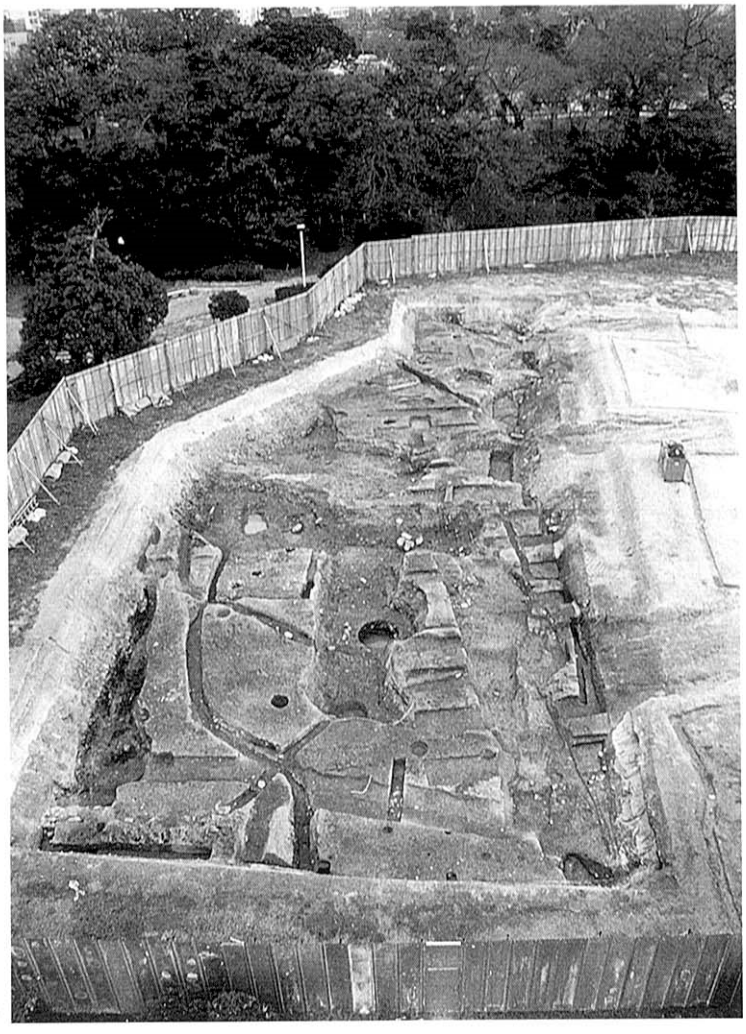
(1) 第２面遺構分布状況(南から)



(2) 第２面遺構分布状況(東から)



(1) 第２面西半部遺構分布状況(東から)



(2) 第２面遺構分布状況(西から)



(1) 西側部分土層断面(南から)



(2) 石列SA178検出状況(北から)



(1) 第４面西半部遺構分布状況(北から)



(2) 第３面真砂土整地面検出状況(東から)



(1) 土壙SX168掘下げ状況(北から)



(2) 土壙SX169掘下げ状況(南から)



(3) 石列SA178完掘状況(北から)



（1）石列SA166・178、溝SD165配置状況（西から）



（2）溝SD165、瓦礫群SX167部分拡大（西から）



（3）石列SA178北端基底部遺存状況（東から）



(1) 土壙SK170遺物出土状況(東から)



(2) 石列SA179遺存状況(東から)



(3) 溝SD173南壁石組み遺存状況(北から)



(4) 土壙SX174完掘状況(南から)



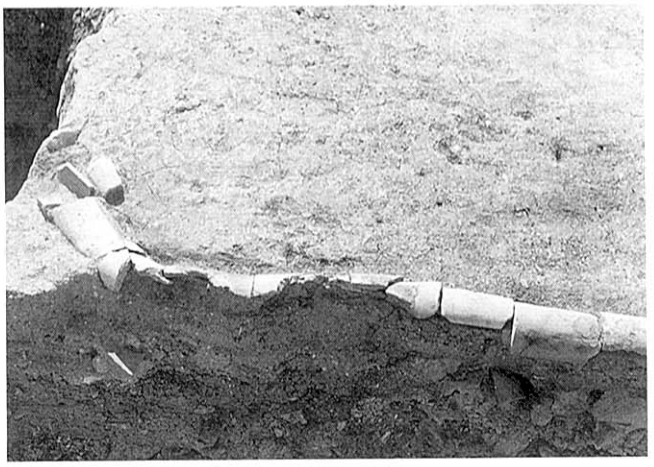
(5) 石列SA180、溝SD187検出状況(北から)



(6) 石列SA180、溝SD187検出状況(東から)

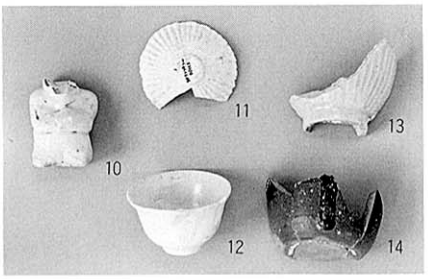


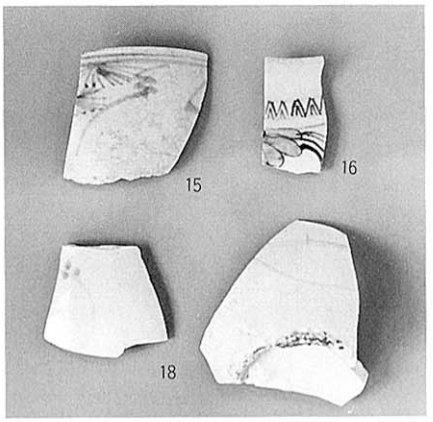
(7) 瓦組桝SX186出土状況(東から)

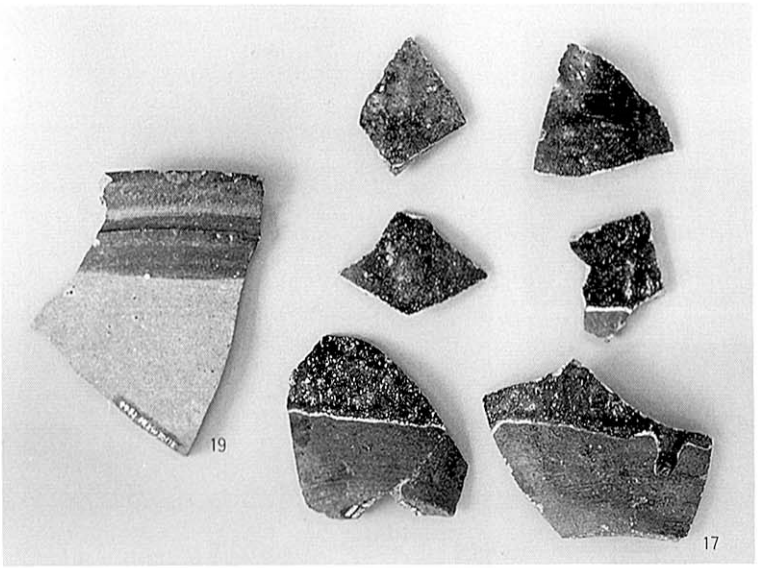


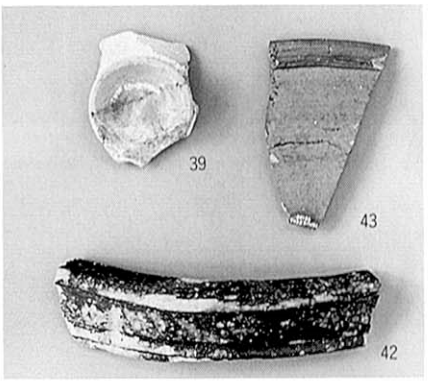
(8) 丸瓦組排水用暗渠SD181(北から)

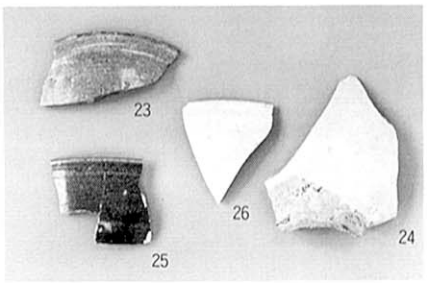


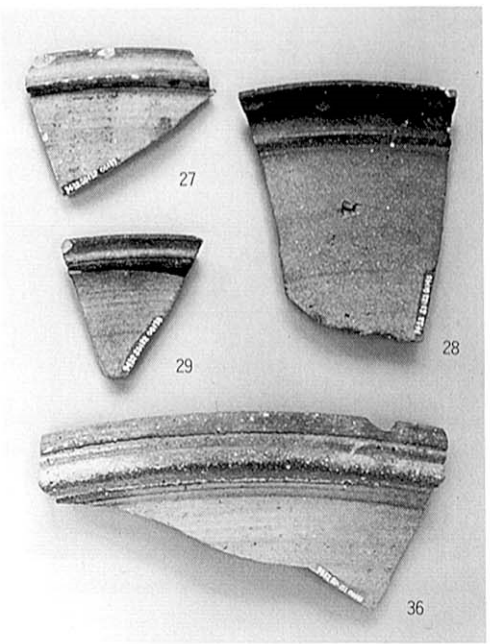


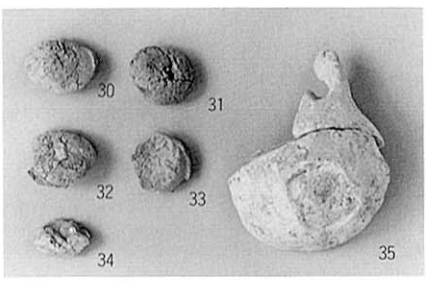






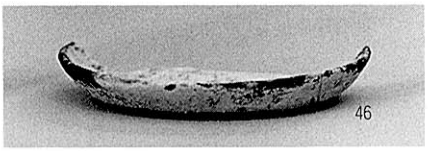


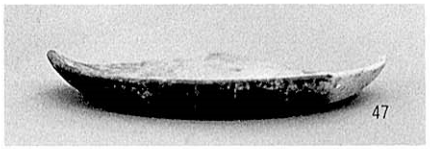


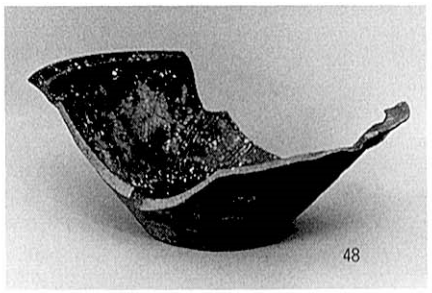


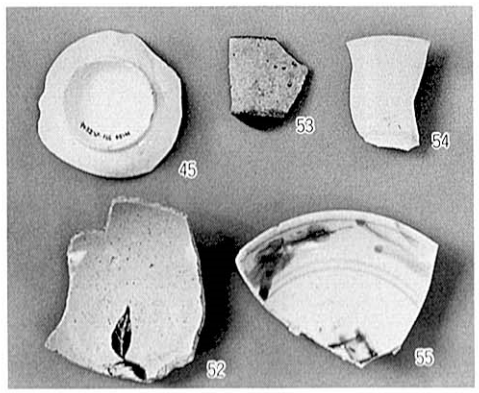


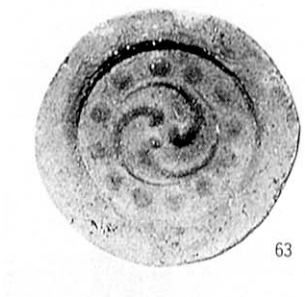
第28次調査出土遺物(1)

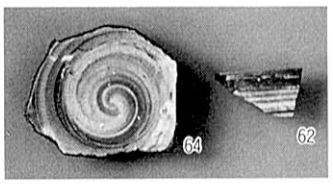


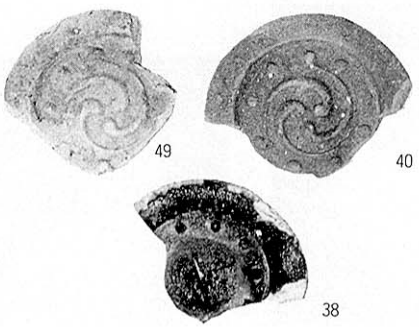


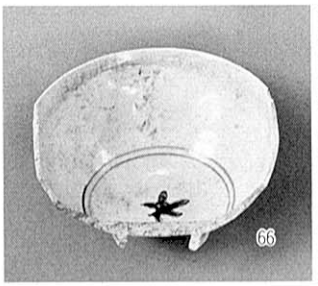


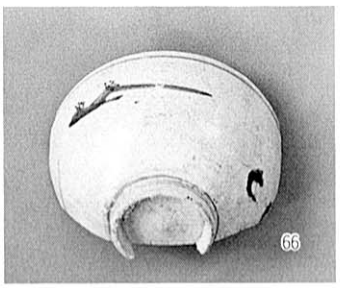


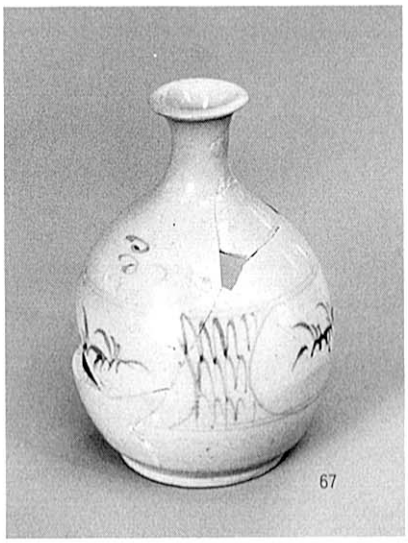


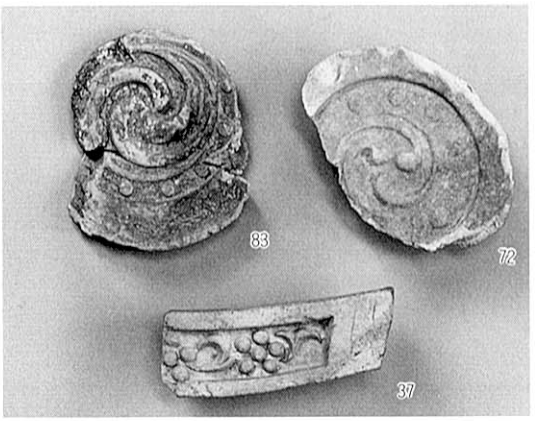




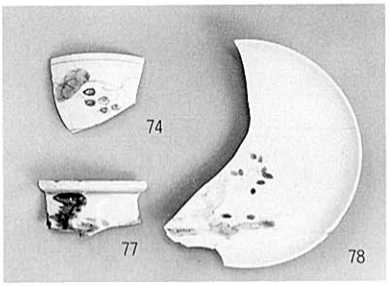


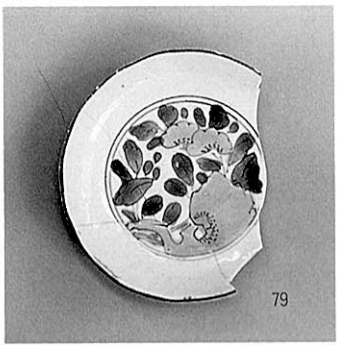


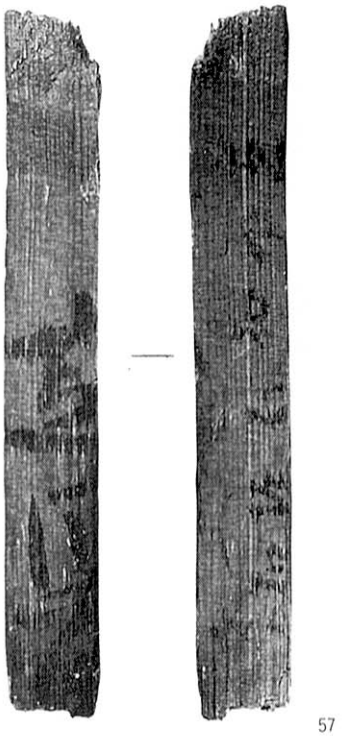


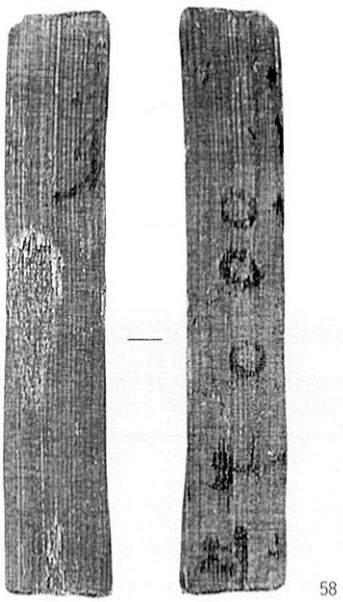


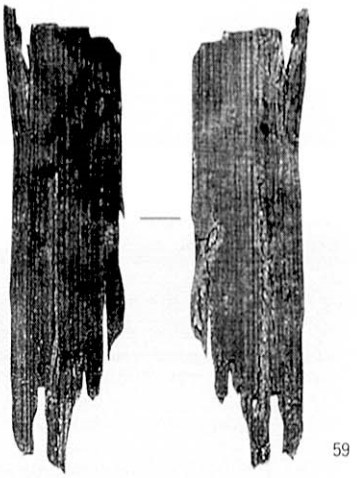
第28次調査出土遺物(2)

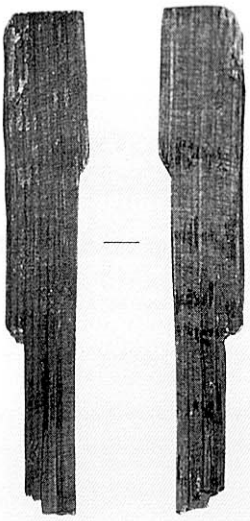


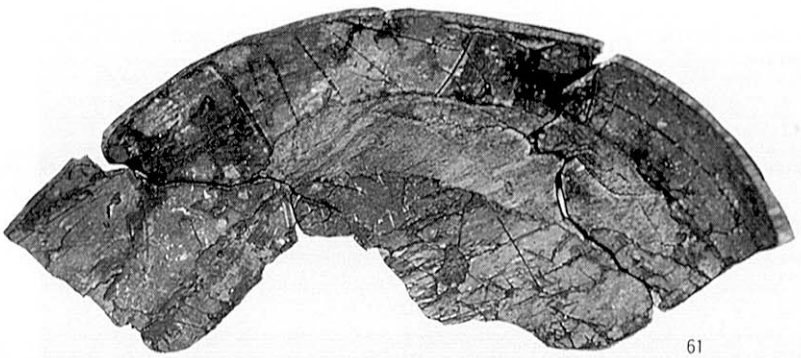




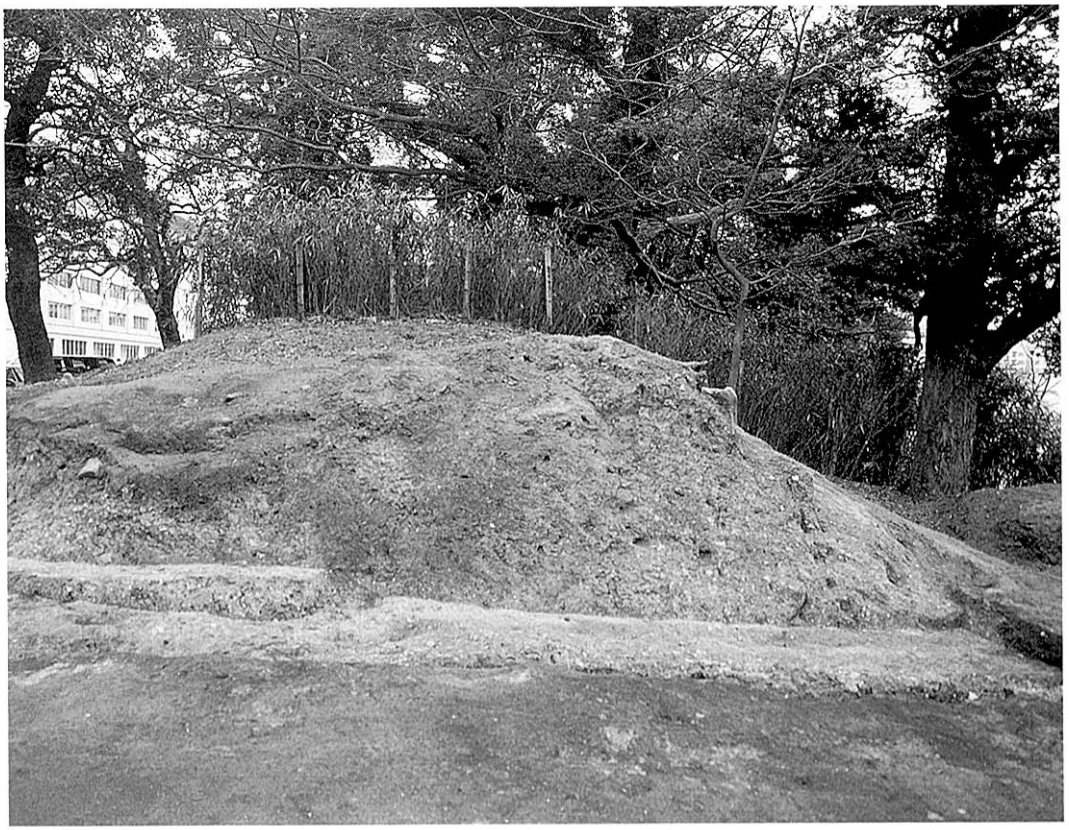








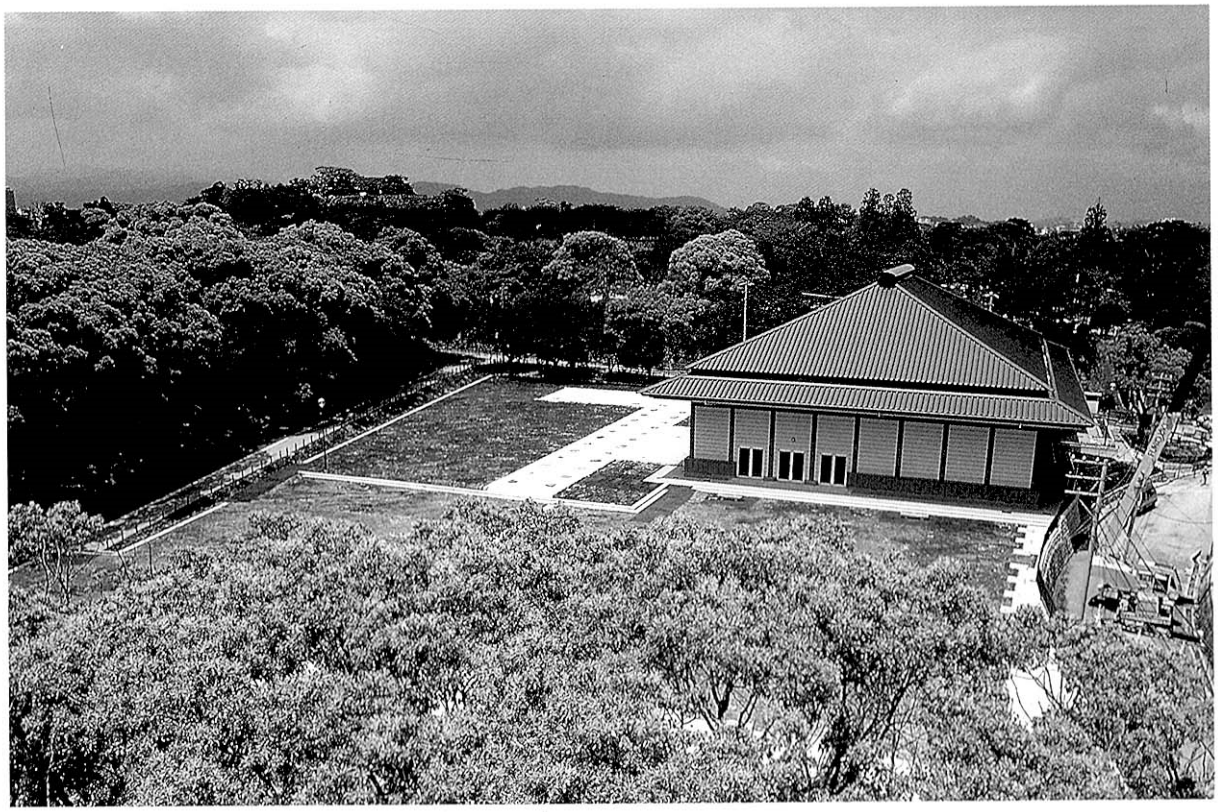
第28次調査出土遺物(3)



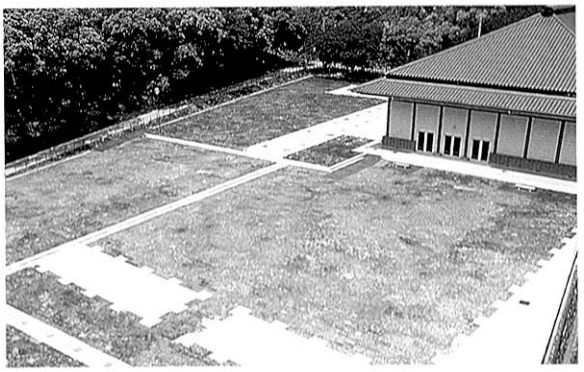
(1) 福岡城三ノ丸東郭南面土塁現状(西から)



(2) 断面観察用トレンチ掘下げ状況(北から)



(1) 展示館および館外の遺構整備完成状況(北東から)



(2) 遺構整備状況
(第Ⅰ期東門跡と塀布掘り地業跡の表示)(北東から)



(3) 展示館および遺構整備状況
(第Ⅲ期礎石建物跡の表示)(南東から)

鴻臚館跡 6

－ 平成６年度発掘調査概要報告 －

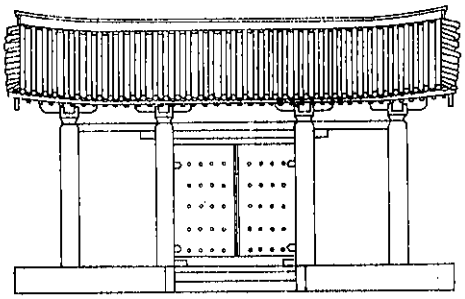
福岡市埋蔵文化財調査報告書

〈第486集〉

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
平成８年３月15日
印　刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10－15

KŌROKAN
6

Excavation and Studies of
Kōrokan Ruins
in Fukuoka



March 1996
THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN